大泉村埋蔵文化財調査報告　第14集

寺　所　遺　跡

（第２次発掘調査報告）

――特定環境保全公共下水道事業終末処理場
（いずみの里公苑）建設に伴う発掘調査報告――

2000. 3

大泉村教育委員会

大泉村埋蔵文化財調査報告　第14集

寺　所　遺　跡

（第２次発掘調査報告）

――特定環境保全公共下水道事業終末処理場
（いずみの里公苑）建設に伴う発掘調査報告――

2000．3

大泉村教育委員会

寺所遺跡全景

例　　言

1．本書は平成８年度実施の特定環境保全公共下水道事業終末処理場（いずみの里公苑）及び駐車場建設、平成11年度実施の放流渠管渠敷設に伴う寺所遺跡第２次発掘調査報告書である。
2．寺所遺跡は山梨県北巨摩郡大泉村西井出字堂敷314－1外に所在する。調査面積は7,585㎡を測る。
3．本調査は大泉村長　山田　進から大泉村教育委員会教育長　藤森勇夫が受託して実施したものである。
4．本報告書の執筆は第３章の平安時代の遺物についての記載及び第４章１、２を渡邊が、それ以外を伊藤が執筆し、伊藤が編集した。
5．今回の報告には掲載していないが平成６年度実施の地中レーダー探査業務を㈲テラ・インフォメーション・エンジニアリングに委託した。
6．公共系の基準点測量を㈲サンクス・エンジニアリングに、景観写真撮影を㈱フジテクノに委託した。
7．発掘調査及び報告書作成に当たっては次の諸氏、諸機関にご助言、ご指導を賜った。記して謝意を表したい。
　小野正文　小松隆史　鳥羽英継　中山誠二　新津　健　樋口誠司　平出一治　平野　修　森原明廣
　八巻與志夫　山下孝司（敬称略　五十音順）
　山梨県教育庁学術文化財課　山梨県埋蔵文化財センター
8．本報告書使用地図は国土地理院発行1/50,000八ヶ岳、韮崎をトレースしたもの、1/25,000谷戸、大泉村役場発行1/5,000地図である。
9．本調査の出土品、諸記録は全て大泉村歴史民俗資料館に保管している。

凡　　例

・遺構の名称については調査時のものを使用して記述しているが、住居跡内のピット番号は整理時に振り直している。
・遺構、遺物の縮尺は以下の通りである。
　住居跡―1/60、カマド・その他の施設詳細図―1/30、土坑―1/40、
　遺物実測図のうち古銭―1/2、その他の遺物実測図―1/3。
　上記以外の図面についてはその都度縮尺を標記しておいた。
・遺構断面図中の基準線脇の数字は標高を表し、特に指示のないものは同一図版中では同一の標高であることを示している。
・遺構平面図中の１点鎖線は覆土中の焼土の分布を表し、カマド、及び被熱赤変部分は網で表現した。
・遺構平面図中の２点鎖線は床面の変調を示し、その内容については説明を入れた。
・縄文土器実測図中の断面の網掛けは胎土に繊維を含むことを表している。
・平安時代遺物実測図中の断面網掛けは灰釉陶器を、断面黒塗りは須恵器であることを示している。また、土師器杯の黒色処理は網掛けで表示した。
・文中では黒色処理された土師器（黒色土器）を「信州系」という語で一括して表現する場合があるが、ここでは「甲斐型」に対する語として便宜的に使用するものである。
・灰釉陶器の年代等については文化庁美術工芸課 齋藤孝正氏のご教示による。
・土層注記の色調は黒味の強いものから黒色→黒褐色→暗褐色→褐色→暗黄褐色→黄褐色を用いた。また、混入物は炭化物粒子をＣ、焼土粒子をＦ、ローム粒子をＲと表記し、その多寡を多→含→少→微で表記した。
・遺物観察表中の土器の色調については『新版標準土色帖』1998年版（農林水産省農林水産技術会議事務局他監修）を使用した。
・その他のものは必要に応じてその都度標記しておいた。

目　　次

巻頭図版
例　　言
凡　　例
目　　次

第１章　調査の経過……1
　1　調査に至る経緯と経過……1
　2　調査の方法……1
　3　調査組織……3
　4　調査参加者……3

第２章　遺跡の立地と環境……4
　1　地理的環境……4
　2　歴史的環境……4

第３章　調査の結果……7
　1　層　　序……7
　2　発見された遺構と遺物……7
　　縄文時代の遺物……7
　　平安時代の遺構と遺物……8
　　その他の遺構と遺物……37
　　1）土　坑……37
　　2）竪穴状遺構……41
　　3）溝状遺構……41
　　4）その他の遺物……41

第４章　結　　語……44
　1　寺所遺跡出土の文字資料について……44
　2　寺所遺跡43号住居跡出土の武蔵型甕について……45
　3　寺所遺跡のカマドの掘り方について……46
　4　寺所遺跡のカマド周辺施設について……46
　5　寺所遺跡の平安時代集落の広がりと群別について……47
　　参考文献……52

写真図版

第１章　調査の経過

1　調査に至る経緯と経過

大泉村では平成５年度より下水道事業の基本構想策定がスタートし、平成６年度には基本計画、平成７年度には実施設計が策定され、いよいよ平成８年度より管渠敷設工事に着工している。この間平成６年度には終末処理場の位置がほぼ確定し、事業課（平成８年４月より機構改革により環境課下水道係、それ以前は振興課下水道係）より村教育委員会に対し当該地における埋蔵文化財の所在について照会があった。当該地は昭和54年度県営圃場整備事業西井出下第１工区施工に伴い発掘調査された寺所遺跡の所在地、及びその隣接地であった。当然この隣接地にも既調査区でその存在が明らかとなった平安時代集落跡が広がっていることが予測された。村教育委員会はその密度、及び範囲を把握するため平成７年３月に国庫補助事業として事業予定地のうち未調査部分全域を対象として地中レーダー探査を実施した。その結果、それほど密度は濃くはないものの、ほぼ全域に渡って遺構が分布することが予測されるに至った。

この結果を受けて事業課と村教育委員会で協議し、他の事業との調整の結果、平成８年度に発掘調査を実施すること、その際の調査範囲は原則的に駐車場を含む構造物部分とし、残地林は調査しないことで合意された。また、予算執行に当たっては事業課から教育委員会が発掘調査を受託する形で進めることとなった。

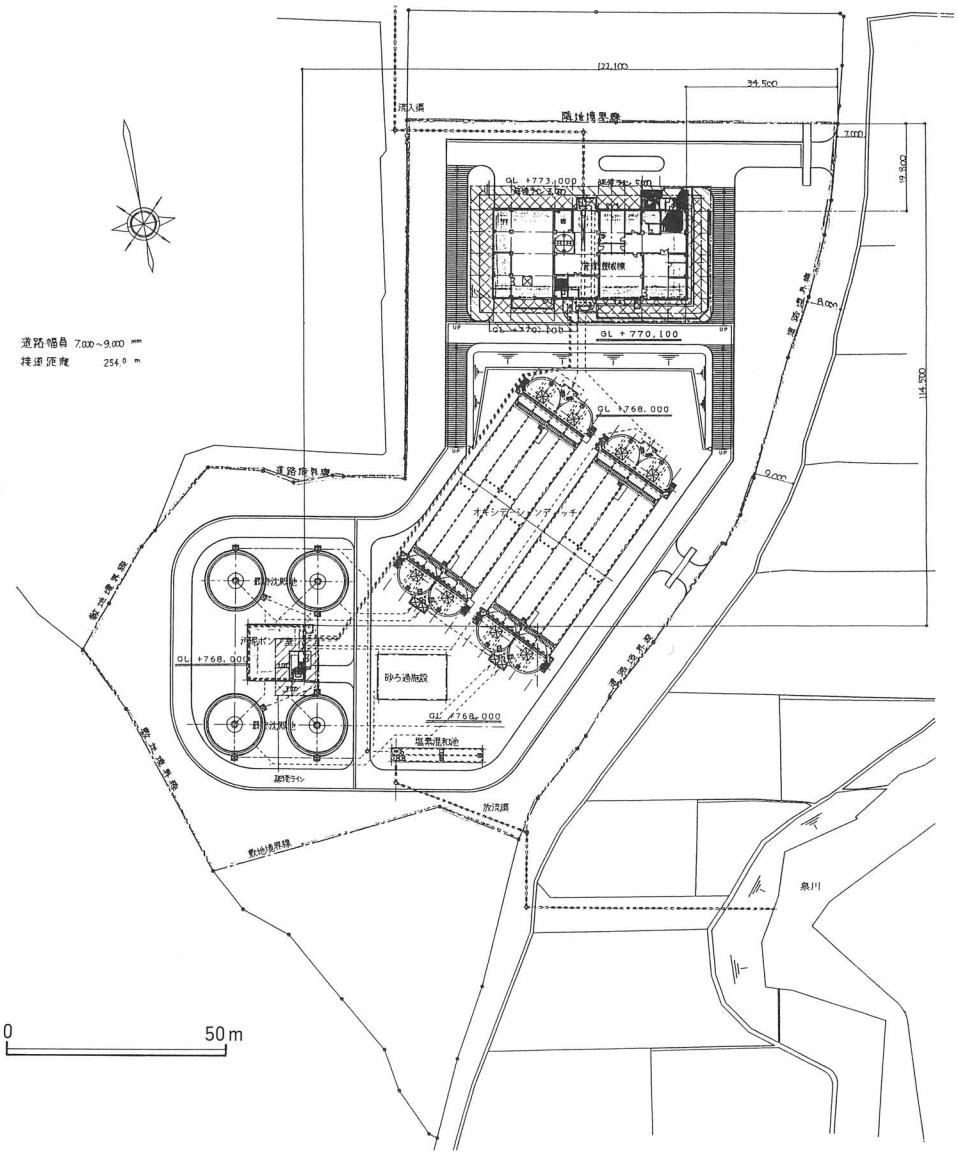
平成８年度に入り、４月15日付で事業課より埋蔵文化財発掘の通知が提出され、また、同日付で村教育委員会より文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。また、６月３日付で大泉村長と村教育長間で埋蔵文化財発掘調査業務受託書を締結し、11月19日付で受託金額の変更に伴い変更受託書を締結している。現地での調査は６月17日から着手し、その工期は12月20日までを設定していたが、実際の現地調査は11月22日に終了し、11月29日付で埋蔵文化財保管証を山梨県教育長宛に、同日付で埋蔵物の発見届けを長坂警察署長宛に提出している。整理作業については平成８年度中に遺物洗浄、注記まで終了し、平成11年度にその他の整理作業、報告書の編集作業に着手した。

終末処理場本体の工事に伴う調査は以上の経過であったが、その後、平成10年に入り汚水処理後の放流渠の管渠敷設部分について未調査であることが判明した。そのため平成11年１月５日付で事業課より埋蔵文化財発掘の通知が提出され、平成11年２月15日に試掘調査を実施されるに至った。また、同日付で埋蔵文化財発掘調査の報告を文化庁長官宛に提出している。この調査結果についても調査された期間に開きはあるものの同一敷地内であることと同一事業であることから今回併せて報告するものである。

なお、本遺跡は前述のとおり昭和54年に県営圃場整備事業に伴い発掘調査された上で今回の調査に臨んでいることから、前回調査分を第１次調査、今回の調査を第２次発掘調査と呼称する。また、遺構の名称については調査主体、調査目的、調査期間共に異なることから別個にするべきかもしれないが、同一の敷地を含むことから混乱を避けるため第１次調査の続き番号を使用して調査に当たっている。以下調査時の名称で記述を進めることとする。

2　調査の方法

第２次発掘調査の範囲は先述の通り、駐車場部分を含む構造物部分とし（但し、第１次調査範囲は除く）、



第１図　事業計画地と工事計画図

その範囲の立木の伐採は事業課サイドで実施している。その後、村教育委員会が発掘調査業務受託書締結後に重機により表土を除去し、調査に着手している。

調査は業者委託により公共系座標に沿った10ｍグリッド（西～東にＺ・Ａ～Ｍ、北～南に１～11）を設定し、それを基準に測量図を作成した。測量図は主に平板測量で作成し、全体図を1/100、各遺構図を1/20で作成した。また、必要に応じてカマド等の微細図は簡易遣り方により1/10で作成している。原点は谷戸字金生（金生公園内）に設置してあるものを移動して調査に当たった。

3　調査組織

平成８年度

教育長　藤森勇夫　教育課長　小池光和　教育係長　新藤　恵　調査担当　伊藤公明

平成11年度

教育長　藤原　昭　教育課長　新藤　恵　教育係長　浅川正人　調査担当　伊藤公明　調査員　渡邊泰彦

4　調査参加者（敬称略　順不同）

相吉よしゑ　浅川達子　浅川ちづ子　浅川日出子　浅川久代　浅川房子　浅川洋子　進藤キクエ　進藤たかね　藤森里美　藤森秀子　藤森八千代　細田絹代　三井明美（以上一般）

安倍雅史　大石亮子　岡田　麗　加藤美和　金井克仁　岸村顕広　木下宗一郎　熊谷賢一　国武貞克　滝澤美穂子　田野裕之　芳賀俊之　細川太輔　松尾聡子　山岸広輔（以上東京大学）　古川優貴（東京女子短期大学）山下大輔（信州大学）浅川　実（法政大学）井口照仁　伊藤　剛　餌取義之　木村忠義　河野健太郎　庄司由紀夫　西片　覚　渡辺俊介　渡辺　修（以上東海大学）

第２章　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

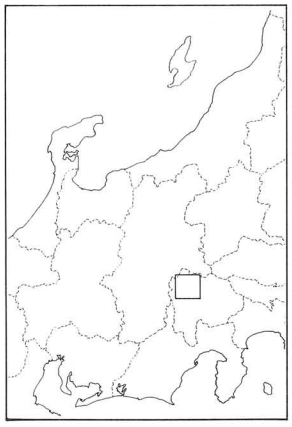
大泉村は八ヶ岳南麓の中央に位置し、八ヶ岳の主峰赤岳の山頂で長野県と接する。この八ヶ岳は南北21㎞に渡り、赤岳をはじめ2,000ｍ級の火山が列をなす複式火山であり、天狗岳以南の南八ヶ岳火山群と以北の北八ヶ岳火山群とに二分される。また、八ヶ岳西南麓～東麓は緩斜面の火山麓扇状地で、中期～後期更新世初期にかけての礫層で形成されている。この八ヶ岳南麓台地は形態的には甲府盆地に突き出た半島状の形状を呈している。この台地の東西を大地溝帯が走り、「七里ヶ岩」と呼ばれる比高100ｍに及ぶ急崖を形成している。この段層に沿って西を釜無川が、東を塩川の支流の須玉川が流下している。この台地は地形的には八ヶ岳の山体部と、それから続く山麓緩斜面部とに大別され、この変換点（標高1,000～1,500ｍ付近）に位置する多数の湧水により開析された南北方向に伸びる尾根地形が緩斜面部に発達している。また、韮崎泥流と呼ばれる八ヶ岳の山体崩落に伴う流れ山地形がこの台地上の標高600～800ｍにかけて特に発達している。この緩斜面部の尾根上、流れ山地形には縄文時代以降多数の遺跡が立地している。今回報告する寺所遺跡もその典型である。

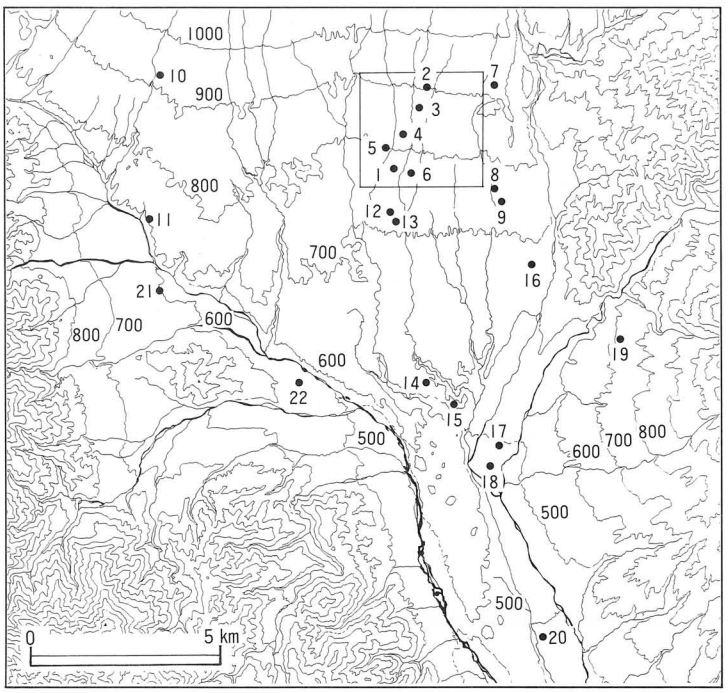
２　歴史的環境

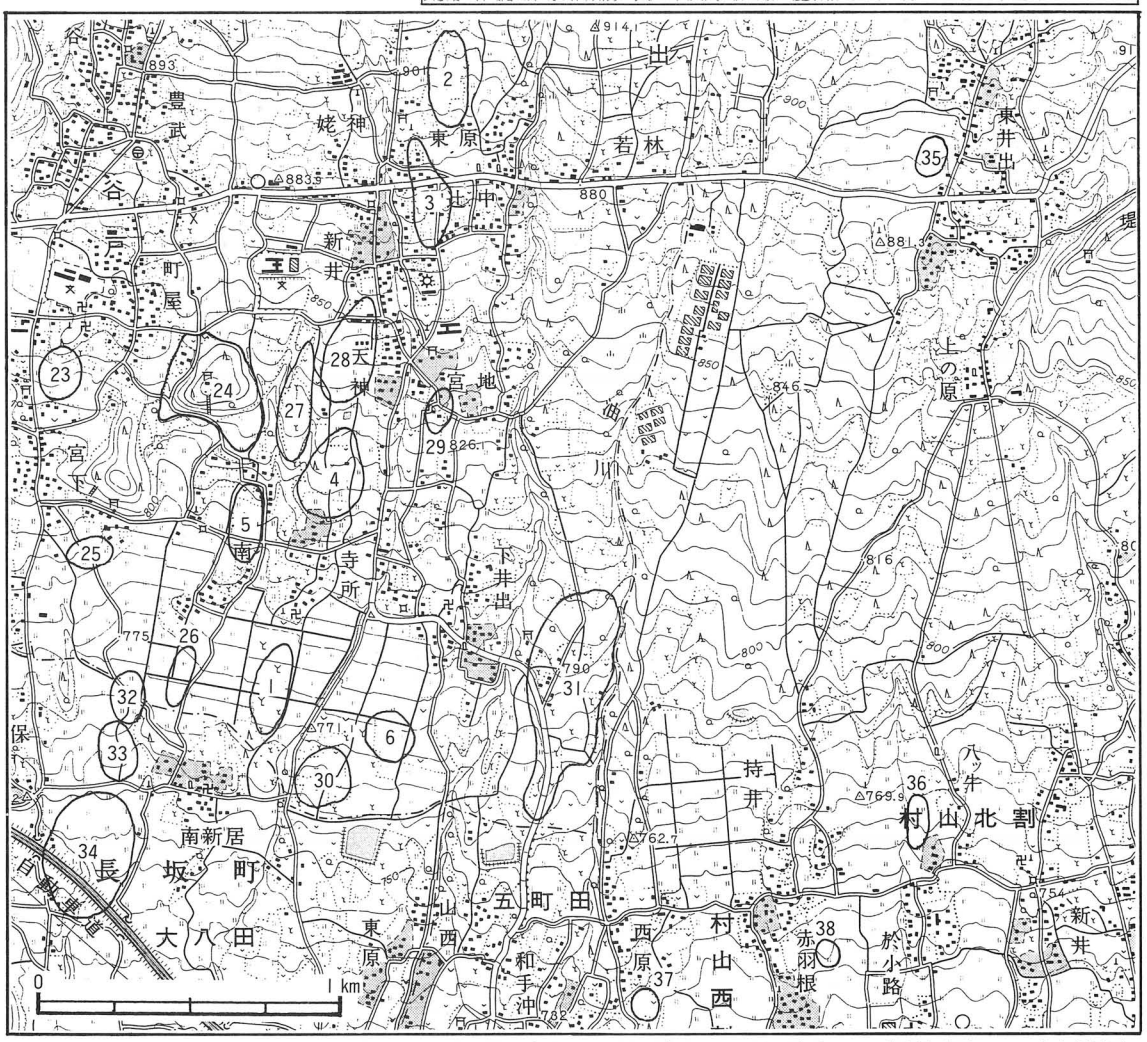
八ヶ岳の西南～南麓は長野県富士見町の井戸尻遺跡群をはじめとして縄文時代の遺跡の多数立地する地域として著名である。大泉村にも多数の縄文時代の遺跡が残されており、現在までに天神遺跡、古林第４遺跡、姥神遺跡、寺所第２遺跡、甲ッ原遺跡等の大規模な遺跡が調査された他、金生遺跡が国の史跡に指定され保存され、整備、公開されるに至っている。近隣でも柳坪遺跡、頭無遺跡、酒呑場遺跡、長坂上条遺跡（長坂町）、中原遺跡（小淵沢町）、石堂Ｂ遺跡、青木遺跡、社口遺跡、次郎構遺跡（高根町）等の学史的に著名、あるいは縄文集落研究上欠くことのできない大規模な遺跡が多数調査されている。

また、この地域には平安時代～中世の遺跡も多数立地している。大泉村内で調査された平安時代の主な遺跡を列記すると今回報告する寺所遺跡の他、城下遺跡、原田遺跡、木下・大坪遺跡、東姥神遺跡、東原遺跡、寺所第２遺跡等がある。また、近隣でも柳坪遺跡、石原田北遺跡、小和田遺跡(長坂町)、上平出遺跡、前田遺跡（小淵沢町）、薬師堂遺跡、東久保遺跡、青木北遺跡、湯沢遺跡（高根町）等が調査されている。これらの遺跡の多くは９世紀半ば以降成立し、10世紀半ばには消滅している。これらの時代背景としては律令政府によって打ち出された私有財産を認める政策の推進により進んだ農民層の階層分化と、その矛盾を解消するために進められた政策の変更という大きな日本史的流れに沿ったものと考えられる。

中世の遺跡については源義清、清光父子の甲斐国配流に始まる甲斐源氏の台頭とは無関係には語れない。残念ながら具体的に跡付ける資料には欠けるものの、この地域には多くの伝承が残されている。治承４年に北条時政が甲斐源氏に平氏追討に加わるよう要請したと伝えられる「逸見山」の比定地で、国の史跡にも指定されている谷戸城跡をはじめ、若神子城跡、その他多くのこの当時の伝承を持った神社仏閣が存在する。民話・伝承の合理化等の問題もあるものの、この地域の歴史の一端を窺わせるものである。また、戦国大名武田氏の家臣堀内下総守の居館と伝えられる県指定史跡深草館跡をはじめ小和田館跡、小和田遺跡、谷戸氏館跡等の多くの遺跡が現在までに調査されている。

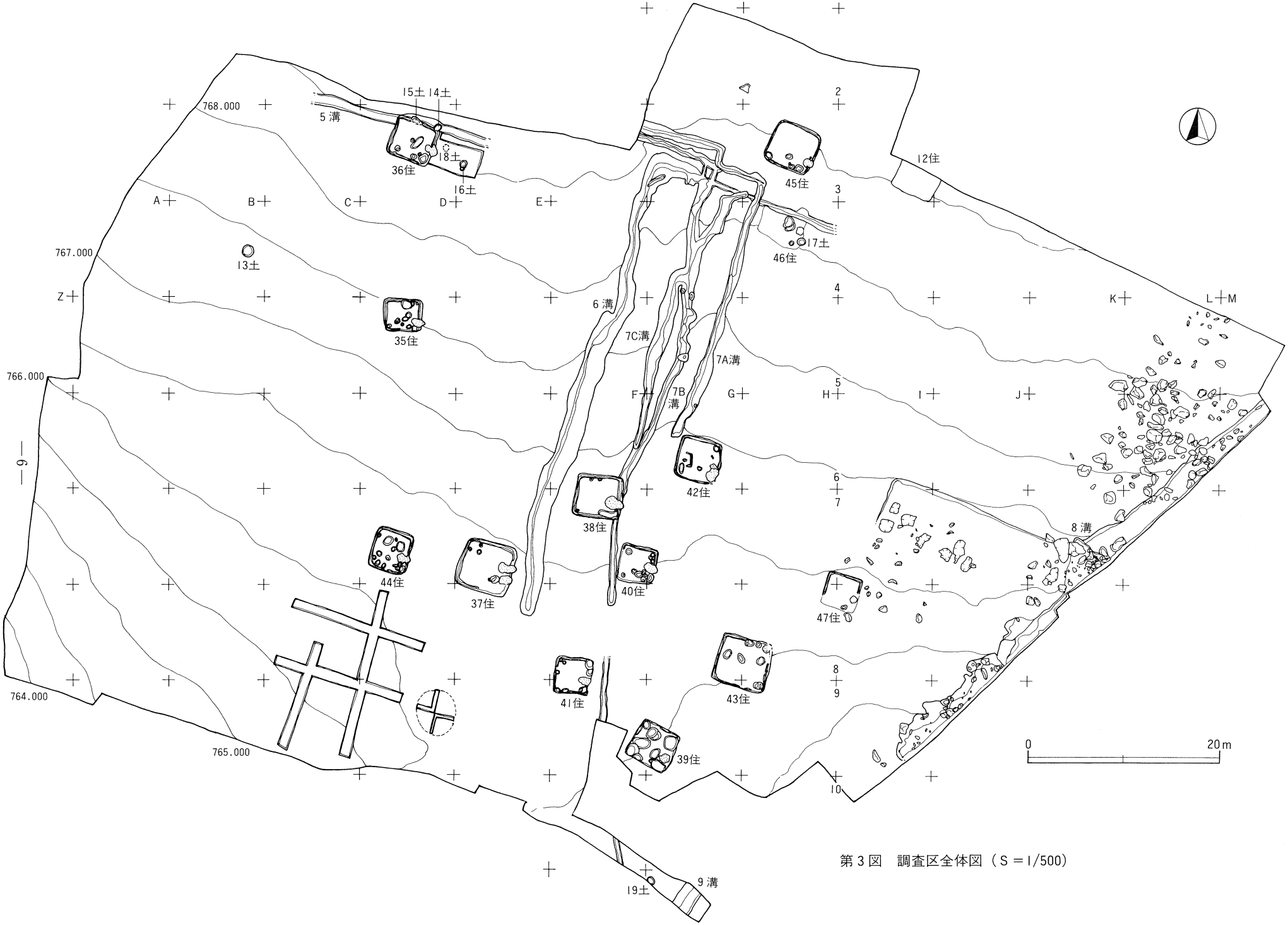






1　寺所遺跡　2　東原遺跡　3　東姥神遺跡　4　寺所第２遺跡　5　城下遺跡　6　原田遺跡　7　薬師堂遺跡　8　東久保遺跡　9　青木北遺跡　10　上平出遺跡　11　前田遺跡　12　柳坪遺跡　13　石原田北遺跡　14　湯沢遺跡　15　大小久保遺跡　16　西川遺跡　17　腰巻遺跡　18　大豆生田遺跡　19　上ノ原遺跡　20　宮の前遺跡　21　所帯遺跡　22　宮間田遺跡　23　谷戸氏館跡　24　史跡谷戸城跡　25　豆生田第３遺跡　26　史跡金生遺跡　27　山崎第４遺跡　28　天神遺跡　29　宮地第２遺跡　30　木ノ下・大坪遺跡　31　甲ッ原遺跡　32　大八田原田遺跡　33　小和田遺跡　34　小和田館跡　35　石堂Ａ遺跡　36　八ッ牛遺跡　37　西原遺跡　38　藤林寺遺跡

第２図　周辺の地形と遺跡の分布



第3図　調査区全体図（S＝1/500）

第３章　調査の結果

１　層　　序

第２次調査区では表土の流出が著しく、10～15㎝の表土層の直下はほとんどの部分でローム層が露出しており、僅かに調査区南西部の一部で10㎝程の褐色土の間層が認められたにすぎない。この部分の遺構確認のためトレンチを配して調査したが、この部分からの遺構、遺物の検出は全くなかった。また、調査区北東部では直径１ｍを越す巨石が地表に露出するなど礫層が発達していたが、他の部分ではローム層以下の堆積は安定しており、排土用深掘りの土層断面観察によるとローム層上面より３ｍほどでＰｍ－１層が確認されている。

２　発見された遺構と遺物

今回の調査は、１次調査との重複167㎡を含む7,585㎡を発掘調査したが、この調査区から平安時代住居跡13軒（35～47号住居跡）、時期不明の土坑７基、近現代の溝状遺構５条（５～９号溝跡）、近世以降の竪穴状遺構１基が検出されている。遺物としては縄文時代土器、石器、黒曜石片、平安時代土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄製品、中世土師質土器等が出土している。その総量は整理箱８箱程度である。

縄文時代の遺物

寺所遺跡の所在するこの尾根は東西100ｍ以上、南北300ｍ以上を測る、この地域としては規模が大きく、安定したものであるが、第１次調査を含めて縄文時代の遺構、遺物は非常に少ないといえる。近隣には縄文時代前～中期にかけての大規模な遺跡、甲ッ原遺跡や、天神、寺所第２遺跡、あるいは史跡に指定されている縄文時代後～晩期の大規模な配石遺構を伴った金生遺跡が所在し、これらの距離は正に指呼の間である。このような条件下にある当遺跡で縄文時代の遺構、遺物が非常に少ない状況は、縄文時代の土地利用における規制、あるいは集団間の対峙した関係として注目されようか。同様の現象は宮地第３遺跡にも見られる(1)。

今回の調査では縄文時代の遺構は全く検出されていないものの、遺物は他の遺構やグリッドから僅かに出土している。第４図に今回の調査で出土した縄文時代の主な遺物を提示した。

１・２は胎土に繊維を含んだもので、無文であるが、縄文時代前期初頭のものか。１は器外面を丁寧になでる。２は粗く全面をなでる。３は羽状縄文が施文された口縁部片。胎土に繊維の混入は見られない。口唇直下には原体端末の圧痕が見られる。前期中葉の所産であろうか。４は中期初頭、五領ヶ台式の深鉢口縁部片。縄文施文後竹管状工具による沈線を施文。５は同浅鉢で、口縁部内面に３列の竹管連続押捺が見られ、下段には交互刺突が加飾される。６は中期中葉狢沢式。隆帯脇を幅広のものと幅の狭い角押文を施文。隆帯上も刻みが見られる。７は新道式か。隆帯脇に三角押しが見られるが、区画内は沈線化している。８は新道式。小型の深鉢の底部片。隆帯脇に三角押しが見られる。９は狢沢式の浅鉢口縁部片。幅の狭い角押し文が施文される。10～13は井戸尻式。10は大型の深鉢口縁部片。起点文が剝落している。14は曽利Ⅳ式。肥厚口縁を呈し、口縁部には楕円文が施文される。突起は剝落している。胴部は縦位条線施文。15は曽利Ｖ式。沈線による縦区画の中にハの字文が施文される。16～18は後期前葉、堀之内式。16は注口土器の破片で細かい

第４図　縄文土器（Ｓ＝1/3）

沈線により重四角文が施文される。17は深鉢頸部。区画内は磨り消し縄文。19は粗製の深鉢口縁部片。条痕状の擦痕が見られる。縄文晩期の所産であろうか。

(1)　第２図参照。

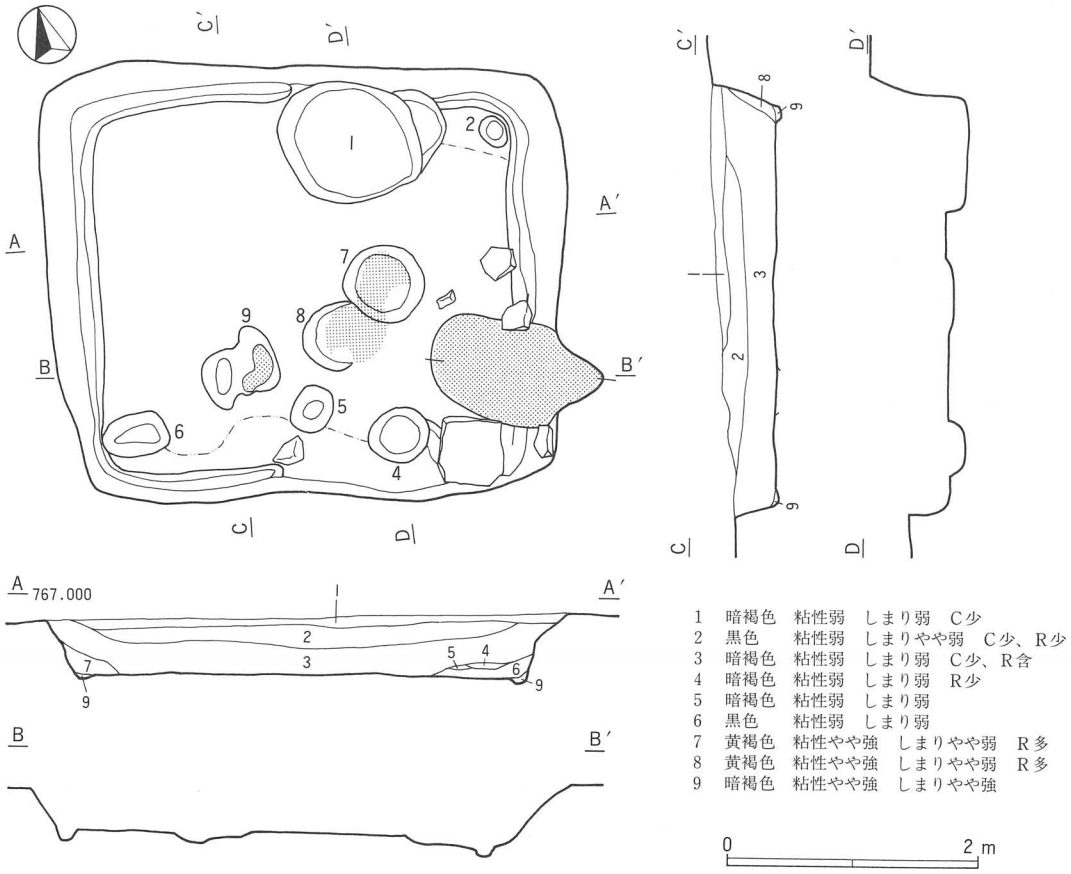
大泉村教育委員会・峡北土地改良事務所　1991　『宮地第２遺跡・宮地第３遺跡』

平安時代の遺構と遺物

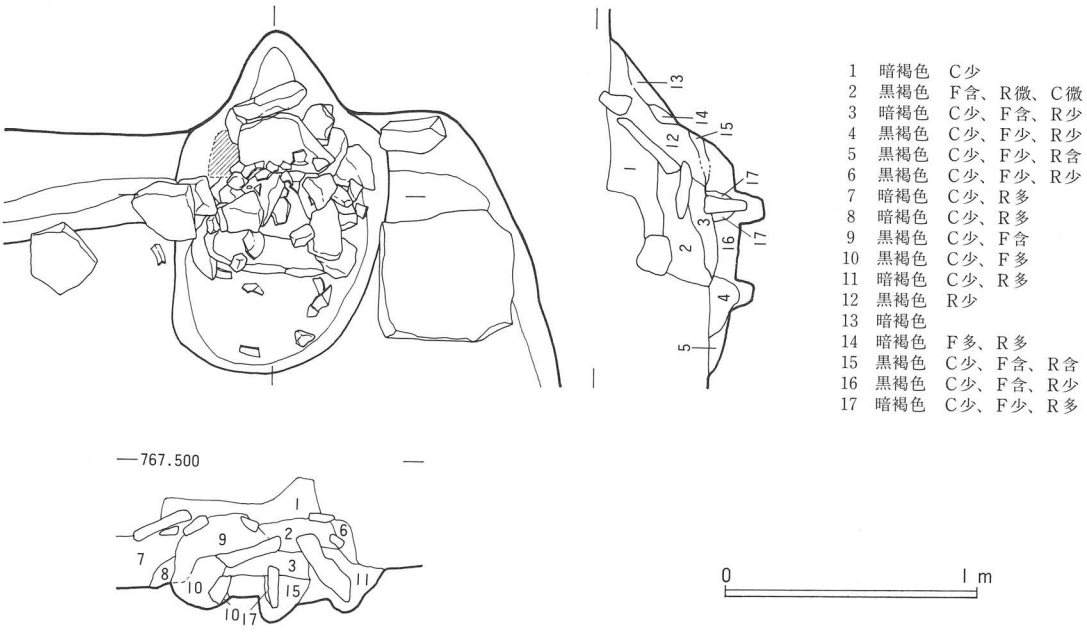
平安時代の遺構は前述のとおり住居跡のみである。ここでは調査時の遺構認定順に記載を進める。また、第１次調査で調査された遺構の再調査でも遺物が出土しているが、ここでは遺構外出土遺物として扱うこととする。

35号住居跡（第５・６・７・８図、第１表－１・第４表、図版２・16）

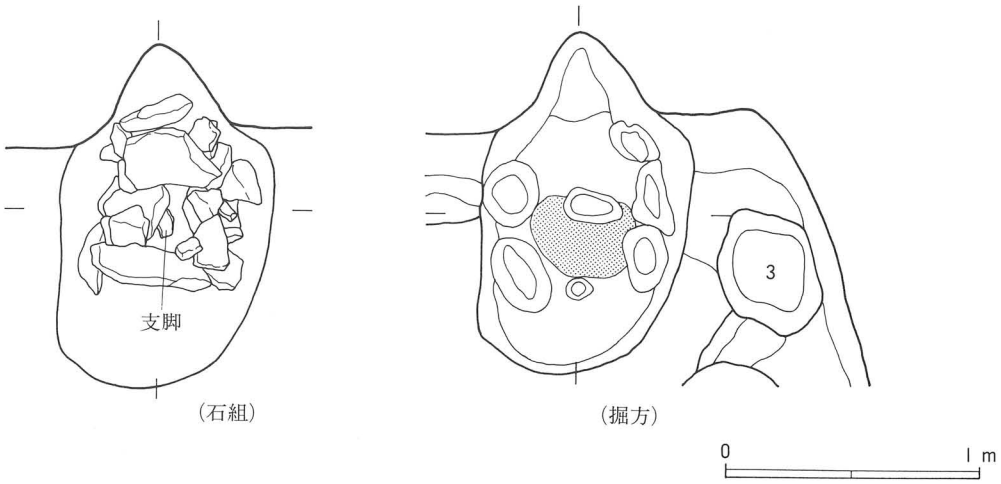
位置　Ｄ－５グリッド　規模　東西4.05ｍ、南北3.44ｍを測る。　覆土　確認面より最大50cmを測る。壁際



第5図　35号住居跡（S＝1/60）



第6図　35号住居跡　カマド(1)（S＝1/30）



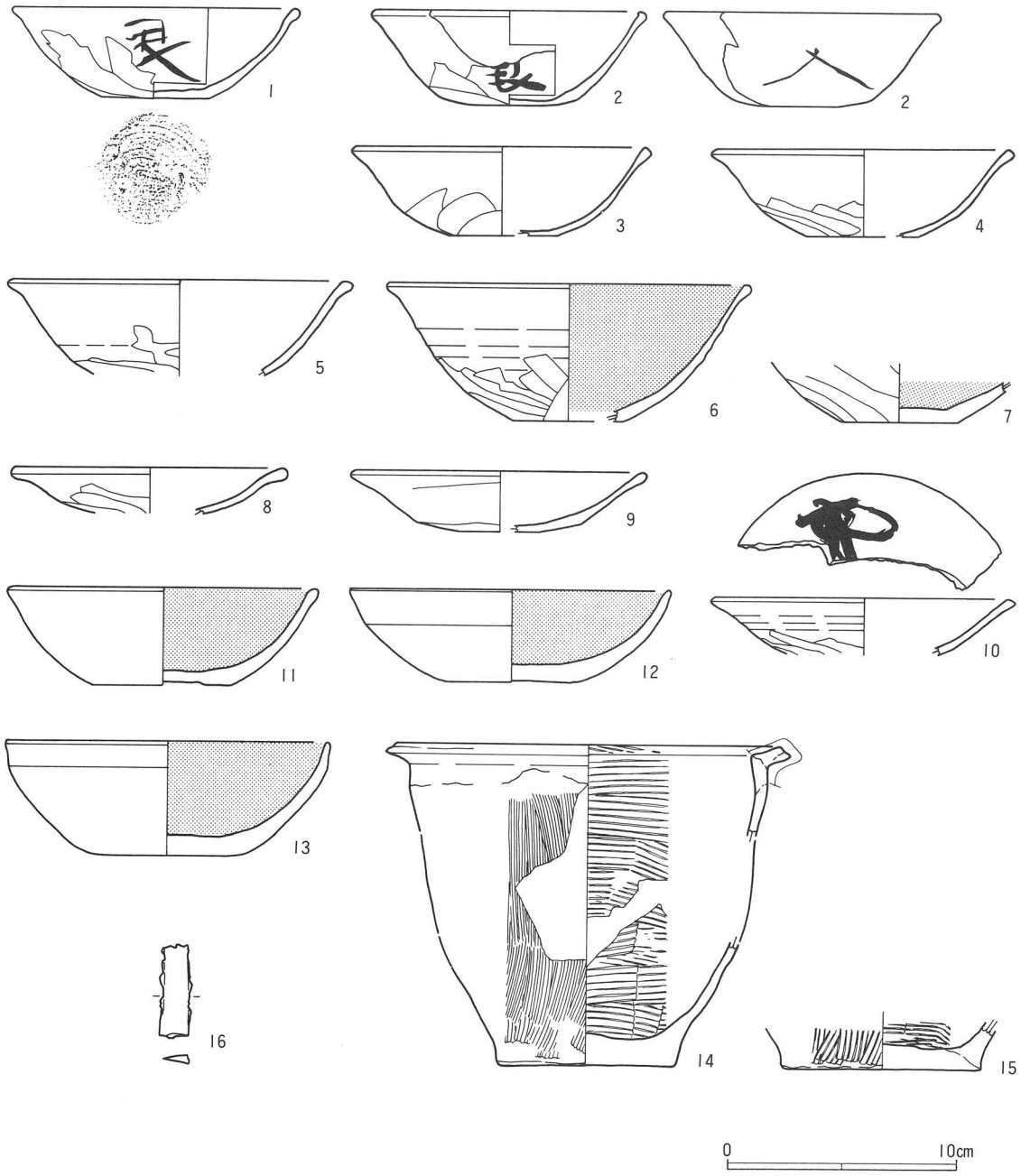
第７図　35号住居跡　カマド(2)（Ｓ＝1/30）

に三角堆積が見られる以外は水平堆積となっている。　**床面**　ほぼ水平に構築される。周縁部の一部を除いて堅緻。　**周溝**　北辺の一部、南辺の東半で途切れる。　**カマド**　住居跡東辺の南半に構築されている。掘り方の規模は135cm×82cmを測る。遺存状態は良好で、住居廃絶に伴う破壊は見られない。左袖が北側からの圧力で南に押し潰されたような状況が看取される。構築材は拳大～人頭大の自然礫と一部に白色粘土が使用されている。当初の燃焼部使用面は掘り方直上の地山被熱赤変から掘り方直上と考えられるが、最終的な使用面は灰等を掻き出さずに支脚頂部直下まで上昇している。　**柱穴**　住居跡外周部に小ピット４基が検出されている（ピット２・４・５・６）が、柱穴であろうか。　**その他の施設**　住居跡中央部に近接して底部の被熱赤変した地床炉状の浅い掘り込みが３基見られる（ピット７・８・９）が、囲炉裏等の暖房施設とするにはカマドとの位置関係、住居跡の規模から問題がある。生業に関わる何らかの施設と考えるべきか。住居跡北辺には直径約１ｍ、深さ15cmを測る略円形プランの浅い土坑（ピット１）が存在する。この機能については不明。覆土観察から単独の土坑ではなく、住居内の施設と判断した。また、住居跡南東コーナー、カマド右袖に接した浅い小ピット（ピット３）に一辺50cm程度の厚みのある石で蓋をしたような施設が検出されている。この石については下部の土坑の蓋石としての可能性もあるが、むしろ水平を意識して設置されていることから作業用の台石、あるいは棚状の施設として考えるべきか。　**遺物出土状況**　住居跡覆土中の遺物の出土は散漫であるが、カマド天井部上面に小破片となって集中して出土が見られた。

遺物　食膳具　甲斐型560ｇ、信州系480ｇ。煮炊具　甲斐型甕870ｇ。１は「艮」、２は「艮」と「入」の記号のようなもの、10は「東」？が墨書されている。３は外面のヘラケズリが向かって右上から左下の方向に行われている。９・10は黄褐色系の色調、砂を多く含んだ胎土という点で甲斐型土器とは異なるが両者とも体部外面にヘラケズリは行われている。11の内面は炭素の付着が不十分で灰色を呈し、ヘラミガキもほとんど行われていない。12・13は内面にミガキを施した黒色土器であるが、非常に厚手で他の黒色土器とは異なる特色を有する。両者ともカマドからの出土で、特に12は内面に何かと擦れてできた器面の荒れが一周する。16は刀子の破片か。

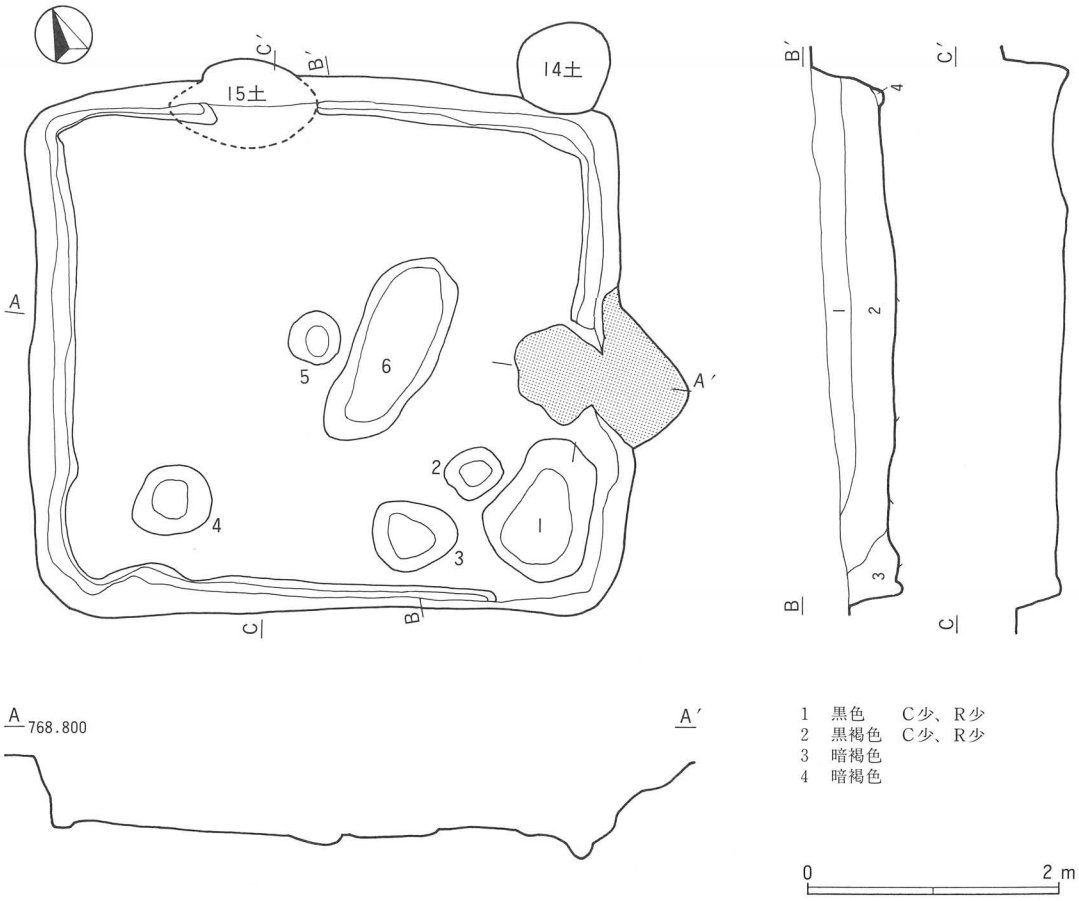
36号住居跡（第９・10・11図、第１表－１・第４表、図版３・16）

位置　Ｄ－３グリッド　**規模**　東西4.76ｍ、南北4.19ｍを測る。北辺の一部を14･15号土坑に切られる。　**覆**

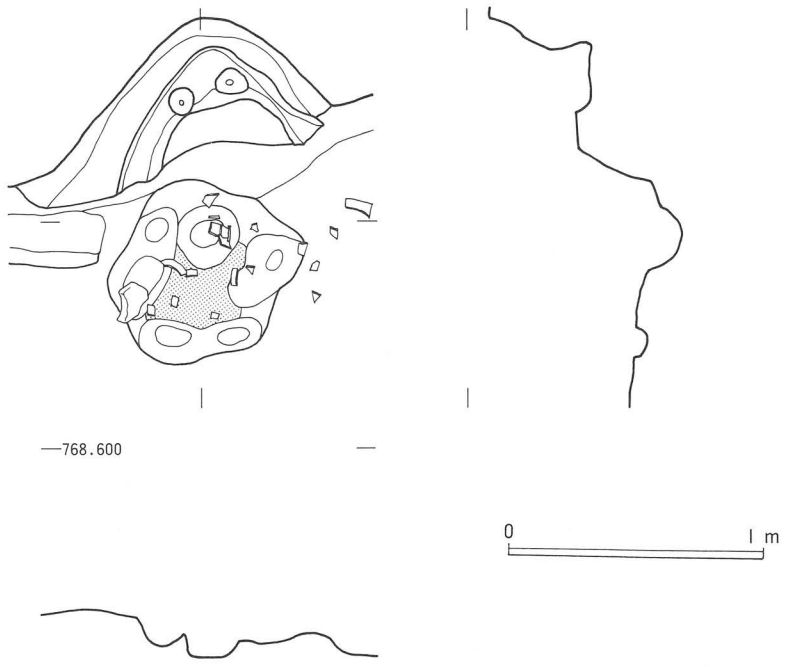


第８図　35号住居跡出土遺物（Ｓ＝1/3）

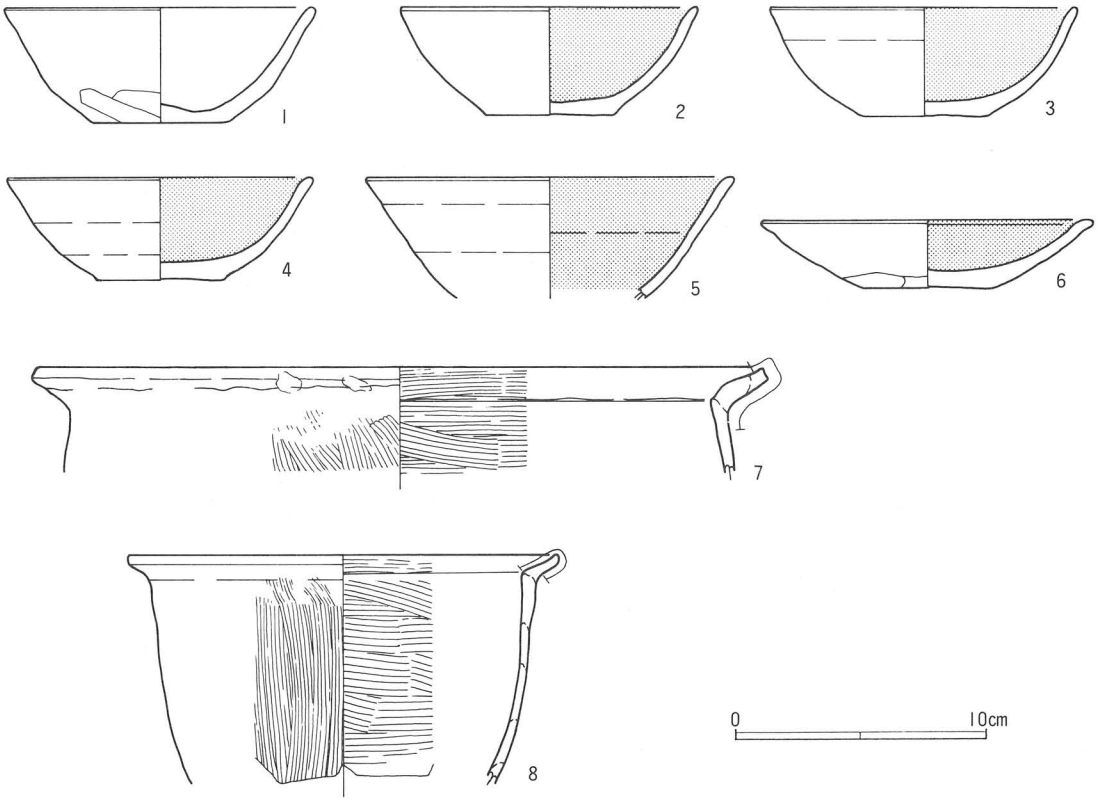
土　確認面より最大50cm以上を測る。住居南側に三角堆積が見られる以外は水平堆積。　床面　住居跡中央部が若干低くなる。全体的に堅緻。　周溝　北辺で15号土坑に破壊されている。本来住居跡南東コーナー以外は全周していたものと考えられる。　カマド　住居跡東辺ほぼ中央に構築される。掘り方の規模は135cm×73cmを測る。この直上に直径80cmを越す木の根がありカマドを破壊しながらでなければ調査が進められなかった。煙道は住居壁中位までしか掘られておらず、溝が巡らされ、小ピットが２基穿たれている。雨水避けの施設であろうか。カマド本体の規模は以外に小さく、直径70cm程度であった。構築材については掘り方の形状から石組みと考えられる。覆土中に甕小破片が散乱していた。　柱穴　ピット３・４が想定できようか。



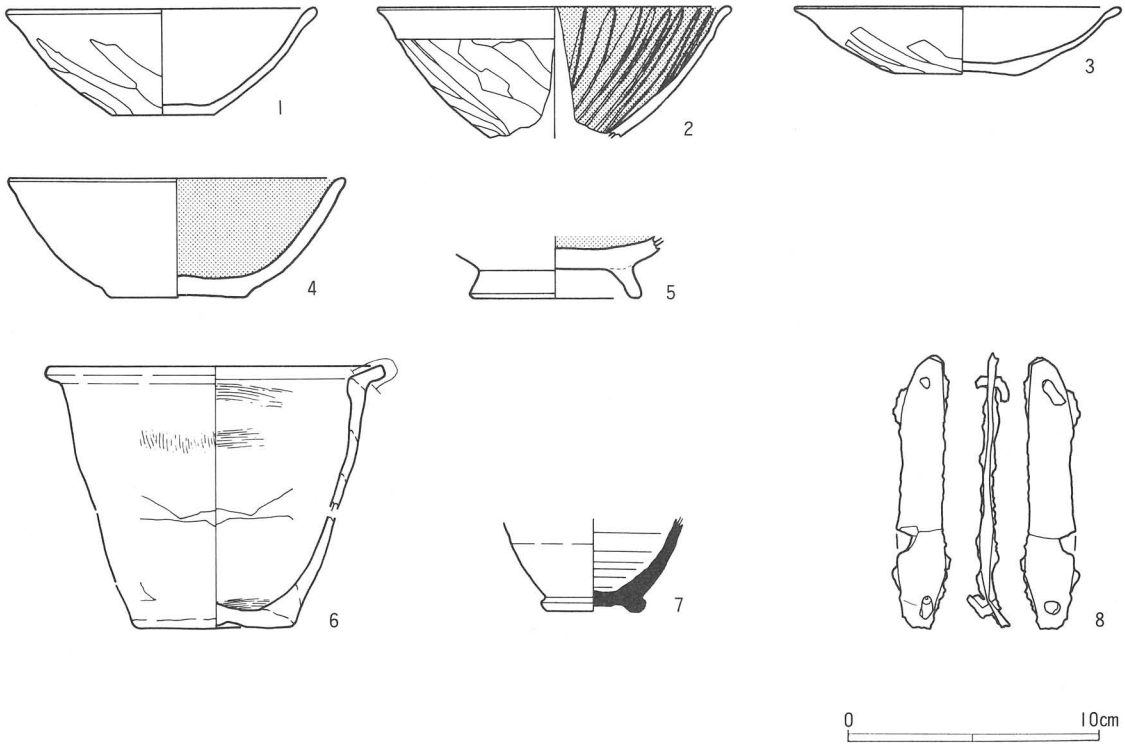
第９図　36号住居跡（Ｓ＝1/60）



第10図　36号住居跡　カマド（Ｓ＝1/30）



第11図　36号住居跡出土遺物（S＝1/3）



第12図　37号住居跡出土遺物（S＝1/3）

その他の施設　住居跡南東コーナー、カマドに南接して不整楕円形の浅い土坑が存在する(ピット１)。覆土中に焼土が含まれていた。カマドの灰の掻き出しによるものか。その機能については不明であるがカマドとの位置関係は35号住居跡のピット３に共通する。また、住居中央に不整形のピット６と小ピット５が存在している。機能は不明。　遺物出土状況　住居跡覆土中の遺物分布は散漫であるが、カマド、及びピット１周辺に小破片の集中が見られた。

遺物　食膳具　甲斐型（含No.１）105ｇ、信州系340ｇ。煮炊具　甲斐型甕1310ｇ、ロクロ甕３ｇ。１は黄橙色を呈し、体部下半にはヘラケズリが施されるが、胎土は砂を多く含んだ非常に脆いもので、相模型の甕の胎土に似ている。４の内面は炭素の付着が不充分で灰色を呈する。

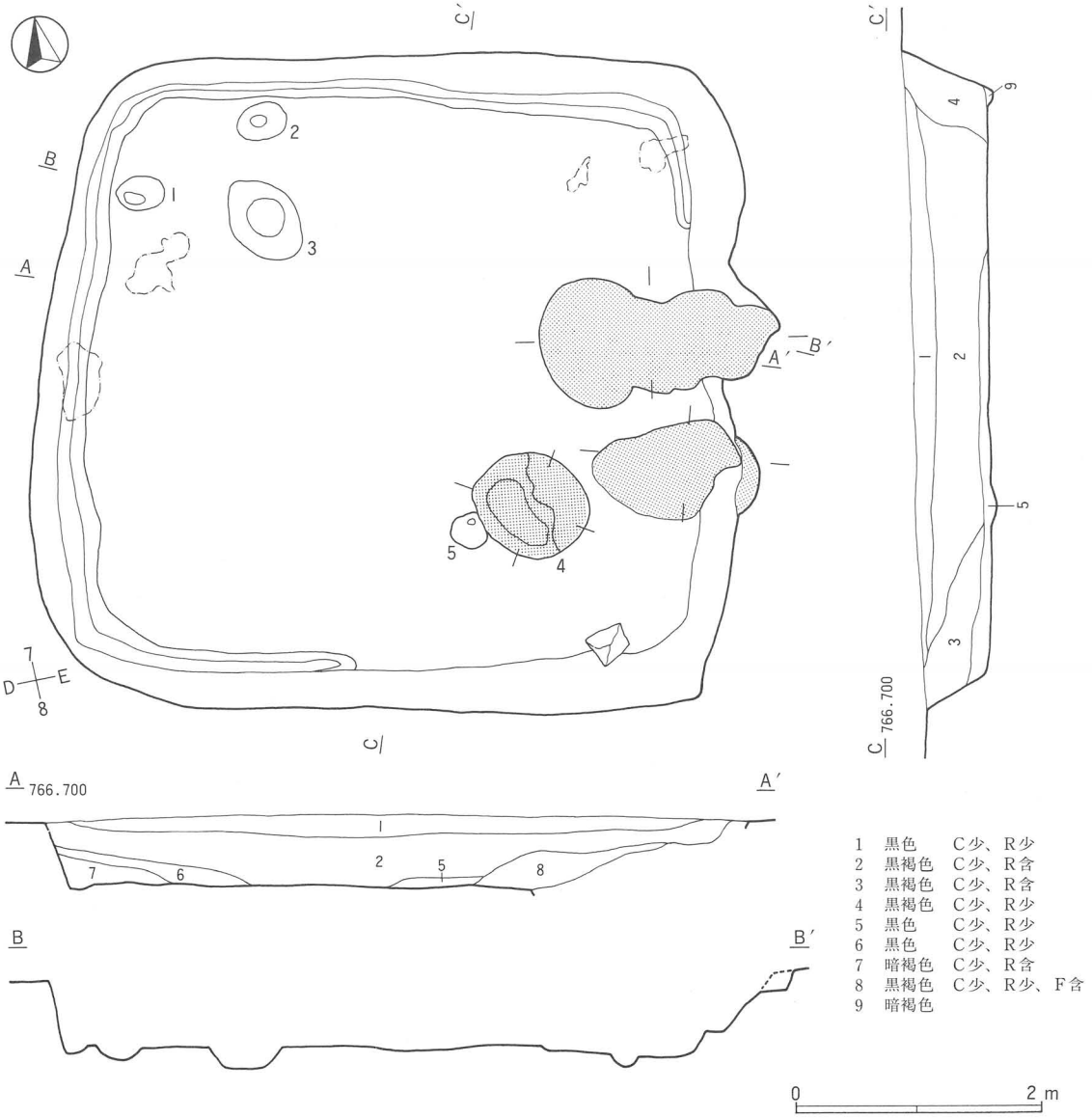
37号住居跡（第12・13・14・15・16図、第１表－１・第４表、図版４・５・16）

位置　Ｅ－７・８グリッド　規模　東西5.74ｍ、南北5.43ｍを測る。　覆土　確認面より最大65cmを測る。壁際に三角堆積が見られる他は水平堆積。また、覆土中４カ所に焼土ブロックが見られた。　床面　ほぼ水平に構築される。全体に堅緻。　周溝　住居東辺北側から南辺中央まで連続してみられる。　カマド　住居東辺中央に２基構築されている。この内南側のものが古く、破壊された後、住居壁を修復した痕跡が見られる。掘り方の規模は136cm×81cmを測る。北側のカマドの掘り方は196cm×79cmを測る。構築材の石は部分的に抜き取られている。カマド本体に対し焚き口が大きく浅く円形に掘られている。煙道部側からの土砂の流入により埋没している。　柱穴　住居北東部にピット１～３があるが柱穴であろうか。　その他の施設　旧カマドに近接して焼土を伴った土坑ピット４とそれに接して小ピット５が存在する。機能については不明であるが、住居自体の拡張、縮小の痕跡がないことからカマドとは考えられない。何らかの生業に関わるものであろうか。　遺物出土状況　斜面上位側からの流れ込みか住居北側にやや偏して小破片の出土が多かった。但し、遺物の総出土量は第２次調査区中最も多いにも係わらず接合するものが少なく図化できる遺物は少なかった。

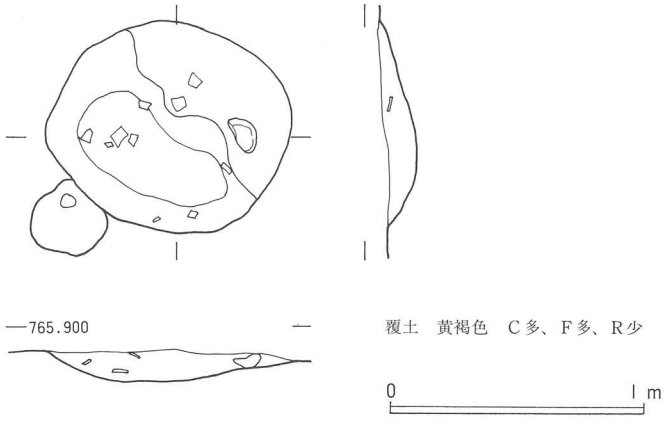
遺物　食膳具　甲斐型400ｇ、信州系920ｇ。煮炊具　甲斐型甕2,105ｇ、ロクロ甕60ｇ、内面ナデの厚手の甕90ｇ。３は胎土に赤色粒子を含むものの、砂も多く含む。５は内面の炭素の付着が不十分で、一部灰色を呈する。７は須恵器壺か。44号住居跡出土の一括資料と接合した。８は不明鉄製品。図示していないが、外面を縦方向のハケ、内面及び底部をナデによって調整する厚手の甕の破片が出土している。胎土も甲斐型甕と異なり黄褐色を呈する。

38号住居跡（第17・18・19図、第１表－１、図版５・16）

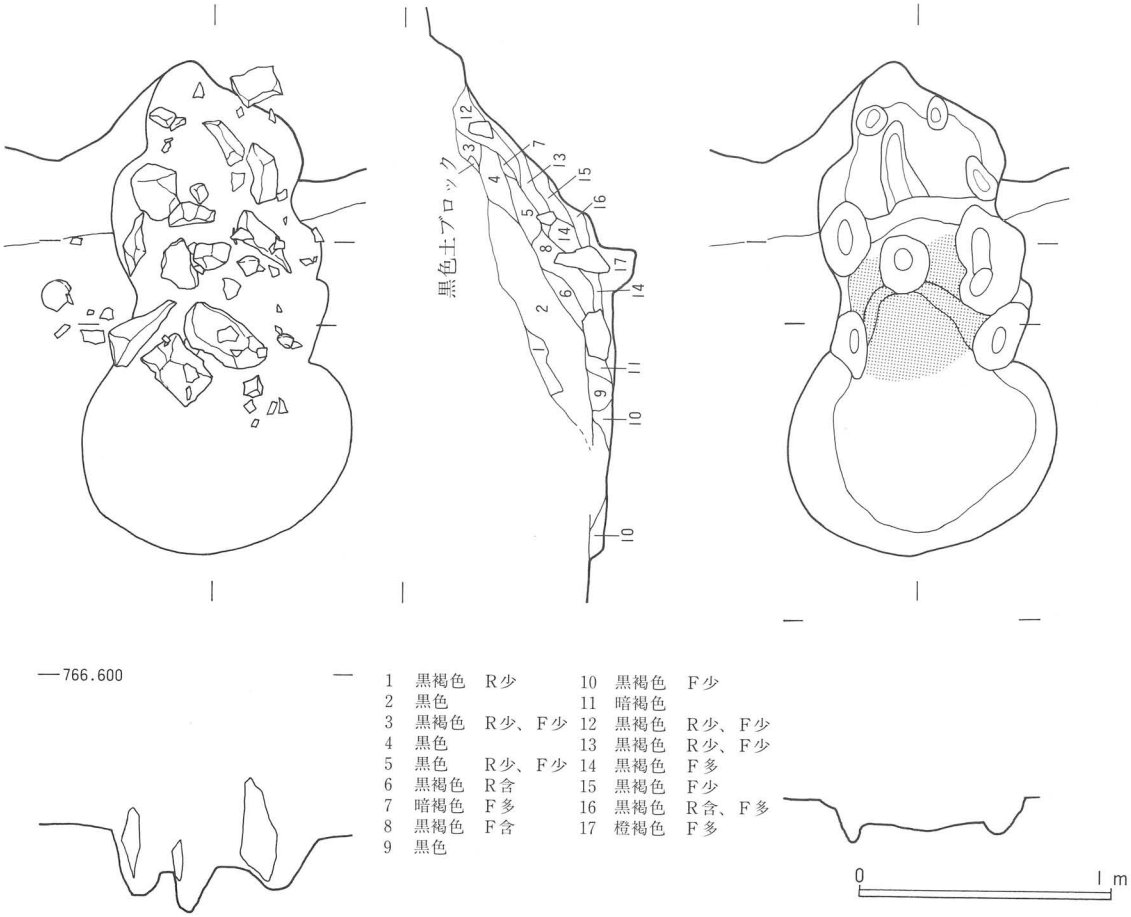
位置　Ｆ－６・７グリッド　規模　東西4.75ｍ、南北4.62ｍを測る。住居東辺上層を７Ｂ号溝により破壊されている。　覆土　確認面から40cmで床面に達する。住居中央付近まで三角堆積が見られる。　床面　ほぼ水平に構築される。周縁部の一部と住居中央に広く軟弱な部分がある。　周溝　全周する。　カマド　住居東辺南寄りに構築される。上部を７Ｂ号溝により破壊されている。掘り方の規模は192cm×133cmを測る。掘り方の形状から石組みと考えられるが構築材の石は全く残されていない。カマド本体は直径80cm程度と考えられるが、これに対して焚き口は広く浅く掘られている。　柱穴　ピット１・２・５が該当しようか。　その他の施設　住居跡南東コーナーにピット４が存在する。不整長楕円形のプランを呈する。浅い土坑状を呈するが、南側では立ち上がりが不明確となっている。形態的に不整でその機能を想定することは困難であるが出土位置の類似性から35・36号住居跡のものと共通するものであることは推定できよう。　遺物出土状況



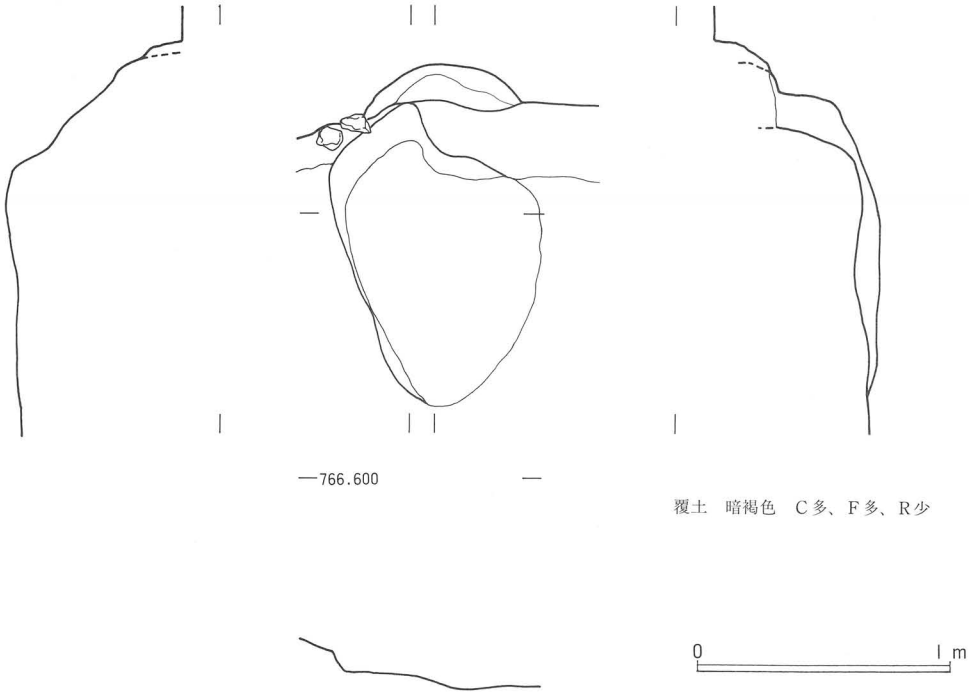
第13図　37号住居跡（S＝1/60）



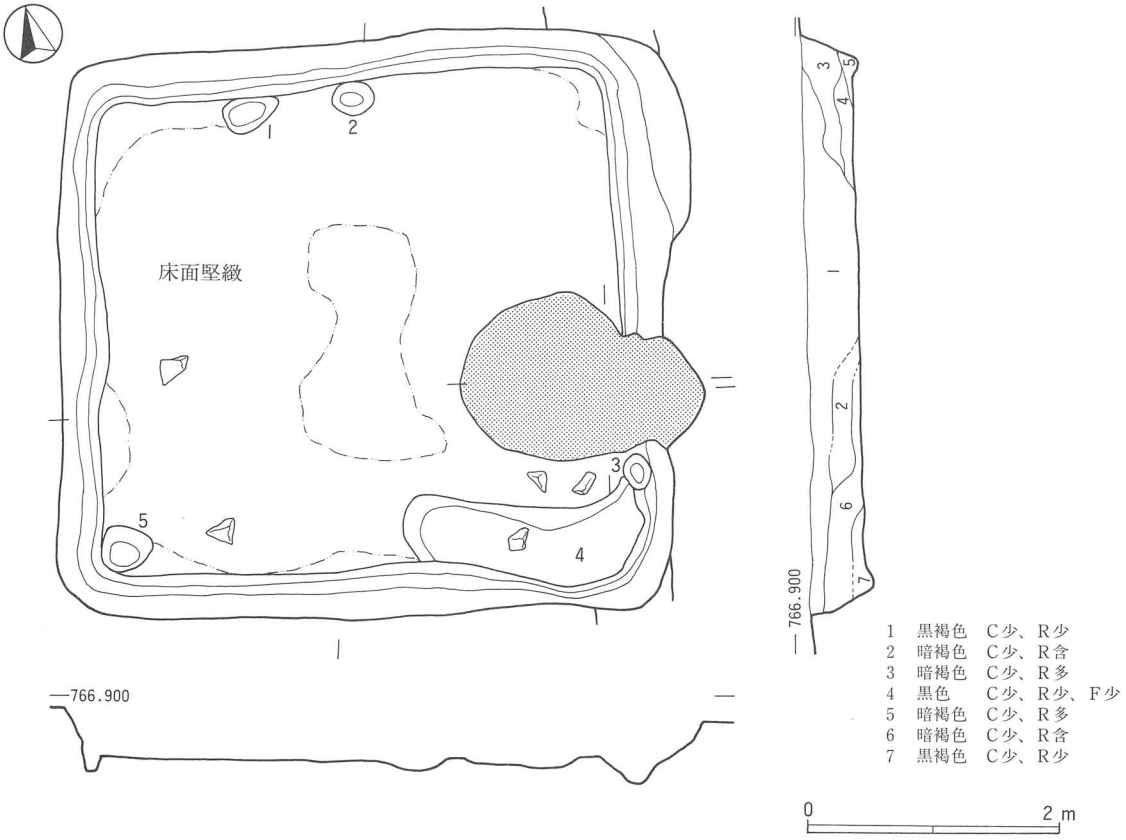
第14図　ピット4微細図（S＝1/30）



第15図　37号住居跡　カマド（新）（S＝1/30）

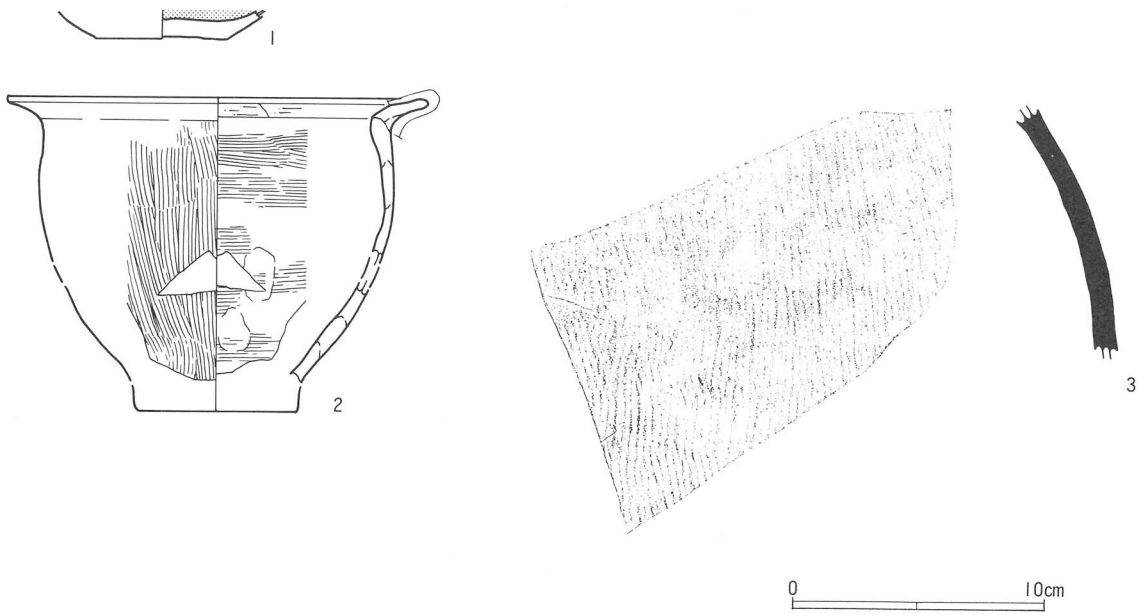


第16図　37号住居跡　カマド（古）（S＝1/30）



第17図　38号住居跡（S＝1/60）

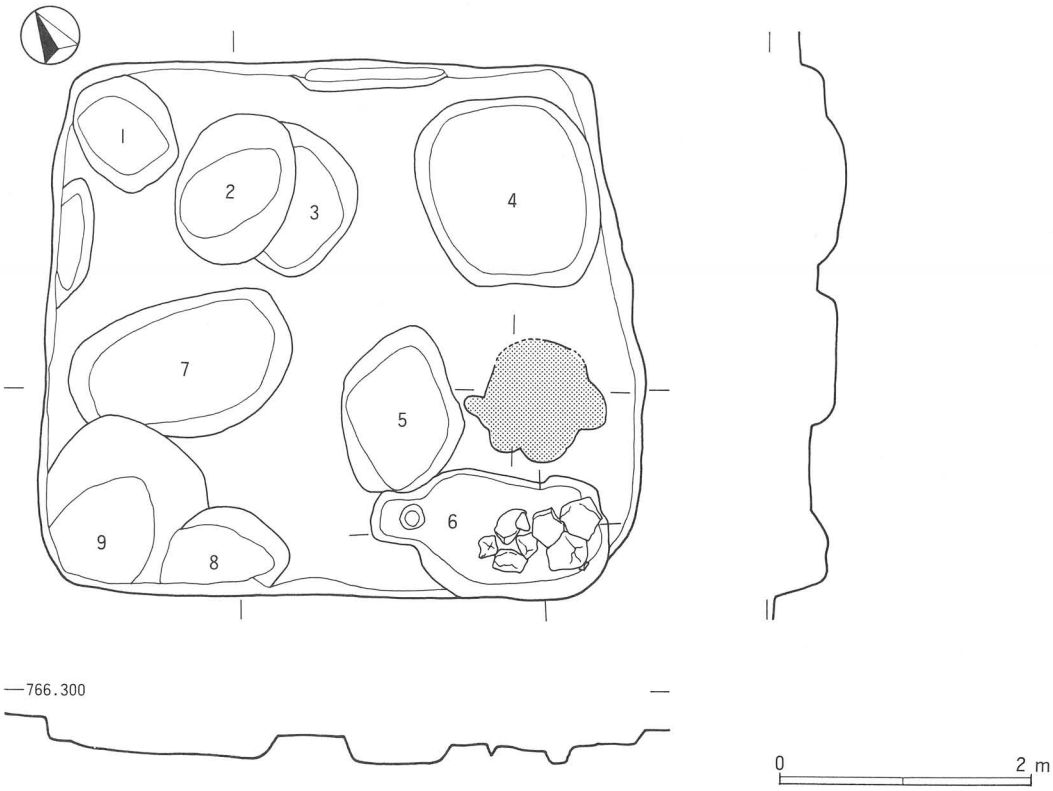
第18図　38号住居跡（S＝1/30）



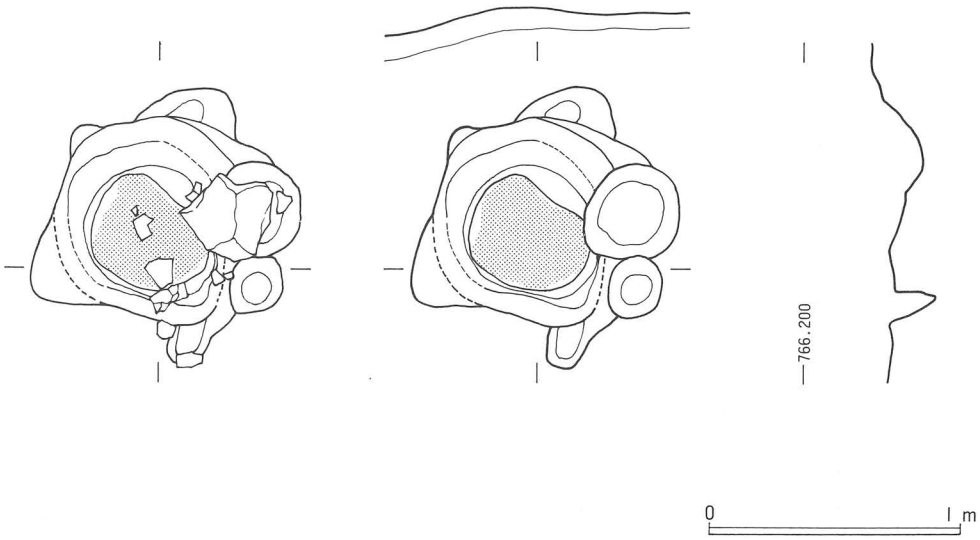
第19図　38号住居跡出土遺物（S＝1/3）

住居跡覆土中の遺物の分布は散漫であるが、カマド、及びピット4周辺に僅かに集中して出土している。
遺物　食膳具　甲斐型160g、信州系100g。煮炊具　甲斐型甕1,160g、ロクロ甕15g。須恵器310g。灰釉陶器25g。

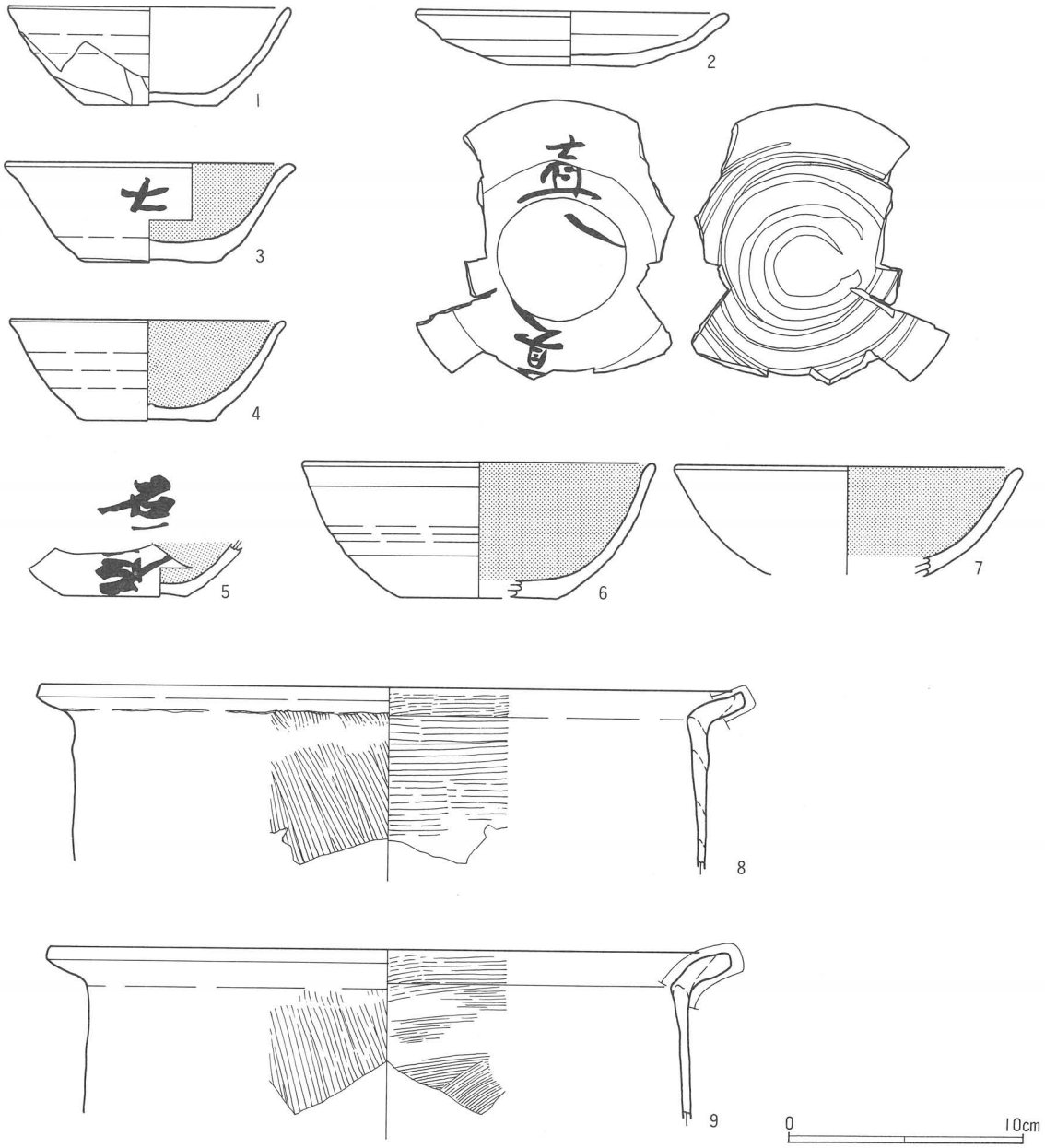
39号住居跡（第20・21・22・23図、第1表－1・第4表、図版6・17）
位置　F、G－9グリッド　**規模**　東西4.74m、南北4.28mを測る。　**覆土**　尾根の頂部に位置することから表土流出が顕著であり、確認面から最大でも10cm程度で床面に至る。粘性、しまり共に弱い黒色土の単一層。　**床面**　住居全面に土坑が穿たれており、凹凸が目立つ。若干東下がりに構築される。　**周溝**　住居北辺、西辺に部分的に周溝状の溝が見られる。　**カマド**　住居東辺の住居立ち上がりより若干内側、南寄りに構築されている。直上に木が生えており、撹乱が著しい。掘り方の規模は直径70cm程度で、不整円形のプランとなる。外周部は溝状に掘られている。構築材は先述の諸条件により確認されていないが、一般的に見られる石組みカマドとは形態的に異なり特異な様相を示す。今後の事例の集積を待って判断する必要はあるが置きカマド等の形態も考慮する必要があろう。　**柱穴**　明確なものは検出されていない。住居内全面に土坑が穿たれており、これらが機能していたことを考慮すると住居プラン内には主柱を置くことは不可能ではなかろうか。検出はされていないもののむしろ壁外柱穴を積極的に考えるべきであろう。　**その他の施設**　先述のとおり住居プラン全面に土坑が穿たれている。住居プランから突出したものはなく、周辺に同様の遺構も全く見られないことから住居内の施設と判断した。何れも広く浅い土坑であり、内容は不明であるものの共通の機能を想定することが可能であろう。なお、カマドに南接して集石を伴った浅い土坑が存在するが、規模に相違はあるものの35号住居跡のピット3と同様石を平らに敷き並べた様子が見られ、同様の機能が想定されようか。集石中の石は8個を数える。　**遺物出土状況**　住居跡覆土中の遺物の出土は散漫であるが、カマド、及びピット4・9周辺に僅かに遺物が集中して出土している。



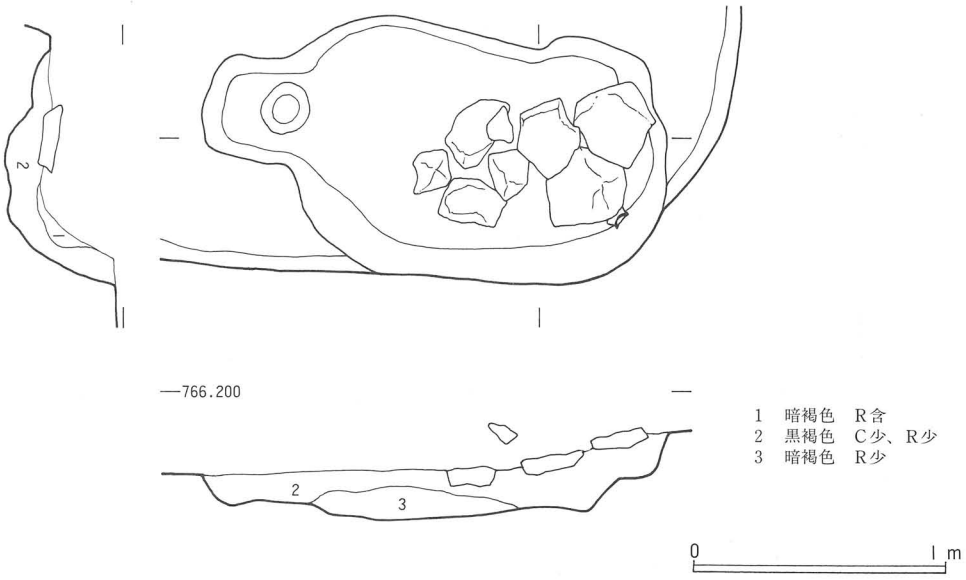
第20図　39号住居跡（S＝1/60）



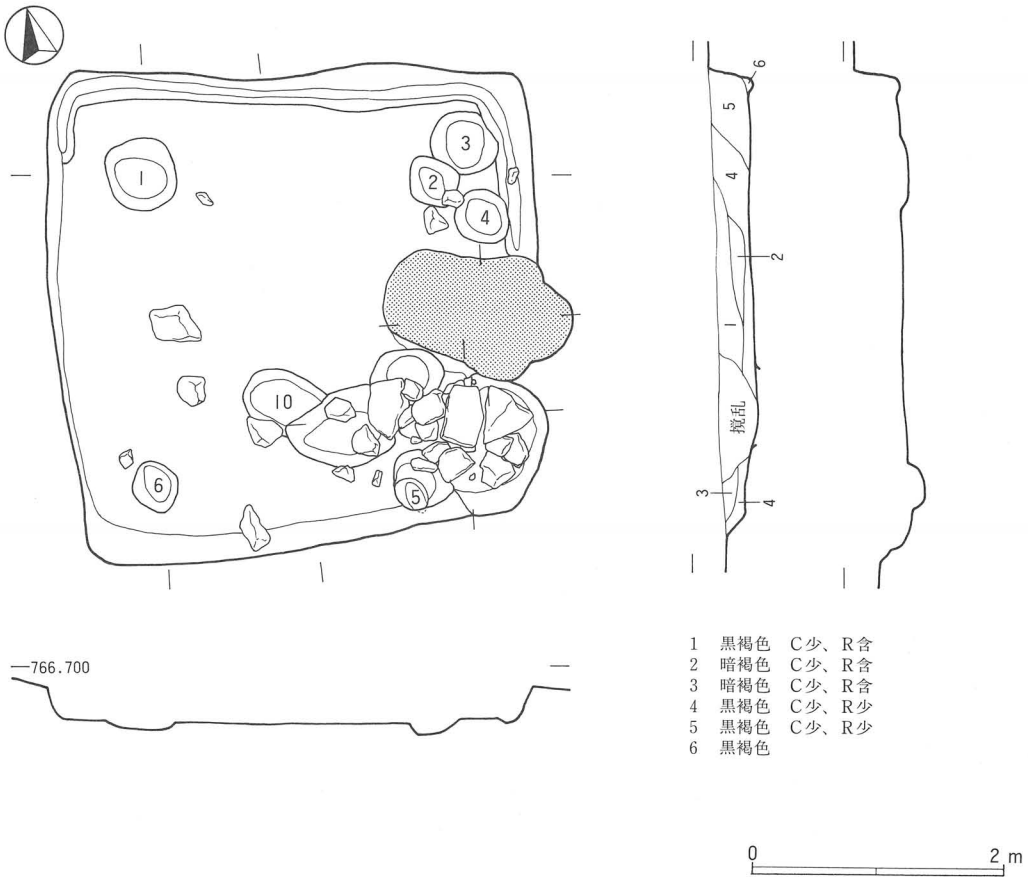
第21図　39号住居跡　カマド（S＝1/30）



第22図　39号住居跡出土遺物（S＝1/3）



第23図　39号住居跡　石組遺構（S＝1/30）



第24図　40号住居跡（S＝1/60）

遺物　食膳具　甲斐型135ｇ、信州系665ｇ。煮炊具　甲斐型甕1,440ｇ、ロクロ甕50ｇ。須恵器15ｇ。2は「真」或いは「直人」、3は「七」、5は「石□」或いは「右□」の墨書がある。3については「地」の偏だけを書いたとも考えられる。6の内面は炭素の付着が不十分で、一部赤褐色を呈する。

40号住居跡（第24・25・26・27図、第1表－1・第4表、図版7・17）

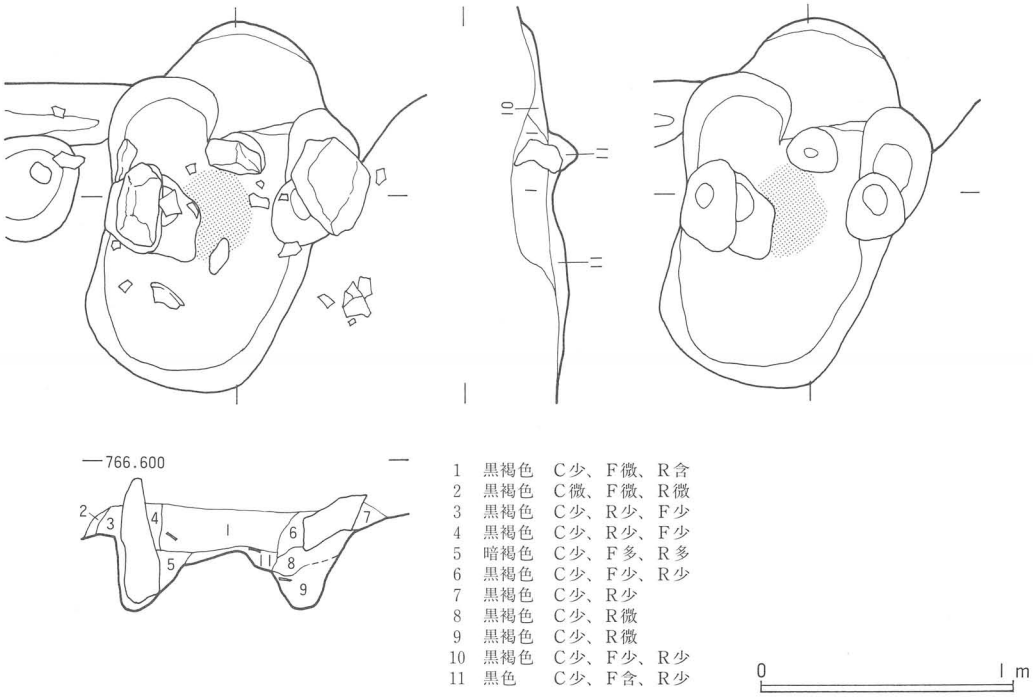
位置　F、G－7グリッド　規模　東西3.83m、南北3.90mを測る。　覆土　確認面より30cmほどで床面に達する。住居北側からの土砂の流入により埋没している。　床面　ほぼ水平に構築されるが若干東側に傾斜する。　周溝　住居北半に見られるのみである。　カマド　住居東辺中央に構築される。遺存状態不良。規模は148cm×81cmを測る。住居の主軸とはズレが見られる。両袖の石組みと支脚が残されている。当初の使用面は掘り方底部の被熱赤変より掘り方直上と考えられるが最終的な使用面は若干上昇した面となっている。柱穴　ピット1～6が該当するか。　その他の施設　カマドに南接して集石を伴う土坑（ピット7～10）が存在する。それぞれの性格については不明であるがその上部の集石は平らに敷き並べた様子で、先述の35・39号住居跡のものと共通する。集石中の石は28個を数える。　遺物出土状況　全体に散漫な出土であるが、住居跡東～南半にやや偏して出土している。

遺物　食膳具　甲斐型95ｇ、信州系825ｇ。煮炊具　甲斐型甕1,590ｇ、ロクロ甕5ｇ、内黒甕60ｇ。須恵器115ｇ。3は外面を墨で黒く塗っている。内外黒を意識したものか。6は内面に灰色を呈する部分が帯状に一周する。8の内面は炭素の付着が不十分で一部灰色、その他は黄褐色を呈する。9は内外面に黒色処理を行う。図示していないが内面をヘラミガキした後、炭素を付着させている甕の破片が出土している。外面は縦方向のハケ調整を行い、胎土は粘土質で黄褐色を呈する。この他永楽通寶（第56図1）が1枚出土している。

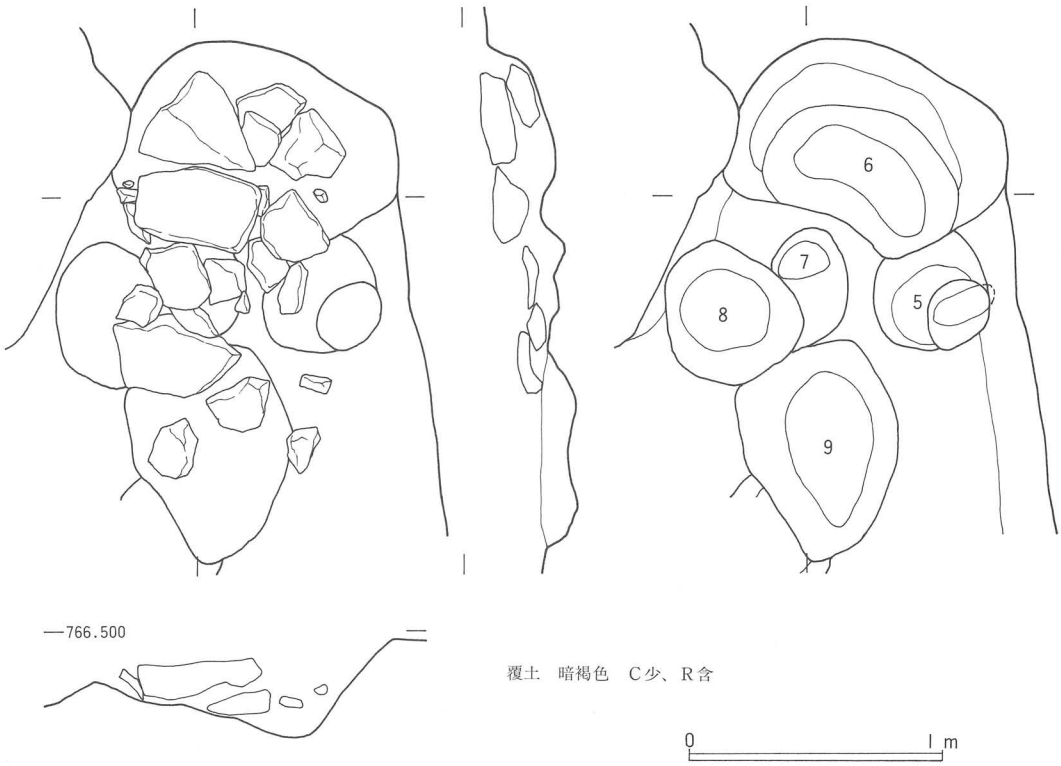
41号住居跡（第28・29・30・31図、第1表－1・2・第4表、図版8・18）

位置　F－8・9グリッド　規模　東西3.92m、南北3.90mを測る。　覆土　39号住居跡と同様に尾根頂部に位置することから表土流出顕著。確認面より最大20cmで床面に達する。粘性、しまり共に弱い黒色土の単一層で埋没している。　床面　ほぼ水平に構築されているものの、中央部が若干深くなっている。　周溝　住居東辺以外を断続的に巡る。　カマド　住居東辺、南寄りに構築されている。住居東辺の歪みから住居主軸とズレが生じている。掘り方の規模は127cm×79cmを測る。燃焼部は一辺80cm弱の略方形プランとなる。これに接して楕円形プランの焚き口部が設けられている。燃焼部掘り方の外周は39号住居跡と同様溝状に掘られている。構築材については不明。　柱穴　ピット1・2・6～8が該当するか。　その他の施設　カマドに南接してピット5が存在する。住居北東コーナーにも同規模のピット3・4があり、その機能の類似性が考慮されるものの、その位置と、埋土の水平堆積から36・38号住居跡のカマド脇土坑との類似性を指摘しておきたい。　遺物出土状況　遺物の出土はカマド、及びピット5周辺に集中している以外はほとんど見られない。

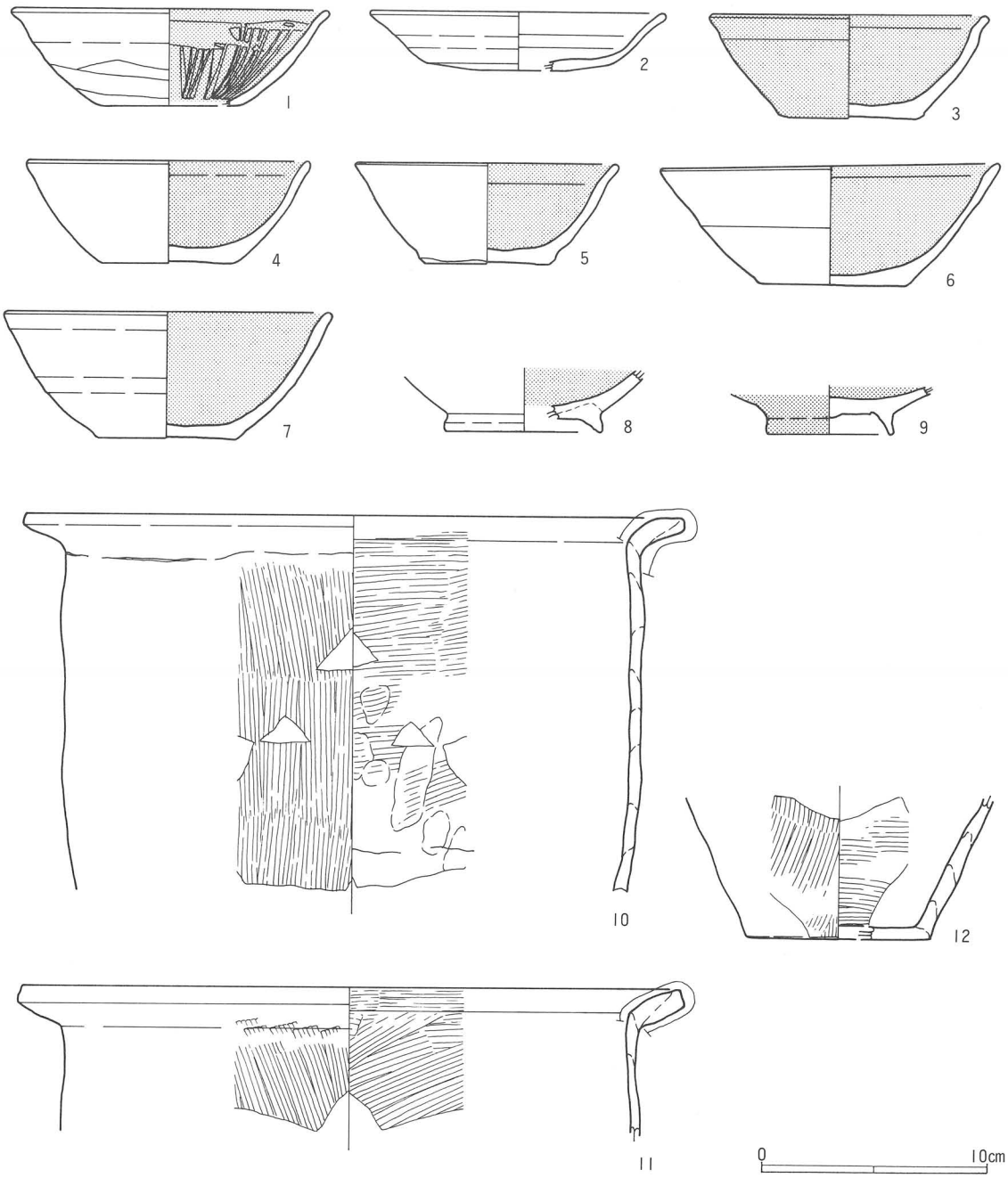
遺物　食膳具　甲斐型310ｇ、信州系220ｇ。煮炊具　甲斐型甕1,380ｇ、ロクロ甕110ｇ。須恵器85ｇ。灰釉陶器70ｇ。1の墨書は「収取」?、2は「一丁」か。両者とも判読は困難である。4の内面は炭素の付着が不十分で、灰色を呈する。6は須恵器坏か。7の灰釉陶器皿は猿投黒笹90号窯式1型式終末の時期が与えられ、内面は自然釉である。8は鉄器だが、外面の剝落が著しく器種は不明。



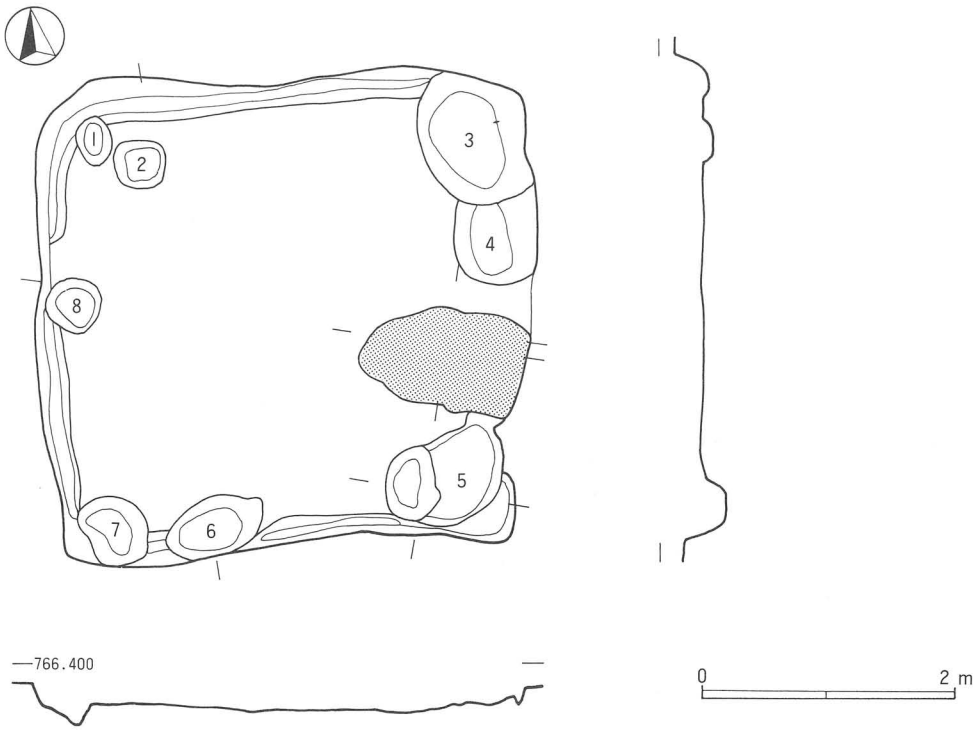
第25図　40号住居跡　カマド（S＝1/30）



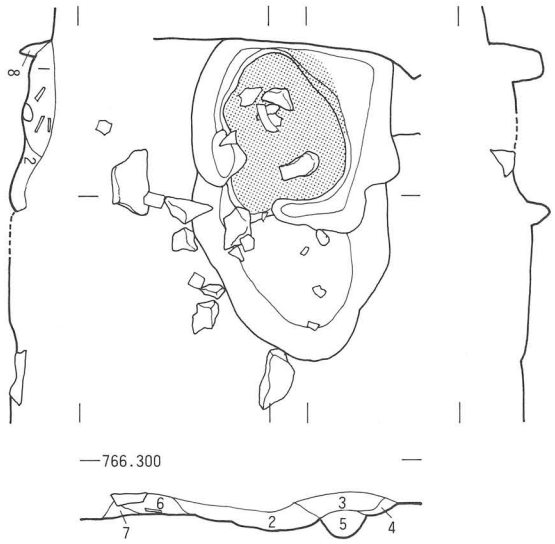
第26図　40号住居跡　石組遺構（S＝1/30）



第27図　40号住居跡出土遺物（S＝1/3）



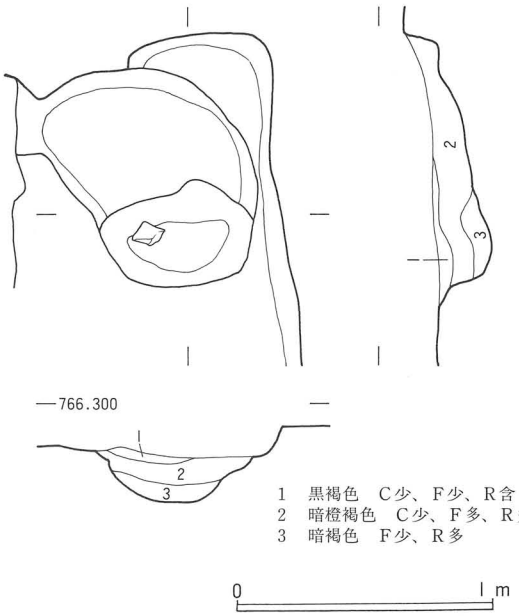
第28図　41号住居跡（S＝1/60）



1　暗褐色　C少、F少、R含
2　暗橙褐色　C少、F多、R含
3　黒褐色　C少、F含、R含
4　黒色　C少
5　黒色　C少、R少
6　暗褐色　C少、F含、R含
7　暗褐色　C少、R含
8　暗褐色　C少、F多

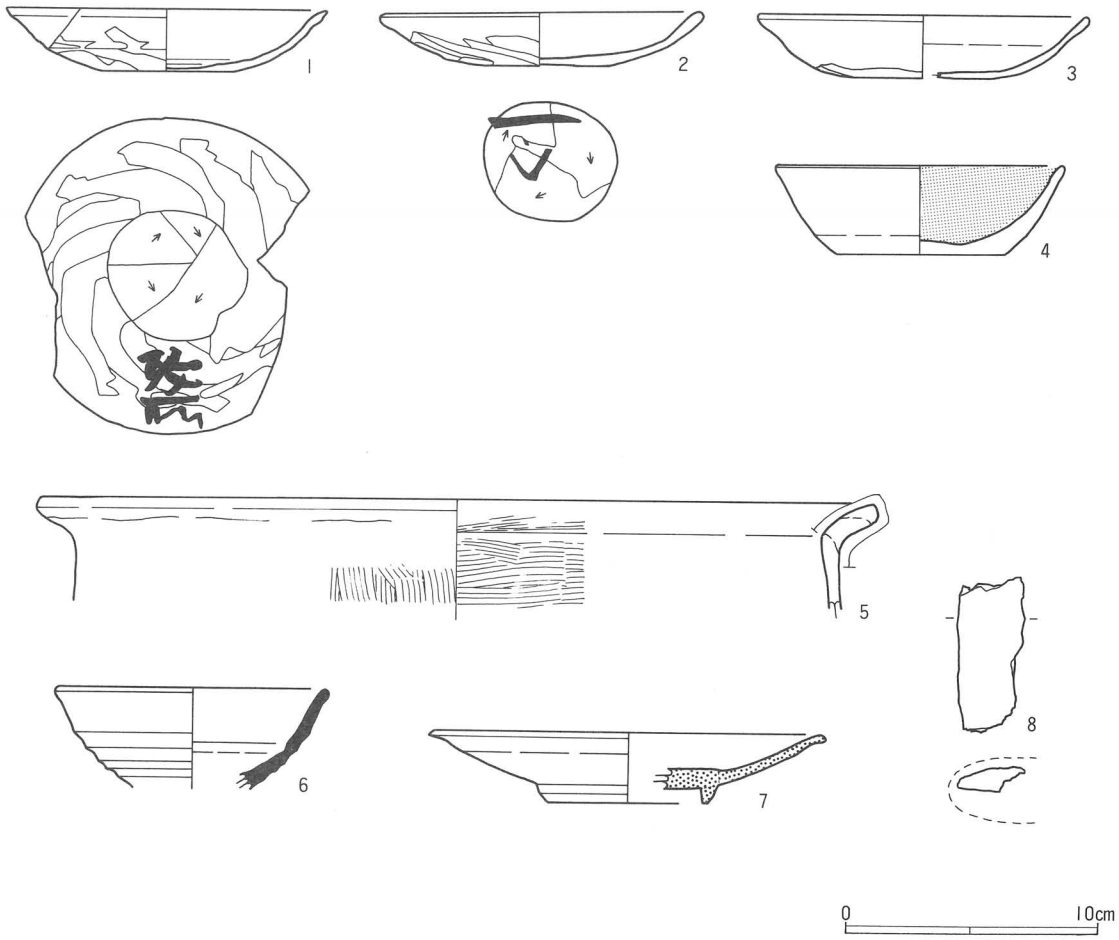
0　1 m

第29図　41号住居跡　カマド（S＝1/30）



1　黒褐色　C少、F少、R含
2　暗橙褐色　C少、F多、R多
3　暗褐色　F少、R多

第30図　41号住居跡　ピット5（S＝1/30）

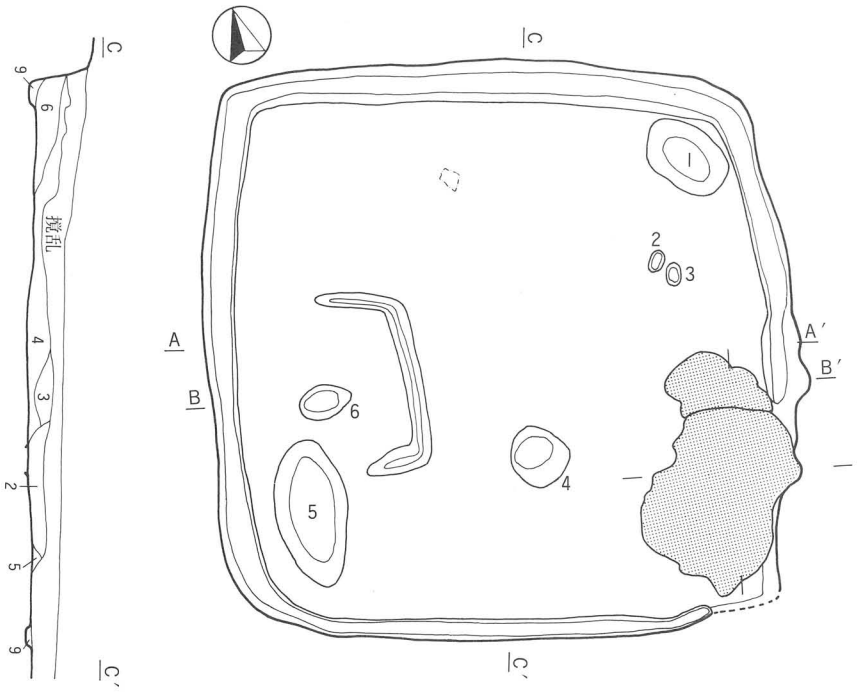


第31図　41号住居跡出土遺物（S＝1/3）

42号住居跡（第32・33・34図、第1表－2、図版8・9・18）

位置　G－6グリッド　**規模**　東西4.62m、南北4.58mを測る。住居跡南側を大きく撹乱されているものの、周溝によりその範囲を確定している。　**覆土**　住居南半を撹乱により、いわゆるちりとり状に欠失する。北側壁際では40cmほどで床面に達する。住居北側からの土砂の流入が見られる。　**床面**　ほぼ水平に構築されている。　**周溝**　カマド周辺以外は全周する。　**カマド**　住居東辺、南側に構築される。2基重複して確認されているが、北側のものを破壊して南側のものを構築し直している。旧カマドは燃焼部の掘り方と支脚ピットしか確認されていないので構築材等は不明。掘り方底部は被熱赤変が見られる。新カマドは掘り方規模114cm×149cmを測る。石組みは確認されていないものの掘り方の形状より石組みのカマドと考えられる。また、白色粘土の分布より両袖の構築には白色粘土も用いられていたことが確認された。燃焼部の最終的な使用面は支脚ピットの掘り込みの位置から掘り方底部より若干浮いていることが確認された。　**柱穴**　不明。ピット1が該当しようか。　**その他の施設**　出入り口施設と考える「コ」の字状に掘られた溝が検出されている。板等により土留めをして階段状にしたものか。また、ピット6も関連した施設と考えられる。　**遺物出土状況**　全体に散漫な出土状況を示し、僅かにカマド北側、カマド内からやや集中して遺物が出土している。

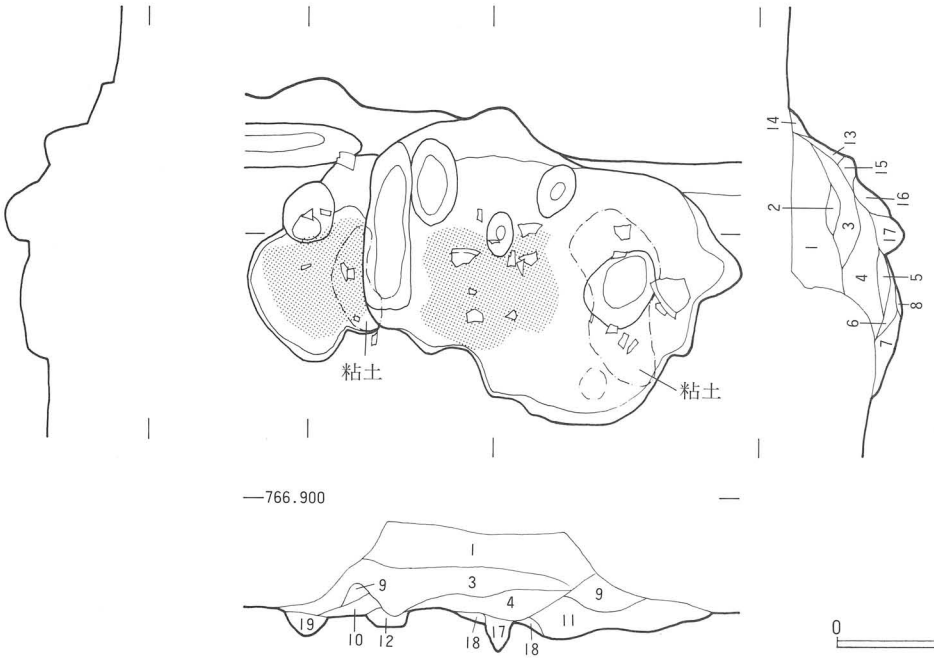
遺物　食膳具　甲斐型8g、信州系235g。煮炊具　甲斐型甕1,275g、ロクロ甕75g。須恵器20g。1の内面は炭素の付着が不十分で、灰色もしくは赤褐色を呈する。2はロクロ小甕。



1　黒色　C少、R少
2　黒色　C少、R少
3　暗褐色　C少、R多
4　黒色　C少、R少、F微
5　暗褐色　C少、R多、F含
6　黒褐色　C少、R少
7　暗褐色　R質
8　黒色　C少、R含
9　暗褐色　C少、R多
10　黒褐色　C少、R少

0　2 m

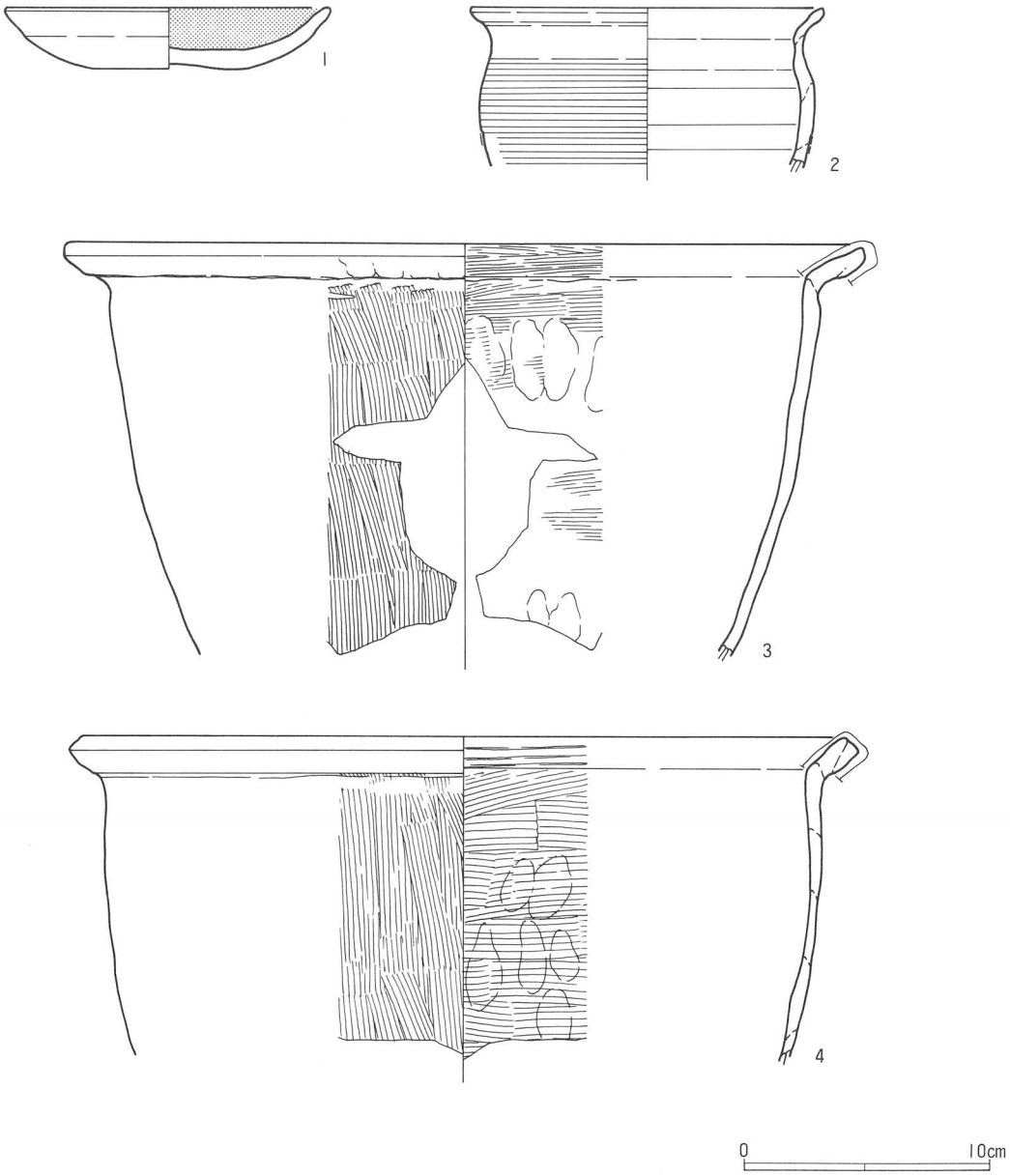
第32図　42号住居跡（S＝1/60）



1　黒褐色　R少、F微
2　暗褐色　C少
3　暗黄褐色　R多、F少
4　暗褐色　C含、R少、F含
5　黒褐色　R少、F少
6　橙褐色　焼土層
7　黒褐色　R微、F微
8　暗褐色　R少、F含
9　黄褐色　粘土層
10　橙褐色　F多
11　暗褐色　R多、F多
12　暗褐色　C含、F含、R少
13　暗褐色
14　黒褐色　R少、F多
15　黒褐色　R微、F微
16　暗褐色　R含、F微
17　暗褐色　R多、F多
18　橙褐色　焼土層
19　暗褐色　R多、F多

0　1 m

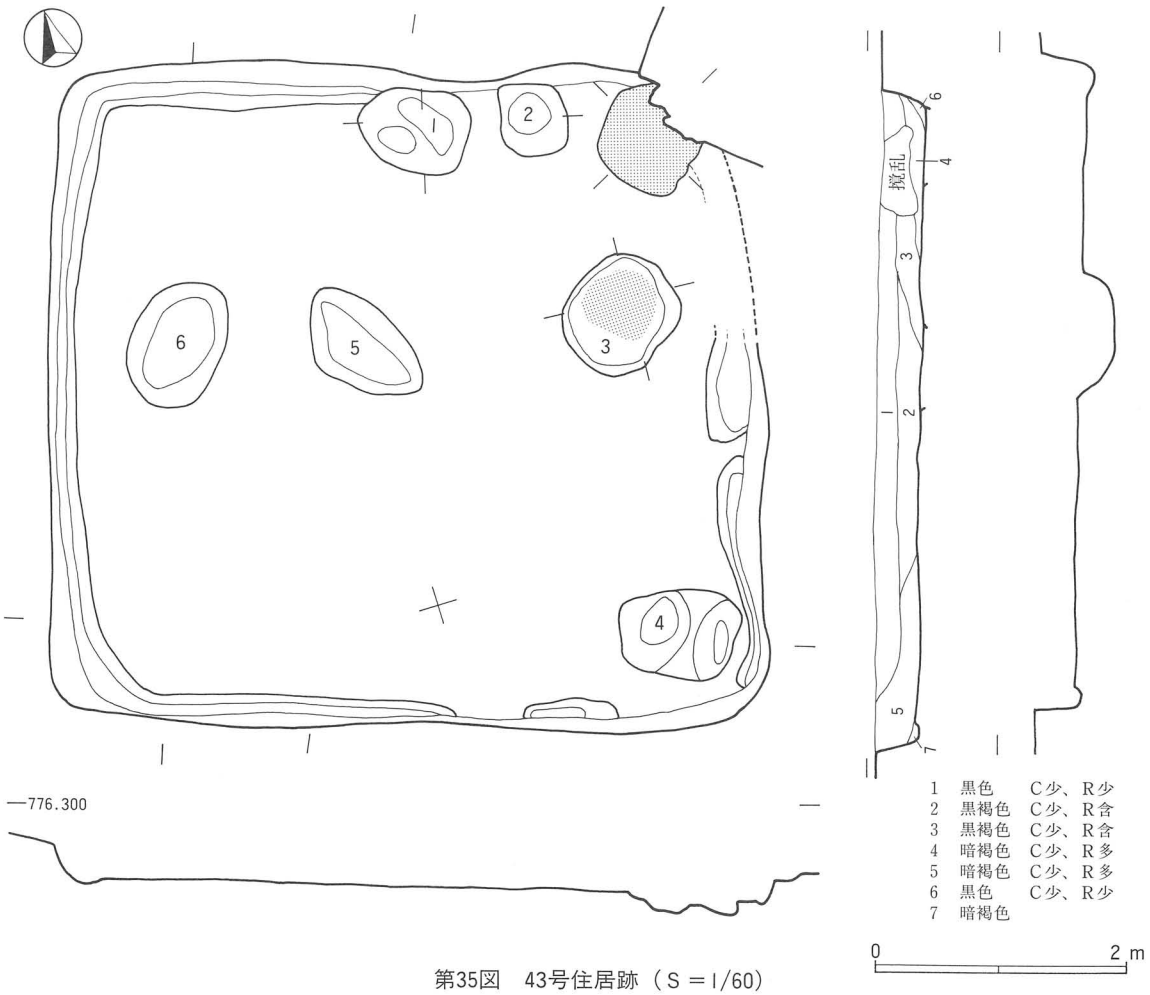
第33図　42号住居跡　カマド（S＝1/30）



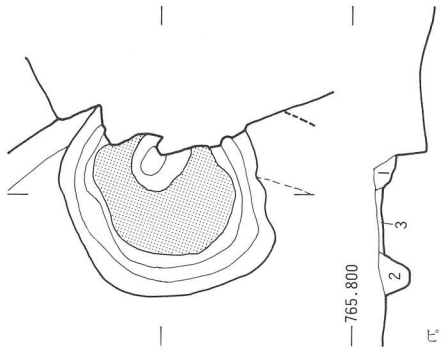
第34図　42号住居跡出土遺物（S＝1/3）

43号住居跡（第35・36・37・38図、第1表－2・第4表、図版9・10・18）

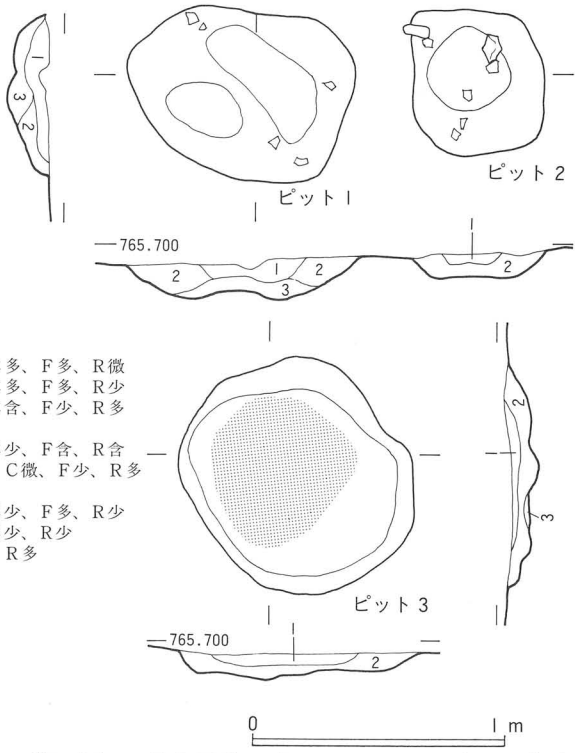
位置　G、H－8・9グリッド　規模　東西5.56m、南北5.24mを測る。　覆土　壁際に三角堆積が見られる他は安定した水平堆積。確認面より35cmほどで床面に達する。　床面　水平に構築される。　周溝　住居北東部を撹乱により欠失する以外断続的ではあるがほぼ全周する。　カマド　住居北東コーナーに構築される。本集落で第1次調査を含めて唯一確実な隅カマドになる。カマド覆土のほとんどを撹乱により欠失するほか一部は掘り方まで破壊されている。燃焼部の規模は遺存する掘り方より直径80cm程度で、略円形プランとなる。この掘り方の外周部は39・41号住居跡と同様溝状に掘られており注意される。掘り方底部は被熱赤変が見られる。　柱穴　不明。　その他の施設　住居北辺に接してその覆土に焼土を含むピット1・2が存在する。住居立ち上がりに規制されて構築されていることから住居内の施設と判断した。性格は不明。また、カマドに近接してピット3が存在する。土坑底部が被熱赤変しているが、住居自体に拡張、縮小の痕跡がないことからカマドとは考え難い。生業等に係わるものであろうか。　遺物出土状況　全体に散漫な出土状況



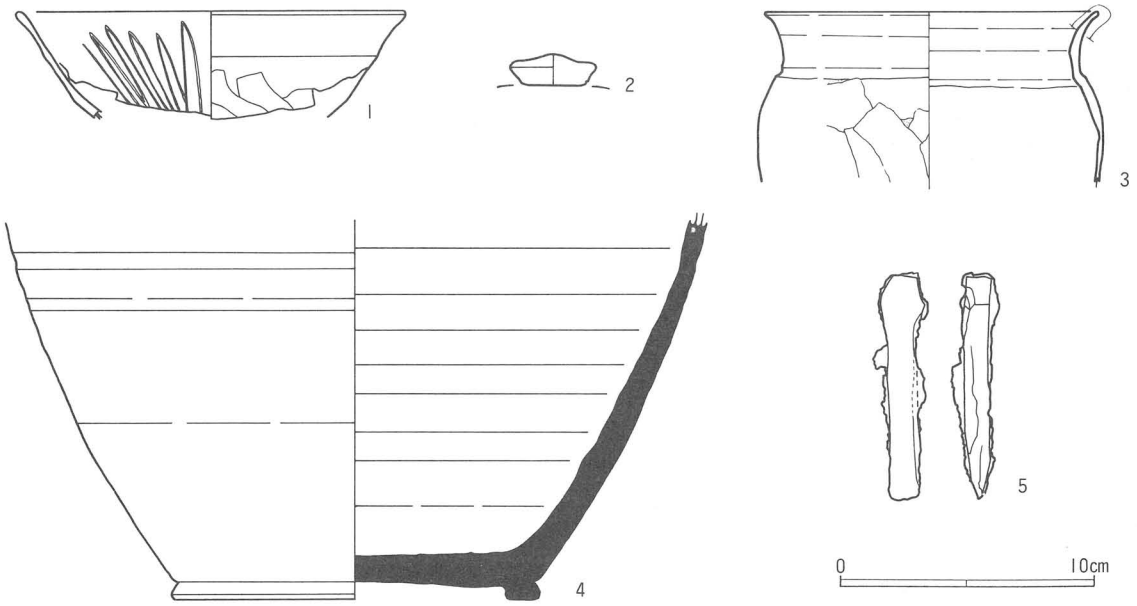
第35図　43号住居跡（S＝1/60）



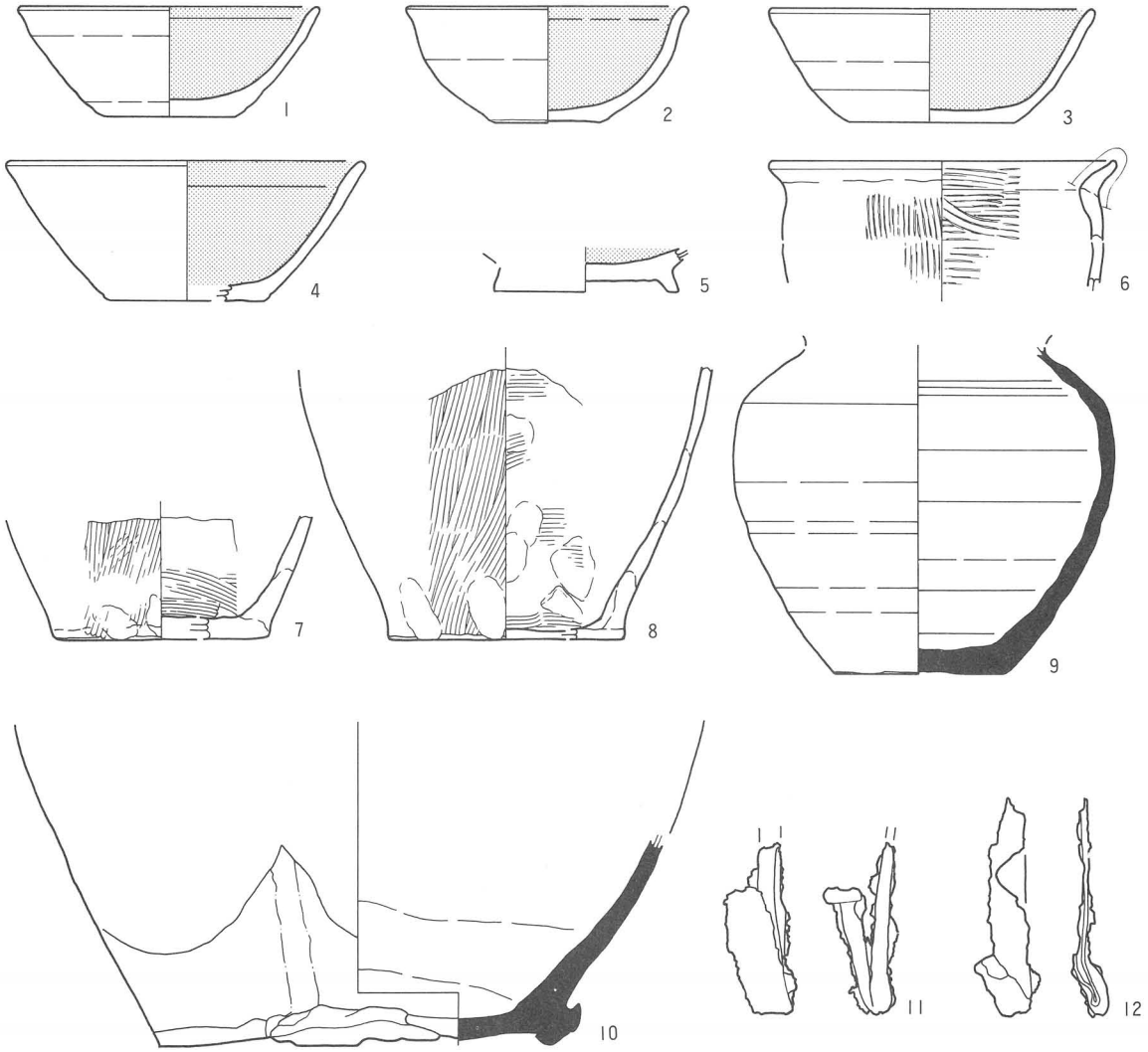
第36図　43号住居跡　カマド（S＝1/30）



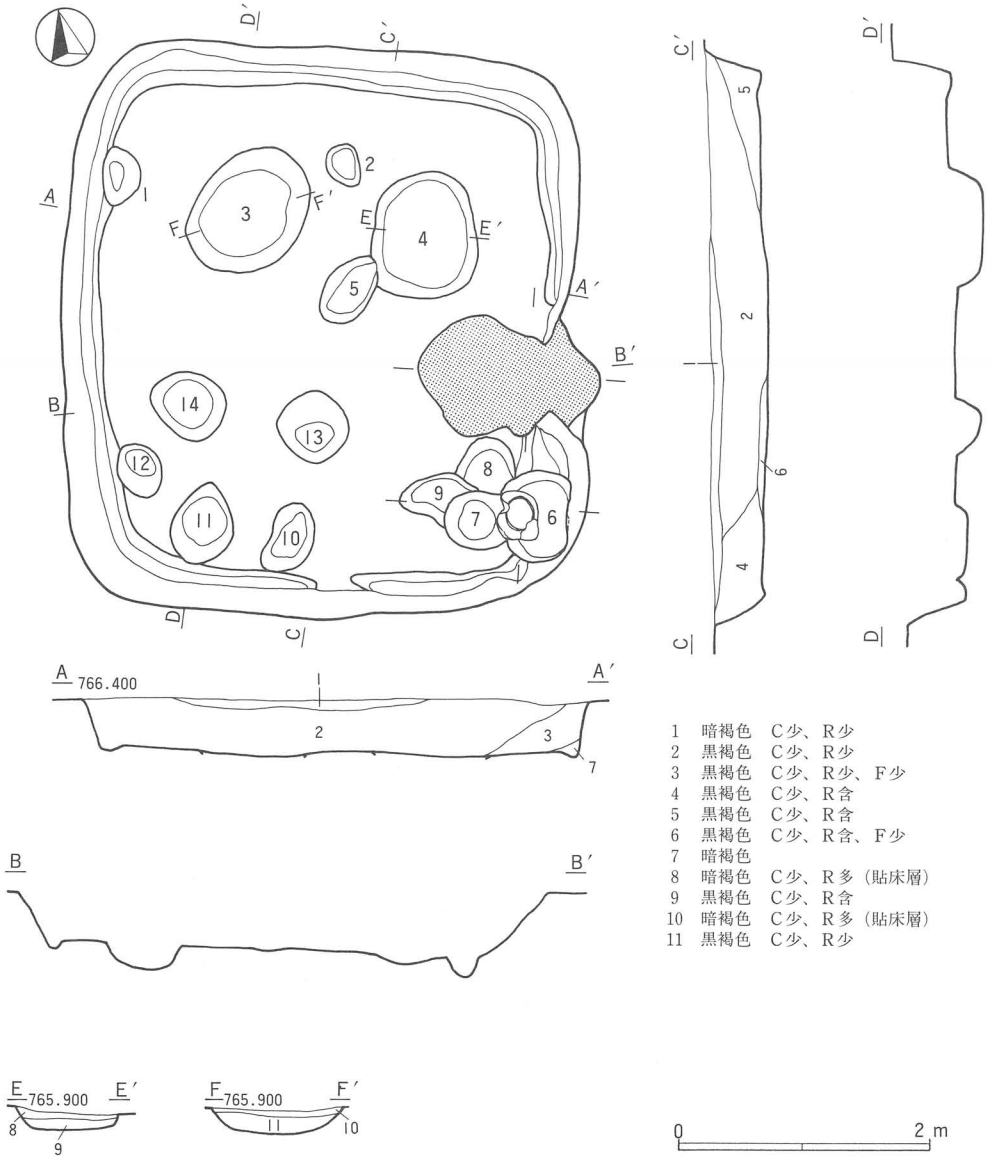
第37図　43号住居跡　ピット1・2・3（S＝1/30）



第38図　43号住居跡出土遺物（S＝1/3）



第39図　44号住居跡出土遺物（S＝1/3）



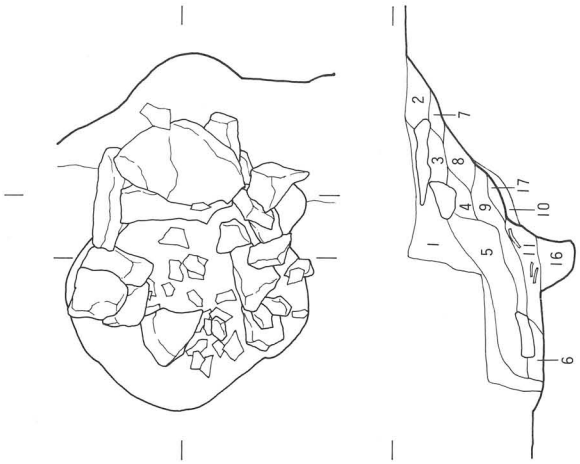
第40図　44号住居跡（S＝1/60）

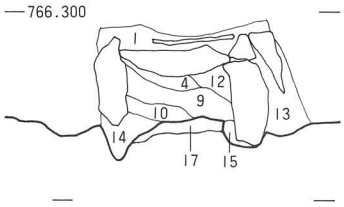
を示す。僅かに住居跡北西コーナー付近に集中する。

遺物　食膳具　甲斐型195ｇ、信州系160ｇ、その他205ｇ。煮炊具　甲斐型甕500ｇ、武蔵型甕55ｇ。須恵器1,055ｇ。灰釉陶器10ｇ。2は蓋のツマミ部分。3は武蔵型甕、詳細は後述する。4は須恵器壺か。5は鉄製品、鏨或いは楔か。頑丈な作りで基部は幅広となる。叩いた痕跡はない。図示していないが甲斐型土器の胎土で、内面に横方向のヘラミガキを施し、外面は無調整の黒色土器の破片が出土している。

44号住居跡（第39・40・41・42図、第1表－2・第4表、図版10・11・18）

位置　D－7グリッド　**規模**　東西4.01ｍ、南北4.55ｍを測る。　**覆土**　壁際に三角堆積が見られる以外は安定した水平堆積。確認面より45cmほどで床面に達する。　**床面**　水平に構築される。　**周溝**　カマド周辺と住居南辺の一部で断絶するもののほぼ全周する。　**カマド**　住居東辺南寄りに構築される。支脚と焚き口部の天井石は抜き取られているものの、その他の袖石等は残されており依存状態は良好である。掘り方の規

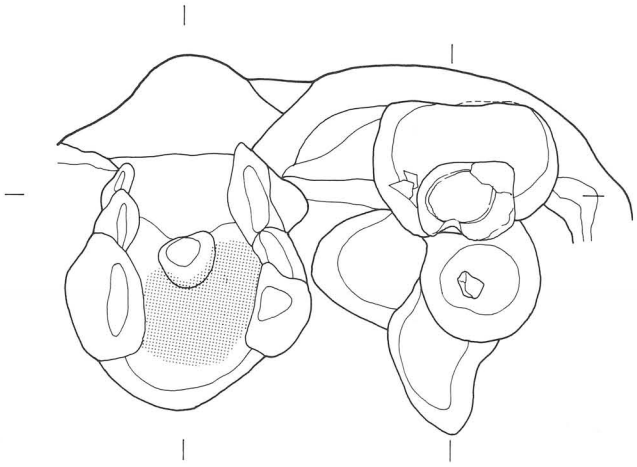




1　黒褐色　C少、F多、R含
2　暗褐色　C少、F少、R少
3　黒褐色　C含、F多、R含
4　暗褐色　C少、F含、R少
5　黒褐色　C少、F少、R少
6　黒色　C少、F少、R少
7　暗褐色　C少、F含、R含
8　黒褐色　C少、F多、R含
9　暗赤褐色　C少、F多、R少
10　黒褐色　C少、F少、R少
11　暗赤褐色　C少、F多
12　黒褐色　C少、F含、R含
13　暗褐色　C少、R多
14　暗褐色　C少、R多
15　暗褐色　C少、R多
16　暗赤褐色　C少、F多、R含
17　黄褐色　地山被熱赤変

0　1 m

第41図　44号住居跡　カマド（S＝1/30）



0　1 m

第42図　44号住居跡　カマド掘方・ピット6～9（S＝1/30）

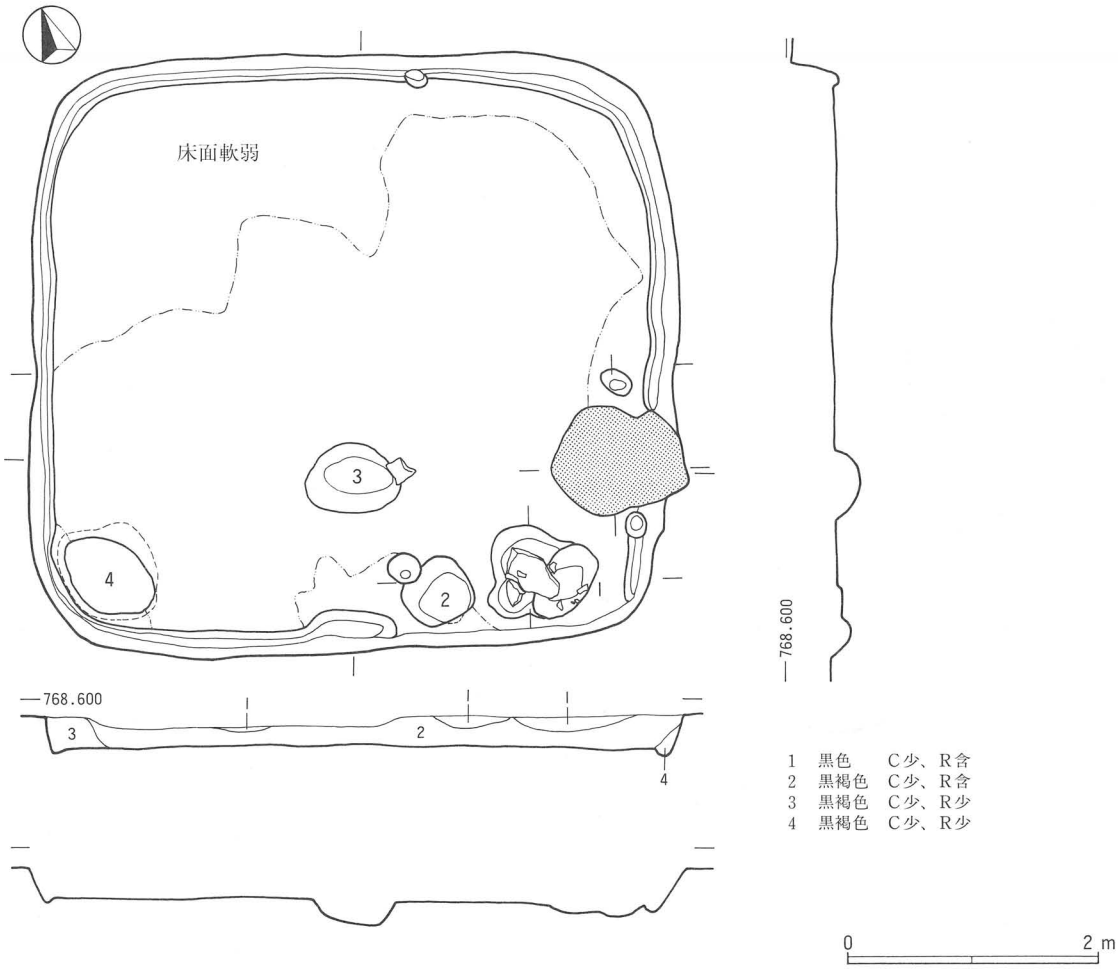
模は141cm×97cmを測る。土層断面の観察からは支脚抜き取り後、煙道部側からの土砂の流入により徐々に埋没したものと判断される。また、支脚抜き取り後も使用されていた可能性もある。構築材は石と土であるが白色粘土やローム質土は特に使用されていない。燃焼部の掘り方は被熱赤変が顕著である。燃焼部の覆土下層から甕の細片が出土しているがほとんど接合しない。　柱穴　ピット1・2・7・12が該当するか。　その他の施設　カマドに南接して土坑が穿たれている(ピット6～9)。この内ピット6の上部には礎石状に刻まれた人頭大の石が設置されている。位置的には主柱が存在してもおかしくない位置ではあるが、35・39・40号住居跡のカマド脇に見られる集石土坑と同様に平らな面を意識して設置してあることから、これらと同様の機能と考えたい。このほか住居北半に構築された土坑、ピット3・4は埋土上部に床面と同レベルに張り床がされている。これらは浅い土坑であることから貯蔵を目的としたいわゆる床下土坑とは考え難く、生業等の必要に応じて掘削された後、その目的終了後に埋め戻されたものと考えたい。　遺物出土状況　全体に散漫な出土状況を示すが、住居跡南半に礫も含めて遺物が比較的集中する。鉄製品第39図11・12は住居北東コーナー付近の出土。

遺物　食膳具　甲斐型130g、信州系820g。煮炊具　甲斐型甕2,585g、ロクロ甕180g、内黒甕20g、厚手の甕490g。須恵器2,055g。灰釉陶器4g。1の内面は炭素の付着が不十分で灰色を呈する。また、3はヘラミガキを行うものの、炭素の付着がほとんど見られない。9は須恵器短頸壺。10は須恵器壺か。内面灰色を呈するが、外面及び底部は釉を施したように滑らかで暗赤褐色を呈する。底部外縁には器面の剝落したところが2ケ所、粘土を貼り付けてあるところが1ケ所あり、その3点がそれぞれ三角形の頂点となるような配置にある。当初は水平を調整するために粘土を貼り付けたものと考えたが、底部全面が器外面と同じく暗赤褐色となっていることを考えると、トチンのような機能を考えたほうが良いのかもしれない。11は刀子か。12は不明鉄製品。図示していないが内面黒色の甕の破片の他、37号住居跡でも出土していた厚手の甕の破片が出土している。口縁部は外面が横ナデ、内面は横方向のハケを施し、焼成は堅い。口縁部直下の内面には縦方向のハケも見られる。色調は灰黄色から黄橙色を呈する。10と同一固体と考えられる破片が37号住居跡の覆土中から出土している。

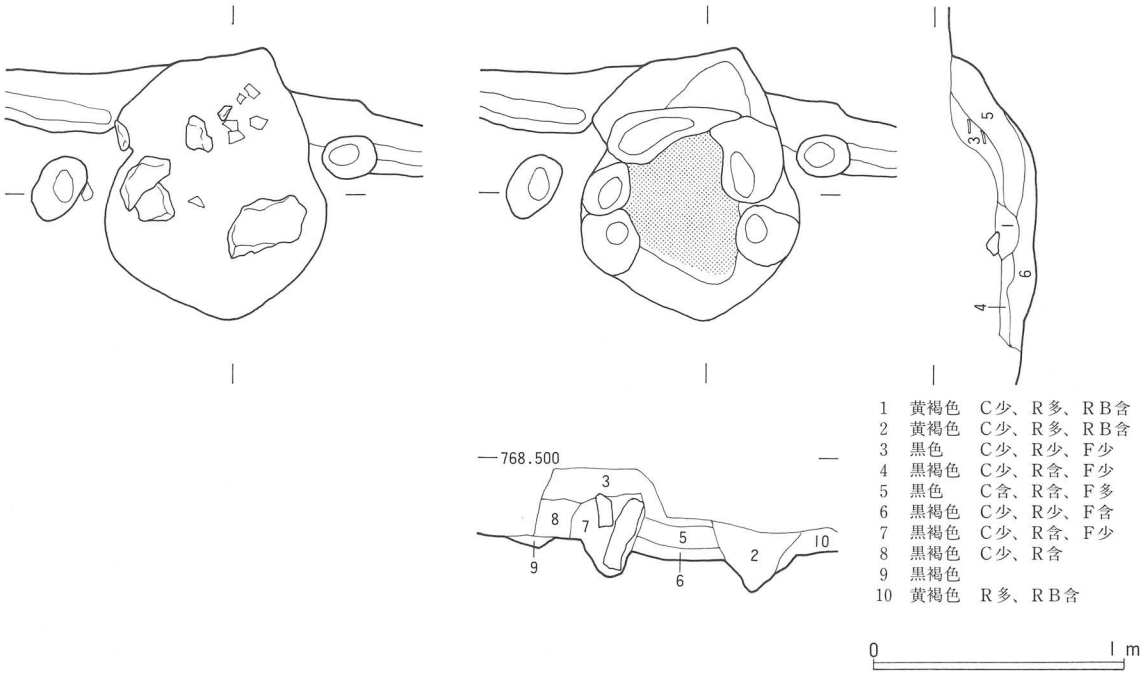
45号住居跡（第43・44・45・49図、第1表－2・第4表、図版12・19）

位置　H－3グリッド　規模　東西5.09m、南北4.73mを測る。　覆土　壁際に三角堆積が見られる以外は安定した水平堆積。確認面より最大30cmほどで床面に至る。　床面　水平に構築される。住居北西部と外縁部に部分的に軟弱な部分がある。　周溝　住居南東部で断絶する以外全周する。　カマド　住居東辺、南寄りに構築される。掘り方の規模は105cm×87cmを測る。カマド左袖の石組みは残されるものの、右袖は撹乱により欠失する。支脚を固定するピットは確認されていない。煙道部側からの土砂の流入により埋没している。掘り方燃焼部底部は被熱赤変が顕著。カマド両袖外側に小ピットが穿たれている。カマド上部構造に係わるものであろうか。　柱穴　不明。　その他の施設　住居南西コーナー部に袋状の土坑が掘削されている。形態的には貯蔵穴を想定させるものであるが確定的ではない。また、この住居でもカマド右袖周辺に人頭大の石を平らに設置した土坑が検出されている(ピット1)。土層観察からは土坑の覆土上部と言うより住居床面直上の位置からの出土である。35号住居跡等と類似したものであろう。　遺物出土状況　遺物の出土は全体に散漫で、僅かにカマド、及びピット1に集中が見られる。

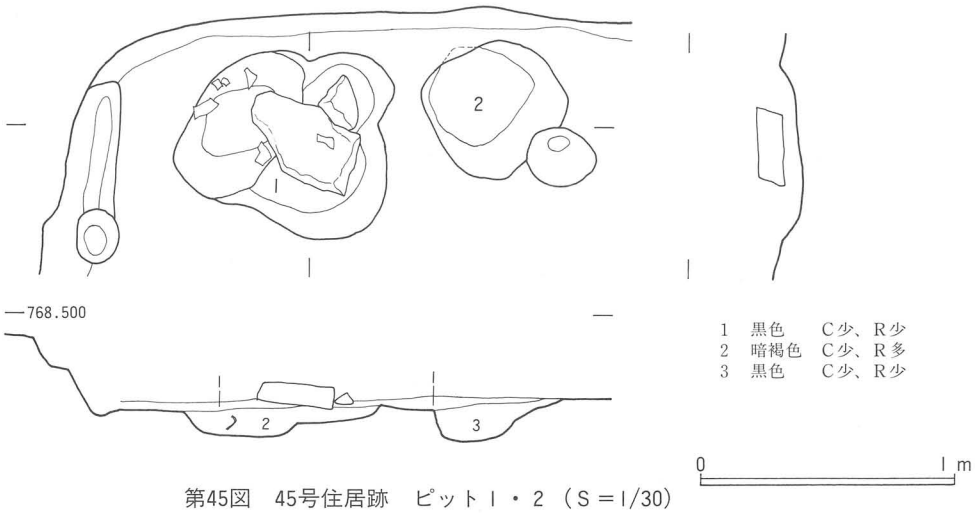
遺物　食膳具　甲斐型30g、信州系295g。煮炊具　甲斐型甕1,270g。須恵器22g。灰釉陶器3g。2の内面はヘラミガキが粗雑化し、光沢がない。外面に2ケ所「中」を墨書する。3は内外面黒色処理した耳皿。



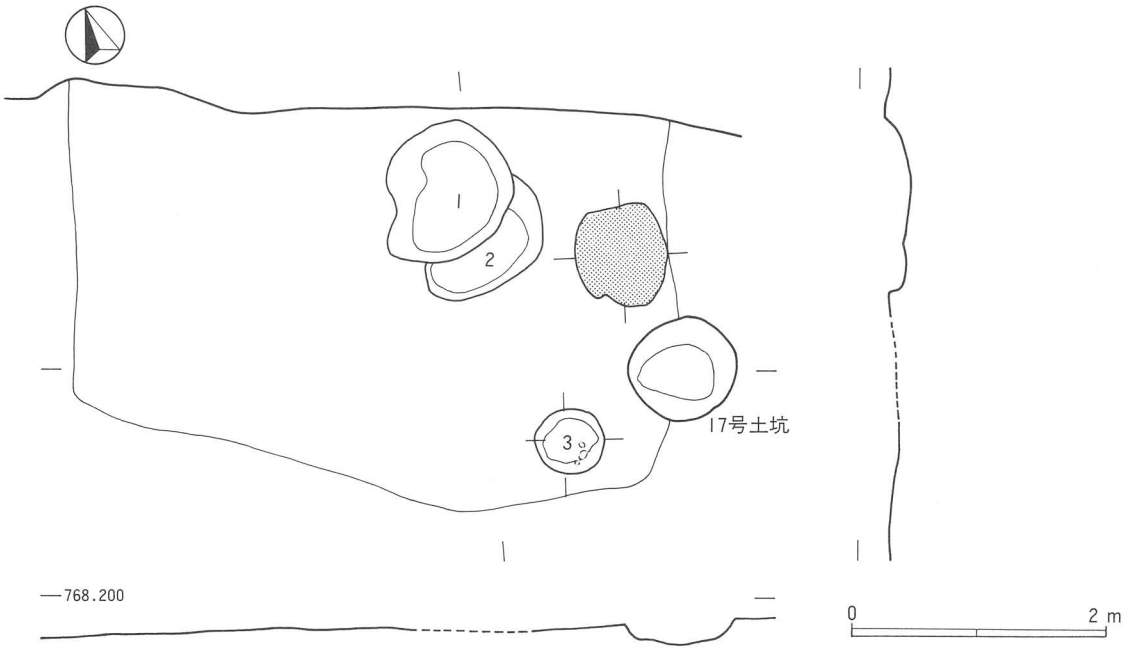
第43図　45号住居跡（S＝1/60）



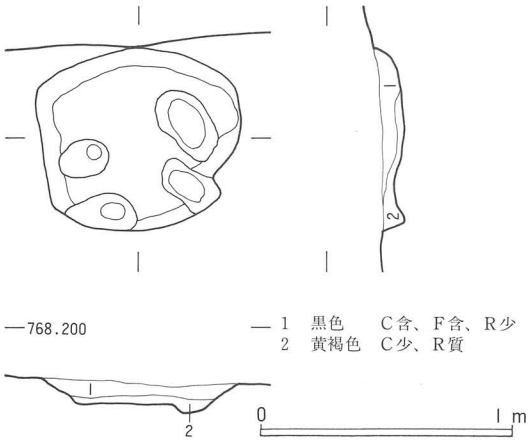
第44図　45号住居跡　カマド（S＝1/30）



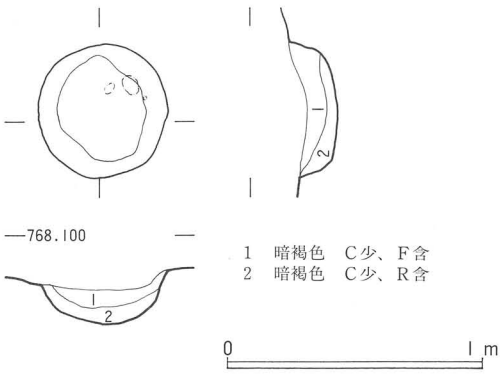
第45図　45号住居跡　ピット1・2（S＝1/30）



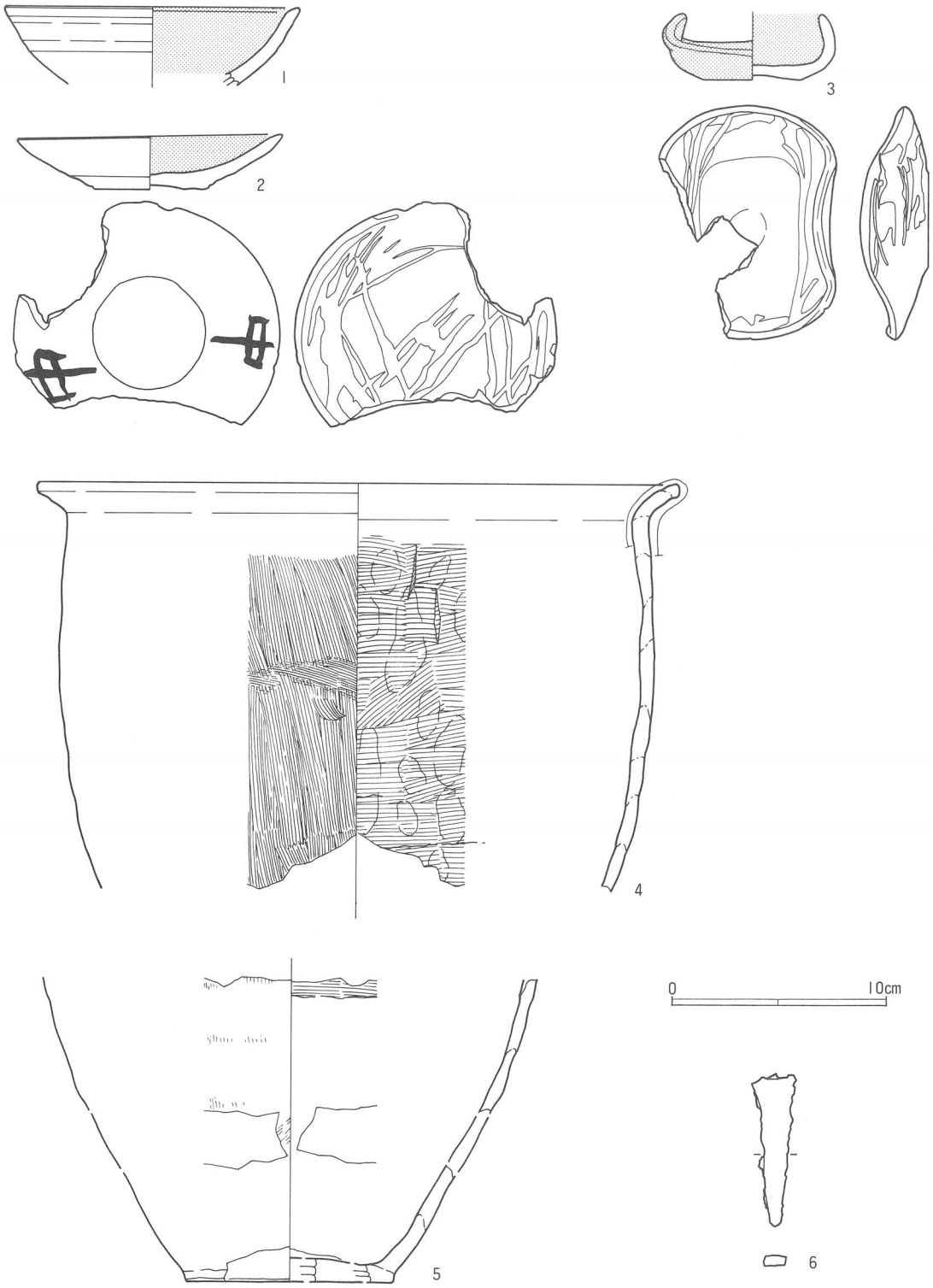
第46図　46号住居跡（S＝1/60）



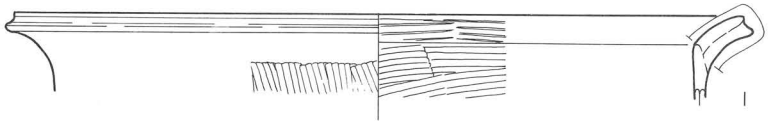
第47図　46号住居跡　カマド（S＝1/30）



第48図　46号住居跡　ピット3（S＝1/30）



第49図　45号住居跡出土遺物（S＝1/3）



第50図　47号住居跡出土遺物（S＝1/3）

6は刀子か。

46号住居跡（第46・47・48図、図版13）

位置　H－4グリッド　**規模**　床面以上を全て削平されており不明。床面の残存する範囲は東西4.66m、南北3.18mを測る。17号土坑と重複するが先後関係は不明。　**床面**　水平に構築される。全体的に軟弱。　**周溝**　検出されていない。　**カマド**　住居東辺に構築される。掘り方の規模は73cm×79cmを測る。石組みカマドだったのか底部に小ピットが穿たれている。覆土中に焼土が見られるだけで、掘り方底部は被熱の痕跡が明確でない。　**その他の施設**　覆土に焼土ブロックを含む土坑（ピット3）が検出されている。性格不明。また、プラン内にピット1・2があるが住居に帰属しない根拠が薄いため住居内の施設とした。性格不明。

遺物出土状況　図化できる遺物の出土はない。

遺物　食膳具　甲斐型4g、信州系5g。煮炊具　甲斐型甕155g。

47号住居跡（第50・51・52図、第1表－2、図版13・18）

位置　H、I－7・8グリッド　**規模**　南半を削平により欠失していることより詳細は不明。東西3.78m、南北3.55m以上を測る。　**覆土**　黒褐色を呈し、炭化物粒子を少量含む。　**床面**　住居南半を欠失する。それ以外では住居北側の一部が軟弱になっている。全体に東下がり、南下がりに構築されている。　**周溝**　床面の確認されている範囲ではほぼ全周する。　**カマド**　住居東辺やや南寄りに構築される。掘り方の規模は77cm×69cmを測る。掘り方外周部を溝状に彫り込んでいるものの底部に小ピットが見られることから石組みカマドだったと考えられる。掘り方底部は被熱赤変している。　**その他の施設**　住居南辺に土坑(ピット1)が穿たれている。性格は不明。　**遺物出土状況**　カマド内、ピット1内から小破片となって僅かに遺物が出土している。

遺物　食膳具　甲斐型16g、信州系3g。煮炊具　甲斐型甕790g。須恵器22g。

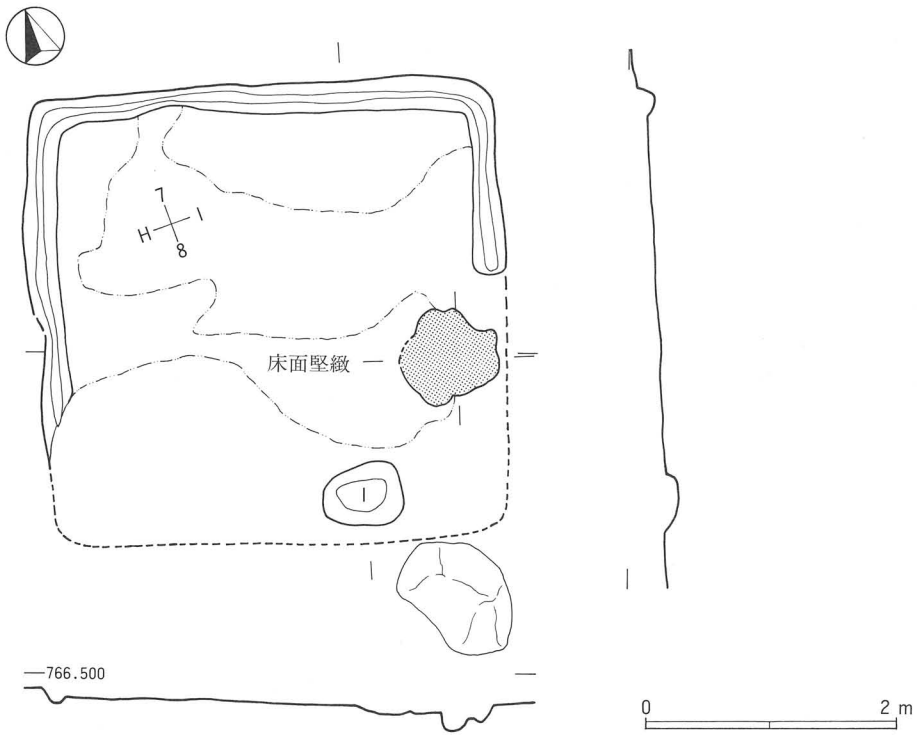
その他の遺構と遺物

1）土　　坑（第53図、図版14）

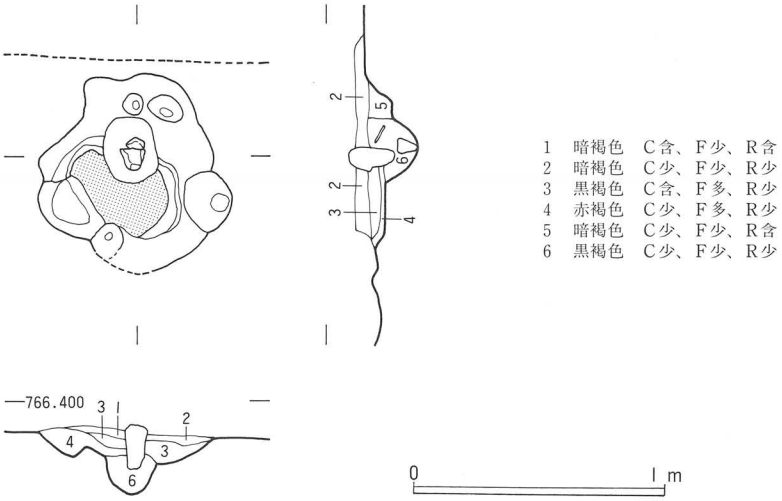
13号土坑　B－4グリッドに位置する。長軸108cm、短軸100cmを測る略楕円形プランを呈する。覆土は主に斜面下位の南側からの土砂の流入で埋没している。このことから自然堆積ではなく埋め戻されたことが確認される。土坑中央、覆土中位に拳大～人頭大の礫が投入されている。帰属時期は出土遺物がなく不明。

14号土坑　D－3グリッドに位置する。長軸92cm、短軸68cmを測る楕円形プランを呈する。断面形状は上端よりも下端の方が張り出した形態で、底部に不整形の小ピットが穿たれている。覆土上層に拳大～小児頭大の礫が敷き詰められている。出土遺物は無いが平安時代の36号住居跡を明らかに掘り込んでいることから、それ以降、中世遺物が周辺の黒色土層中から出土していることから中世の遺構であろうか。

15号土坑　D－3グリッドに位置する。重複している平安時代の住居36号住居の周溝を破壊しており、同住居覆土中にも礫が分布していることから明らかにこれよりも新しいことが確認されている。調査時の上面確認ではそのプランが不明確であったことから住居の調査を優先し、結果的に逆堀となっている。その規模は長軸120cm、短軸70cm程度、36号住居の周溝を破壊していることから深さは50cmを上回る。平面形は楕円形プランを想定している。覆土中～上位に拳大～人頭大の礫が投入されている。出土遺物がなく、帰属時期は不明であるが14号土坑と同様中世の遺構が想定されよう。

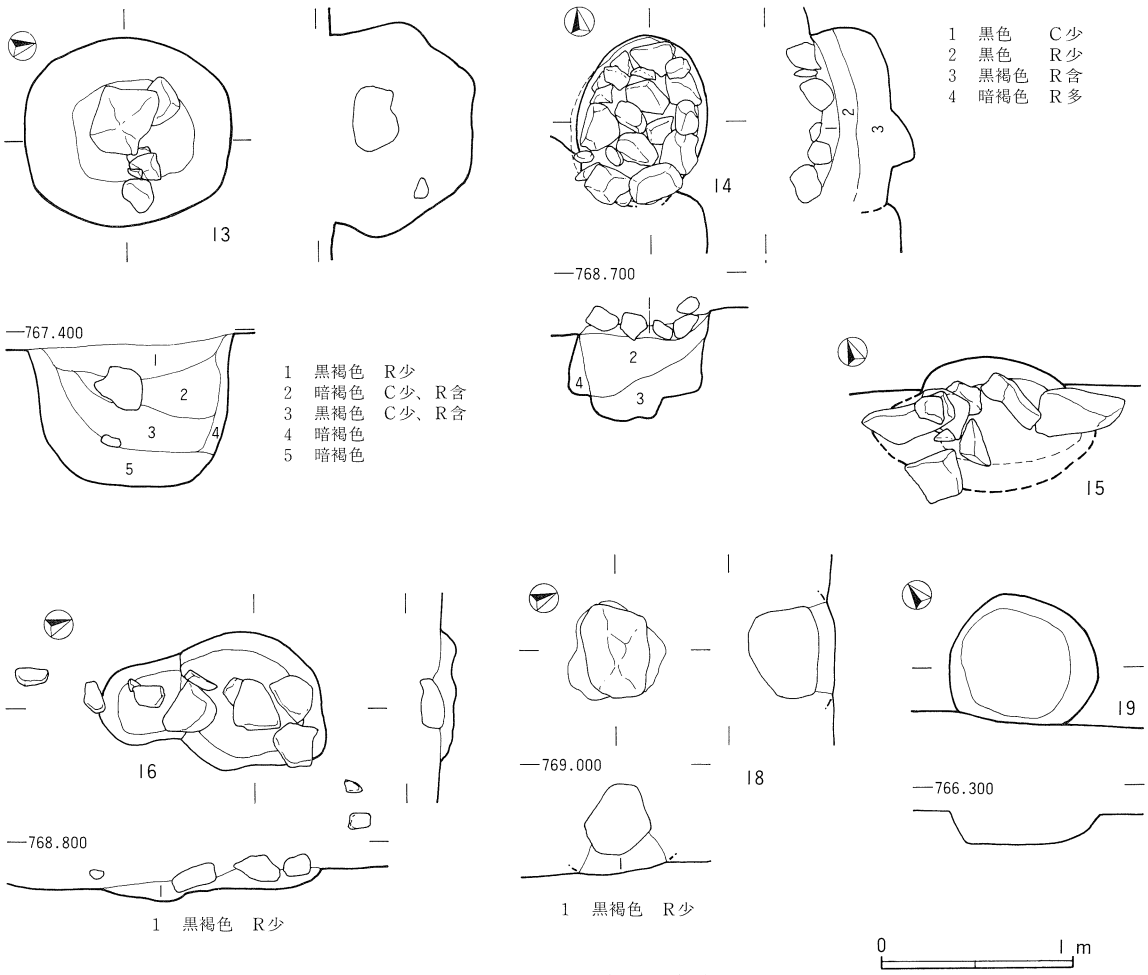


第51図　47号住居跡（S＝1/60）

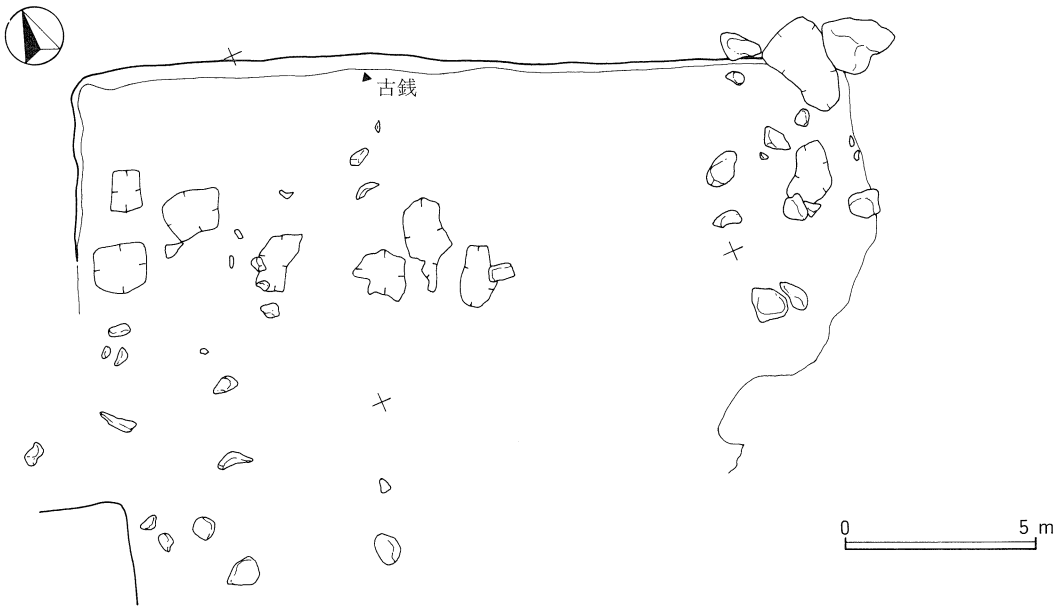


1　暗褐色　C含、F少、R含
2　暗褐色　C少、F少、R少
3　黒褐色　C含、F多、R少
4　赤褐色　C少、F多、R少
5　暗褐色　C少、F少、R含
6　黒褐色　C少、F少、R少

第52図　47号住居跡　カマド（S＝1/30）



第53図　土坑（S＝1/40）



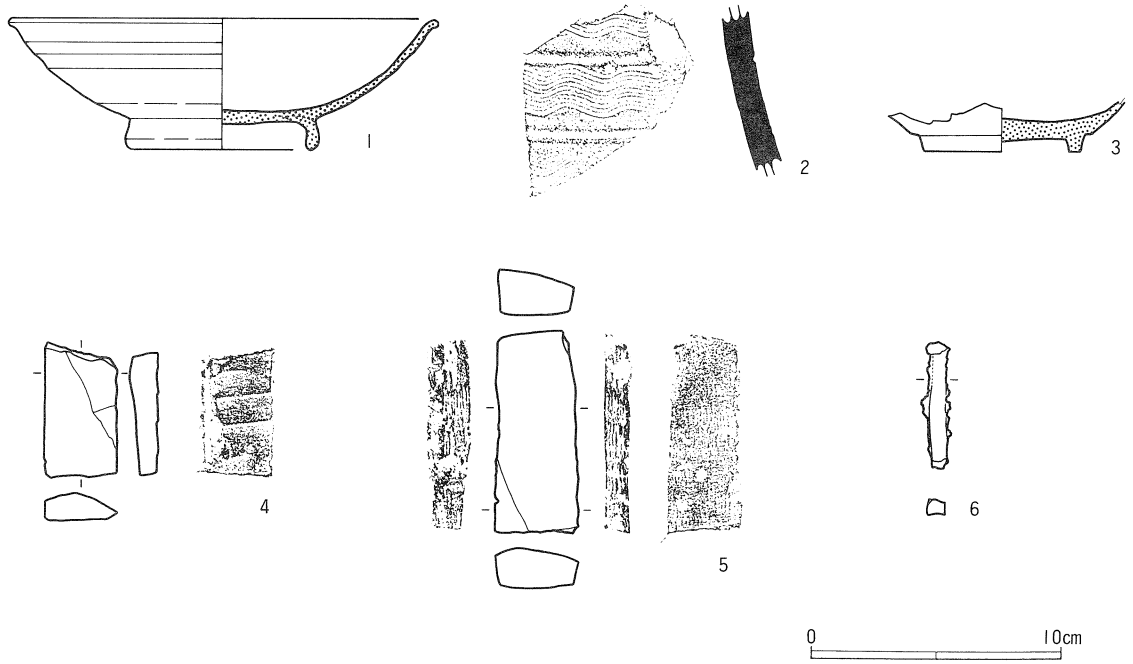
第54図　1号竪穴状遺構（S＝1/200）

16号土坑　E－3グリッドに位置する。長軸114cm、短軸71cmを測り、深さは確認面より10cm程度と浅い。不整形プランを呈する。覆土に人頭大の礫を包含する。帰属時期不明。14・15号土坑との類似した立地から中世に帰属するか。

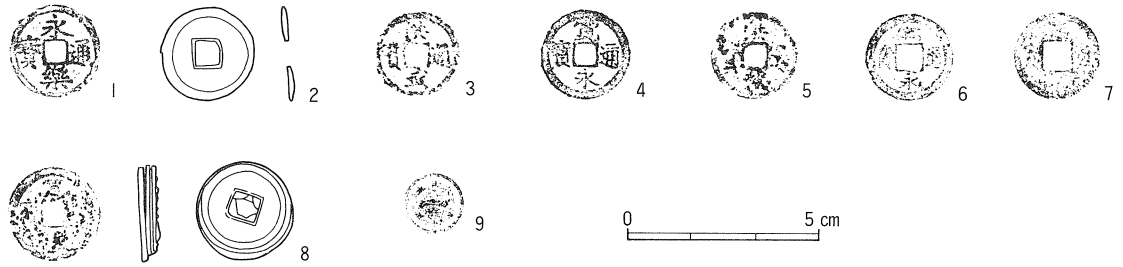
17号土坑　H－4グリッドに位置する。46号住居と重複するが先後関係は不明。直径85cmほどで、略円形プランを呈する。深さは確認面から18cmを測る。帰属時期不明。

18号土坑　D－3グリッドに位置する。直径80cmを越す木の根に包含されて人頭大の石が出土していることから、何らかの遺構と判断し精査したが明確には確認されなかった。木の根除去後に改めて精査した結果地山確認面に僅かに掘り込みが認められたことにより土坑であったことが確認された。規模は底部付近のみの確認ではあるが現存直径50cm程度で、不整円形プランとなる。帰属時期不明。

19号土坑　放流渠管渠敷設に伴う確認調査のトレンチ内で検出されている。G－11グリッドに位置する。直



第55図　住居以外の遺構出土遺物（S＝1/3）



第56図　遺跡出土古銭（S＝1/2）

径70cm程度で、略円形プランを呈する。覆土は黒褐色を呈する。帰属時期不明。

2）竪穴状遺構（第54図、図版15）

1号竪穴状遺構　Ⅰ、Ｊ、Ｋ－６・７グリッドに位置する。ここでは便宜的に竪穴状遺構としたが全体に浅いため斜面下部ではプランが確認されていない。そのため性格は不明。あるいは斜面上部を削平してテラス状に造成したものか。１ｍ前後の石の抜き取りの痕跡が見られる。北側中央立ち上がり付近から古銭（第56図２・５～８）が６枚、藁状の炭化物と共に出土している。埋葬に伴うものであろうか

3）溝状遺構（第３図参照、図版15）

５～７号溝　必ずしも全体が把握されてはいないが、方向性や規模の類似性から一連のものと判断している。現行の地籍図、旧地籍図とも整合しないものの斜面上部ほど深く掘られていることから旧道路ではなく、水流の痕跡もないことから地境の溝を想定している。

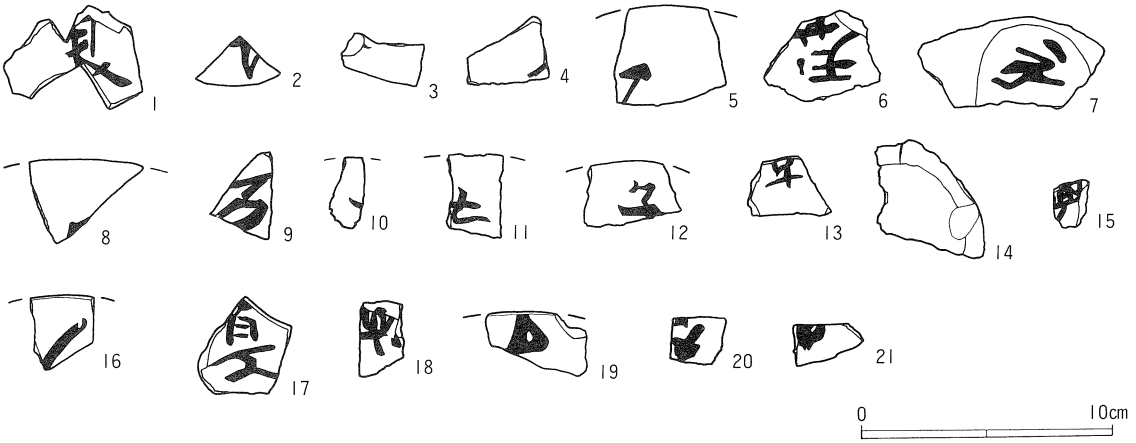
８号溝　尾根地形の肩部に位置し、水流の痕跡を伴う。人為的に掘削された遺構ではなく自然に発達した溝であろう。

９号溝　放流管渠敷設に伴う確認調査のトレンチ内で確認されている。部分的に検出されているのみのため性格は不明。帰属時期不明。

4）その他の遺物（第55・56図、第２・３表、図版19）

第55図１は12号住居跡再調査時の覆土中からの出土。美濃光ヶ丘窯後半期の灰釉陶器埦。内面にハケ塗りで施釉する。２は７号溝状遺構覆土出土の須恵器甕頸部破片。３は６号溝状遺構より出土した施釉陶器埦。近世の所産か。４は７号溝状遺構覆土出土の砥石。現存長5.3cm、重さ22.3ｇ。５は８号溝状遺構覆土出土の砥石。現存長7.9cm、重さ76.5ｇ。６はＤ－３グリッド出土の釘か。重さ6.5ｇ。

古銭は昭和のものも含めて11枚出土した。内訳は洪武通寶２枚、永楽通寶１枚、寛永通寶４枚、１銭１枚、不明３枚であった。



第57図　遺跡出土墨書土器（Ｓ＝1/3）

第１表－１　住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器種	法量 口・高・底(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	残存率 口縁 底部	接合状況	備考
第８図-１	35住	土師、甲斐型坏	12.2・4.0・4.7	外面ヘラケズリ、底部回転糸切り後、不完全なヘラケズリ	5YR5/8 明赤褐	精良、赤色スコリア含み、砂粒・白色粘土をわずかに含む	口66%、底100%	P14・15・28、カマドP23一括	「艮」墨書
第８図-２		土師、甲斐型坏	11.6・4.1・3.7	外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	5YR5/6 〃	精良、赤色スコリア含み、砂粒をわずかに含む	口50%、底100%	P－1	「艮」「入」墨書
第８図-３		土師、甲斐型坏	12.4・3.9・4.6	外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。ヘラケズリの方向が逆である。	10YR6/6 明黄褐	精良、砂・赤色スコリアを多く含む	口33%、底50%	P12	
第８図-４		土師、甲斐型坏	12.6・3.8・4.8	外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ？	5YR5/6 明赤褐	精良、赤色スコリアを含み、砂粒をわずかに含む	口33%、底25%	P15	
第８図-５		土師、甲斐型坏	14.2・—・—	外面ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐	精良、赤色スコリアを多く、砂粒・黒雲母をわずかに含む	口33%	Pit4P1、Pit4一括	
第８図-６		土師、甲斐内黒坏	15.1・6.05・(4.8)	外面ヘラケズリ	外-5YR5/6 明赤褐、内-黒	精良、赤色スコリアを少量、砂粒をわずかに含む	口25%	Pit3P2	
第８図-７		土師、甲斐内黒坏	—・—・5.0	外面ヘラケズリ、底部回転糸切り後外周の一部をヘラケズリ。	外-10YR5/4 にぶい黄褐、内-黒	精良、赤色スコリアを多く含み、砂粒を含む、白色粘土を少量含む	底100%	P2、カマドP13	
第８図-８		土師、甲斐型皿	11.6・—・—	外面ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐	精良、赤色スコリアを少量、砂粒をわずかに含む	口33%	P8・P11	
第８図-９		土師、皿	12.4・2.6・3.6	外面は底部に沿うように手持ちヘラケズリを行う。厚手のつくりである。	外-10YR6/6 明黄褐、内-7.5YR6/6橙	砂と砂粒を多く含む。赤色スコリア・半透明の鉱物粒子をわずかに含む	口25%、底25%	カマドP20	甲斐型皿とは異なる胎土である。
第８図-10		土師、皿	12.6・—・—	外面ヘラケズリ	7.5YR6/6 橙	砂と砂粒を多く含む。赤色スコリアをわずかに含む	口33%	P11	墨書「東」？、胎土は８に似ている。
第８図-11		土師、内黒坏	13.2・4.25・6.15	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り	外-10YR7/6 明黄褐、内-黒(酸化)	砂と砂粒を含み、黒雲母を多く含む	口12%、底50%	カマドP19	
第８図-12		土師、内黒坏	13.6・4.1・5.7	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り、厚手のつくりである。	外-5YR5/6、内-黒(酸化)	砂と黒雲母を含み、砂粒を多く含む	口33%、底100%	P12・P18・カマドP19・カマド一括	二次被熱による剥落あり。形態からは坏と異なる。
第８図-13		土師、内黒坏	14.0・4.95・6.8	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り	外-5YR4/6 赤褐、内-黒	砂を含み、砂粒を多く含む、黒雲母を少量含む	口25%、底90%	P17・一括・カマドP26・P2・P11・カマド一括	二次被熱による剥落あり。12と似ており、坏とは異なる。
第８図-14		土師、甲斐型小甕	16.7・13.9・7.8	口縁内面-横ハケ 口縁外面-横ナデ 体部内面-横ハケ 体部外面-縦ハケ 底部-木葉痕	10YR5/2 灰黄褐	砂・砂粒・金色の雲母を含む	口80%、底100%	一括・カマドP4・P16・P25・P22・P5・P7・P2・カマド一括	
第８図-15		土師、甲斐型小甕	—・—・8.7	内面-横ハケ、外面-縦ハケ、底部-木葉痕	外-10YR5/2 灰黄褐、内-7.5YR5/4 にぶい褐	砂を含み、砂粒・金色の雲母を多く含む	底66%	カマドP6	
第８図-16		鉄器、刀子か？	刀子の破片か。片刃。4.3g						
第11図-１	36住	土師、内黒坏	11.9・4.6・5.4	外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	外-7.5YR6/6 橙	精良、砂を多く含んだ粒の細かい土・砂粒を少量含む	口33%、底100%	P3・P5・カマドP19、一括	甲斐型とは明らかに異なる胎土である。磨滅が著しい
第11図-２		土師、内黒坏	11.6・4.25・5.0	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り後一部指ナデ	外-10YR6/6 明黄褐	砂・黒雲母を含み、砂粒を多く含む。赤色スコリアわずかに含む	口20%、底100%	P8	
第11図-３		土師、内黒坏	11.8・4.3・5.2	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り	外-7.5YR6/6 橙	砂・砂粒・黒雲母を含み、赤色スコリアをわずかに含む	口20%、底50%	カマド(P17・P23・P30・P35)一括	
第11図-４		土師、内黒坏	11.6・4.05・5.0	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り	外-7.5YR6/6 橙	砂・砂粒・黒雲母を含み、赤色スコリア・半透明・赤褐色の鉱物粒子をわずかに含む	口25%、底33%	カマド２P11-カマド一括	
第11図-５		土師、内黒坏	14.2・—・—	内面ヘラミガキ	外-7.5YR6/6 橙	砂・砂粒を含み、黒雲母を少量、赤色スコリア、半透明鉱物粒子をわずかに含む	口33%	カマド(P4・P6)・Pit3一括	
第11図-６		土師、内黒皿	12.8・2.7・5.0	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂・砂粒を含み、黒雲母を少量、半透明鉱物粒子をわずかに含む	口25%、底100%	カマドP3	
第11図-７		土師、甲斐型甕	(28.6)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	10YR3/2 黒褐	砂・砂粒を含み、金色の雲母を多く含む	口25%	P1・カマド2P1	
第11図-８		土師、甲斐型小甕	(16.9)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	5YR4/3 にぶい赤褐	砂・砂粒を含み、黒と金色の雲母をわずかに含む	口25%	カマド(P24・P27)・カマド2P17	
第12図-１	37住	土師、甲斐型坏	11.8・4.2・4.0	外面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐	精良、砂粒を少量含み、赤色スコリアを含む	口33%、底50%	P26	
第12図-２		土師、甲斐内黒坏	13.6・—・—	内面放射状暗文、外面ヘラケズリ	外-10YR6/4 にぶい黄橙	精良、赤色スコリアを少量含む	口25%	カマドP22	
第12図-３		土師、甲斐皿型	12.0・2.7・4.9	外面ヘラケズリ、底部回転糸切り	7.5YR4/6 橙	砂・砂粒を含み、赤色スコリアを多く、黒雲母・半透明鉱物粒子をわずかに含む	口90%、底100%	カマド(P8・P32・P40)	口縁外面に煤が付着
第12図-４		土師、内黒坏	13.3・4.65・5.5	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母を少量、赤色スコリア・半透明鉱物粒子をわずかに含む	口20%、底100%	P33・P49	
第12図-５		土師、内黒埦	—・—・高台径6.0	内面ヘラミガキ、底部一回転糸切り後、高台を付けてナデ	外-7.5YR5/4 にぶい褐	砂を含み、砂粒・黒雲母・赤色スコリアを少量、半透明鉱物粒子をわずかに含む	底100%	P13	
第12図-６		土師、甲斐型小甕	13.1・—・5.8	口縁内面-ナデ、口縁外面-不明、底-木葉、体部内面-横ハケ後ナデ、体部外面-縦ハケ後ナデ	10YR3/1 黒褐	砂・砂粒を含み、金色の雲母を多く含む	口50%、底100%	P57・P91・カマドP28・P1	口縁部に二次被熱あり
第12図-７		須恵、蓋？	—・—・高台径3.0	ロクロナデ、底部と高台の接合部にナデ	7.5Y5/1 灰	精良、白色の砂粒を少量含む	底100%	P10	内面に自然釉、磨滅が進行している
第12図-８		鉄器、不明製品	両端に穴を開け、そこに棒状の金具を通している。棒状の金具は四角い輪になっていたものと推測される。16.4g						
第19図-１	38住	土師、内黒	—・—・5.2	内面ヘラミガキ、底部回転糸切り	10YR6/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母を少量含む	底100%	P3	
第19図-２		土師、甲斐型小甕	(16.2)・—・—	口縁内面-横ナデ及びヘラケズリ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	7.5YR5/4 にぶい褐	砂を含み、砂粒少量、金色の雲母を多く含む	口33%	P14・カマド(P9・P18・P19・P25)	
第19図-３		須恵、甕	—・—・—	内面-当て具による圧痕、外面-タタキ	5Y5/1 灰	精良、白色の砂粒を少量、小石をわずかに含む		P4	
第22図-１	39住	土師、甲斐型坏	11.9・4.2・5.6	外面ヘラケズリ、底部回転糸切り後、外周ヘラケズリ	7.5YR6/6 橙	砂を含み、砂粒を少量、赤色スコリア・半透明の鉱物粒子をわずかに含む	底33%	住居一括	
第22図-２		土師、甲斐型皿	12.9・2.35・5.3	内面-ラセン状暗文、外面-下部を回転ヘラケズリ、底部-回転ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐	精良、砂粒を少量、赤色スコリアを多く含み、白色粘土をわずかに含む	口20%、底100%	P9-Pit9一括・住居一括	「真」墨書
第22図-３		土師、内黒坏	12.0・4.2・6.2	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒を少量、黒雲母・赤色スコリアをわずかに含む	口66%、底100%	P8・一括	「七」墨書
第22図-４		土師、内黒坏	11.4・4.3・5.8	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR5/4 にぶい黄褐	砂・砂粒・黒雲母を含み、赤色スコリア・半透明の鉱物粒子をわずかに含む	口50%、底50%	P14・Pit3一括・カマド南石組P11	
第22図-５		土師、内黒坏	—・—・5.4	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母を少量、赤色スコリア・半透明鉱物粒子をわずかに含む	底100%	P６	「石□」或いは「右□」の墨書
第22図-６		土師、内黒坏	14.6・5.8・6.6	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂と黒雲母を含み、砂粒を少量、半透明の鉱物粒子をわずかに含む	口33%、底25%	P13・P14・Pit3一括	
第22図-７		土師、内黒坏	14.4・—・—	内面-ヘラミガキ	外-7.5YR6/4にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母・半透明の鉱物粒子を少量、赤色スコリアをわずかに含む	口33%	P1・カマド南石組P5	
第22図-８		土師、甲斐型甕	(30.0)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	7.5YR5/4 にぶい褐	砂・砂粒を含み、金色の雲母を少量含む	口20%	カマドP5・P6・住居一括	
第22図-９		土師、甲斐型甕	(28.8)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	5YR4/3 にぶい赤褐	砂を少量・砂粒を多く、金色の雲母を少量含む	口33%	カマド南石組P3・Pit5・Pit9・住居一括	
第27図-１	40住	土師、甲斐内黒坏	13.6・4.25・(6.2)	内面-放射状暗文、口縁部に横方向のヘラミガキ、外面-下半を回転ヘラケズリ、底部-ヘラケズリ	外-7.5YR5/4 にぶい褐	精良、赤色スコリアを多く含み、半透明の鉱物粒子・白色粘土をわずかに含む	口20%、底25%	カマド南石組P3	
第27図-２		土師、甲斐型皿	12.6・2.6・4.2	外面-下半を回転ヘラケズリ、底部-ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐	精良、赤色スコリアを含み、白色粘土をわずかに含む	口25%	カマド南石組P4	
第27図-３		土師、内黒坏	11.9・4.6・6.0	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR7/4 にぶい黄橙	砂・黒雲母を含み、砂粒を少量、半透明の鉱物粒子・赤色スコリアをわずかに含む	口80%、底100%	P6・カマドP12・Pit7 P2・Pit6	外面のほぼ全面に煤か墨が付着
第27図-４		土師、内黒坏	12.1・4.5・6.1	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂・砂粒を含み、黒雲母・半透明の鉱物粒子・赤色スコリアを少量含む	口50%、底100%	P11	
第27図-５		土師、内黒坏	11.3・4.5・5.4	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/3 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母を少量、半透明鉱物粒子・赤色スコリアをわずかに含む	口33%、底66%	P1・P21	
第27図-６		土師、内黒坏	14.6・5.25・6.3	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母・半透明の鉱物粒子を少量、赤色スコリアをわずかに含む	口90%、底100%	P16・P18・一括	内面に器面の荒れが一周する
第27図-７		土師、内黒坏	14.0・5.6・6.1	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂・砂粒を少量、黒雲母・半透明の鉱物粒子・赤色スコリアをわずかに含む	口50%、底90%	カマドP12・一括	
第27図-８		土師、内黒埦	—・—・高台径6.8	内面-ヘラミガキ、底-ミガキ、高台接合部にナデ	10YR6/6明黄褐	砂・砂粒を含み、黒雲母・半透明の鉱物粒子をわずかに含む	底33%	P4	
第27図-９		土師、内外黒埦	—・—・高台径5.4	内外面-ヘラミガキ、底部-高台接合部にナデ	内外黒	砂・鉱物粒子を含み、砂粒を多く含む	底100%	Pit3一括	
第27図-10		土師、甲斐型甕	(29.0)・—・—	口縁内面-横ナデ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	7.5YR4/2 灰褐	砂、金色の雲母を含み、砂粒を多く含む	口33%	カマド(P4・P5・P11)・カマド南石組P5	
第27図-11		土師、甲斐型甕	(29.1)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	7.5YR5/3 にぶい褐	砂を含み、砂粒を多く、金と黒の雲母をわずかに含む	口20%	P14・カマドP14・住居一括・カマド南石組一括	
第27図-12		土師、甲斐型甕	—・—・(8.2)	内面-横ハケ、外面-縦ハケ、底部-木葉痕	5YR3/4 暗赤褐	砂を含み、砂粒・金色の雲母を多く含む	底25%	P1・P3・P22	
第31図-１	41住	土師、甲斐型皿	12.3・2.5・5.05	外面-ヘラケズリ、底-ヘラケズリ	5YR5/6 明赤褐	精良、砂を少量、赤色スコリアを多く含む	口66%、底100%	P2	墨書「収取」？
第31図-２		土師、甲斐型皿	12.2・2.1・4.8	外面-ヘラケズリ、底-ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐	砂・白色粘土を少量、砂粒・赤色スコリアを多く含む	口66%、底100%	P1・P2・一括	墨書「一丁」？
第31図-３		土師、甲斐型皿	12.7・2.5・5.2	外面-横方向ヘラケズリ、底部-ヘラケズリ	7.5YR5/6 明褐	精良、砂を少量と赤色スコリアを含む	口33%、底33%	カマドP8	

第１表－２　住居跡出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器種	法量 口・高・底(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	残存率 口縁 底部	接合状況	備考
第31図-4		土師、内黒坏	11.1・3.5・6.6	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR7/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母・半透明の鉱物粒子をわずかに含む	口33%、底50%	Pit1P6・一括	
第31図-5		土師、甲斐型甕	(32.6)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ハケ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	10YR3/2 黒褐	砂・金色の雲母を含み、砂粒を多く、黒雲母をわずかに含む	口25%	カマドP13・カマド一括・住居一括	
第31図-6		須恵、坏？	(10.3)・—・—	ロクロナデ、口縁部にナデ	2.5Y5/1(黄灰)	白色の砂粒を多く含む	口25%	カマドP2・カマド一括・住居一括	
第31図-7		灰釉、皿	15.0・2.75・高台径5.8	ロクロナデ、底部は高台接合部に強いナデ、糸切り痕残らず	5YR6/1(灰)	精良、黒色粒子をわずかに含む	口50%、底50%	P20・Pit1P1	猿投黒笹90号窯-1型式終末自然釉
第31図-8		鉄器、不明製品	鉄製品。表面が腐食で剥落し、芯だけ残ったもの。最大厚9㎜。26.2g						
第34図-1	42住	土師、内黒皿	12.8・2.5・6.2	内面ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母を少量、半透明の鉱物粒子をわずかに含む	口20%、底50%	P8・カマドP14・住居一括	
第34図-2		土師、ロクロ小甕	(14.3)・—・—	ロクロナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	精良、砂を少量、砂粒・黒雲母をわずかに含む	口33%	P12・P13・カマド(P7・P9)一括	
第34図-3		土師、甲斐型甕	(32.2)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-縦ハケ後粘土貼り付けその上から横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	7.5YR5/3 にぶい褐	砂を含み、砂粒・粒の小さい金色の雲母を多く含む	口25%	カマドP5・P22・P23・一括	
第34図-4		土師、甲斐型甕	(31.0)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	5YR4/3 にぶい赤褐	砂を含み、砂粒・粒の大きい金色の雲母を多く含む	口20%	カマドP2・P18	
第38図-1	43住	土師、甲斐型坏	(15.0)・—・—	内面-放射状暗文	5YR5/6 明赤褐	精良、砂を少量、半透明の鉱物粒子をわずかと赤色スコリアを含む	口33%	P17・一括	
第38図-2		土師、蓋			7.5YR7/4 にぶい橙	砂を含み、砂粒を少量、黒雲母・半透明の鉱物粒子をわずかに含む		P15	
第38図-3		土師、武蔵型甕	(13.0)	外面-口～頭部横ナデ、頭部直下横ヘラケズリ、それ以下は縦ヘラケズリ、内面-ナデ	5YR4/4 にぶい赤褐	粘土質、砂粒多、雲母・石英・輝石・小石わずか	口33%	P1	
第38図-4		須恵、壺？	—・—・高台径11.8	ロクロナデ、底部-ナデ、底部と高台の接合部は強いナデ	5Y5/1 灰	精良、白色の砂粒を多く含む	底50%	P(2・3・4・8・10・18・19)	
第38図-5		鉄器、鑿・楔か？	刃は両側から叩いて造る。基部近くを両側に張り出させている。基部に叩いた痕跡はない。45.6g						
第39図-1	44住	土師、内黒坏	11.6・4.35・5.0	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外10YR6/4 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・黒雲母をわずかに含む	口50%、底66%	P17・カマドP5・カマドP7・一括	
第39図-2		土師、内黒坏	10.6・4.6・4.0	内部-ヘラミガキ、底部-回転糸切り、体部下端-ヘラケズリ	外10YR7/3 にぶい黄橙	砂を含み、砂粒・赤色スコリアを少量、黒雲母をわずかに含む	口25%、底33%	P14	
第39図-3		土師、内黒坏	12.4・4.5・6.4	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り後、外周部ヘラケズリ	外-7.5YR5/4 にぶい褐	砂を含み、砂粒を少量、黒雲母をわずかに含む	口20%、底66%	住居一括・カマド一括	
第39図-4		土師、内黒坏	13.8・5.5・6.0	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-10YR6/4 にぶい黄橙	砂を少量含み、砂粒・黒雲母・赤色スコリアをわずかに含む。40住-7と似た胎土	口33%、底33%	Pit4P1-住居一括	
第39図-5		土師、内黒塊	—・—・高台径6.5	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り、高台接合部にナデ	外-10YR7/4 にぶい黄橙	砂・砂粒を含み、黒雲母を少量、赤色スコリアをわずかに含む	底90%	P28	
第39図-6		土師、甲斐型小甕	13.5・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	5YR3/3 暗赤褐	砂・砂粒を含み、金色の雲母少量、黒雲母わずかに含む	口50%	P21・一括	
第39図-7		土師、甲斐型甕	—・—・8.6	体部内面-横ハケ及びナデ、体部外面-縦ハケ、底部-木葉痕	10YR1/3 黒褐	砂・砂粒を少量含み、黒と金の雲母をわずかに含む	底50%	P23・一括	
第39図-8		土師、甲斐型甕	—・—・(9.2)	体部内面-横ハケ及びナデ、体部外面-縦ハケ、底部-木葉痕	10YR3/2 黒褐	砂を少量、砂粒・金色の雲母を多く、黒雲母をわずかに含む	底25%	P1・一括	
第39図-9		須恵、短頸壺	—・—・6.7	ロクロナデ、内外面に施釉、内面頸部には釉が留まっている。底-回転糸切り	7.5Y5/2 灰オリーブ	白色の砂粒を大量に含み、2～5㎜大の小石をわずかに含む	底100%	P9・P10	
第39図-10		須恵、壺？	—・—・16.0	内面-ナデ、外面-タタキ、下端にナデ	内-5/ 灰、外-2.5YR3/3 暗赤褐	精良、白色粒子を多く、石英をわずかに含む	底100%	P16	底部に粘土を貼り付ける。自然釉か。
第39図-11		鉄器、刀子か	折れ曲がっており、錆、亀裂が著しい。29.3g						
第39図-12		鉄器、不明製品	折れ曲がっており、剥落が著しい。13.2g						
第49図-1	45住	土師、内黒坏	13.2・—・—	内面ヘラミガキ	外-10YR6/4 にぶい橙	砂と砂粒を少量含み、黒雲母・透明の鉱物粒子をわずかに含む	口33%	Pit2P2	
第49図-2		土師、内黒皿	11.75・2.45・5.1	内面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	外-7.5YR6/4 にぶい橙	砂を含み、砂粒を多く、黒雲母をわずかに含む	口33%	P5	「中」墨書
第49図-3		土師、内外黒耳皿	10.8・3.1・4.4	内外面-ヘラミガキ、底部-回転糸切り	黒	砂を含み、砂粒を多く、黒雲母・半透明の鉱物粒子をわずかに含む		カマド(P1・P2)カマド一括	
第49図-4		土師、甲斐型甕	(29.3)・—・—	口縁内面-横ナデ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ後ヘラミガキ	2.5Y5/2 暗灰黄	砂を含み、砂粒・黒雲母を少量含む	口18%	P6・P7・P10	
第49図-5		土師、甲斐型甕	—・—・(9.6)	体部内面-横ハケ及びナデ、体部外面-縦ハケ後ヘラミガキ、底-木葉痕	外-10YR3/1 黒褐、内-10YR5/2 灰黄褐	砂・砂粒を含み、粒の小さい金色の雲母を多く含む	底25%	カマド(P4・P9・P3・一括)Pit2P5・Pit2一括	
第49図-6		鉄器、刀子か	刃はなく、木質の付着が見られる。刀子の茎部分か？10.3g						
第50図-1	47住	土師、甲斐型甕	(28.6)・—・—	口縁内面-横ハケ、口縁外面-横ナデ、体部内面-横ハケ、体部外面-縦ハケ	5YR4/4 にぶい赤褐	砂を少量、砂粒・金色の雲母を多く含む	口25%	Pit1一括	

第２表　住居跡出土以外の遺物観察表

挿図番号	出土地点	器種	法量 口・高・底(cm)	調整技法の特徴	色調	胎土	残存率 口縁 底部	接合状況	備考
第55図-1	12住	灰釉陶器・塊	(16.5)・5.2・高台径7.8cm	内外面-ロクロナデ、底部-高台との接合部にナデ、釉はハケ塗り	2.5Y7/1灰白	精良、黒色粒子を少量、白色粒子を含む	口5%・底50%	12住一括	美濃光ヶ岡窯式期後半
第55図-2	7溝	須恵、甕		内面-ナデ、外面-横方向に波線と波状文を交互に施す	内-10YR3/2黒褐、外-2.5Y6/2灰黄	精良、白色白色粒子と赤色粒子(スコリア？)を少量含む			
第55図-3	6溝	施釉陶器・塊	—・—・高台径5.3cm	釉は内外面全面と底部にも一部及ぶ。見込み部にはトチンの痕跡が残る。高台は削り出し	5Y4/4暗オリーブ	精良、白色白色粒子・黒色粒子を含む	底100%	P1	
第55図-4	7溝	砥石	上下は欠損する。最多使用面の裏は成形時のものと思われる階段状の傷が見られる。現存長5.3cm、重さ22.3g						
第55図-5	8溝	砥石	断面長方形で、最多使用面以外の3面には成形時のものと思われる平行する溝状の傷が見られる。現存長7.9cm、重さ76.5g						
第55図-6	D-3	鉄器、釘か	断面方形で、片方の端部を折り曲げている。もう片方の端部は欠損する。重さ6.5g						

第３表　古銭一覧

挿図番号	出土地点	銭種	初鋳年	直径(cm)	重さ(g)	備考
第56図-1	40号住居	永楽通寶	1408	2.45	2.65	
第56図-2	1号竪穴状遺構	?		2.4	3.3	
第56図-3	B－8	洪武通寶	1368	2.3	2.0	
第56図-4	C－3	寛永通寶		2.4	2.75	
第56図-5	1号竪穴状遺構	洪武通寶	1368	2.3	3.4	
第56図-6		寛永通寶		2.3	2.1	
第56図-7		寛永通寶		2.3	2.1	
第56図-8		寛永通寶		2.5	10.6	3枚が接着している。全て同じ撹乱部分から出土していることから、六道銭の可能性が高い
第56図-8		?		2.4		
第56図-8		?		2.3		
第56図-9	i－5	1銭	昭和16年	1.6	0.7	

第４表　墨書土器一覧

挿図番号	出土地点	墨書内容	器種	墨書部位	方向	備考
第8図-1	35号住	艮	甲斐型坏	体部外面	正位	
第8図-2		艮・⊥	甲斐型坏	体部外面	正位	
第8図-10		東	皿	体部外面	正位	
第57図-1		艮	甲斐型	体部外面	正位	
第57図-2		判読不能	甲斐型	体部外面	正位	「地」の偏だけか
第57図-3	36号住	判読不能	信州系	体部外面		
第57図-4	37号住	判読不能	甲斐型	体部外面		
第39図-2	39号住	「真」或いは「直人」	甲斐型皿	体部外面	正位	2ヶ所に墨書
第39図-3		七	信州系坏	体部外面	正位	「地」の偏だけか
第39図-5		石□或いは右□	信州系坏	体部外面	逆位	
第57図-5		判読不能	甲斐型坏	体部外面	正位	
第57図-6		判読不能	信州系	体部外面	逆位	
第57図-7	40号住	判読不能	甲斐型皿	底部		
第57図-8		判読不能	信州系坏	体部外面		
第31図-1	41号住	「取取」?	甲斐型皿	体部外面	逆位	
第31図-2		「一丁」?	甲斐型皿	底部		
第57図-9	43号住	「万」?	甲斐型	体部外面	正位	
第57図-10		判読不能	信州系	体部外面		
第57図-11	44号住	七	信州系	体部外面	正位	「地」の偏だけか
第57図-12		判読不能	信州系	体部外面	正位	「魚」?
第57図-13		判読不能	信州系	体部外面		
第49図-2	45号住	中	信州系皿	体部外面	正位	2ヶ所に墨書
第57図-14		判読不能	信州系坏	体部外面	正位	
第57図-15		判読不能	信州系	体部外面	正位	「魚」?
第57図-16	1号竪穴状遺構	判読不能	甲斐型		逆位	
第57図-17	遺跡一括	「真」或いは「直人」	甲斐型坏	体部外面	正位	
第57図-18		判読不能	信州系	体部外面	逆位	「道」?
第57図-19		判読不能	信州系	体部外面		
第57図-20		判読不能	信州系	体部外面	逆位	「福」?
第57図-21		判読不能	甲斐型	体部外面		

第4章　結　　語

1　寺所遺跡出土の文字資料について（第57図、第4表、図版20）

本遺跡で確認された文字資料は墨書土器に限られる。以下にそれらをまとめる。

35号住居跡

5点確認された。「艮」が3点、「東」？が1点、1点は判読不能であるが、9号住居跡に出土例のある「地」の偏の部分とも考えられる。第8図2は「艮」と書かれた反対側に「入」という記号のようなものが書かれている。「艮」は34号住居跡に出土例がある。

36号住居跡

1点出土しているが判読不能である。

37号住居跡

カマドより1点出土しているが判読不能である。

39号住居跡

5点出土している。「真」あるいは「直人」1点、「七」1点、「石□」あるいは「右□」1点、2点は判読不能である。「七」については「地」の偏のみを書いたものとも考えられる。

40号住居跡

2点出土している。両者とも判読不能である。

41号住居跡

2点出土している。両者とも判読は困難であるが第30図1は「収取」？、同図2は「一丁」であろうか。

43号住居跡

2点出土している。第57図9は「万」と考えられる。1点は判読不能である。

44号住居跡

3点出土している。「七」は「地」の偏の部分か。第57図12は「魚」か。「魚」は大泉村原田遺跡2号住居跡に出土例がある。1点は判読不能である。

45号住居跡

3点出土している。「中」は隣接する12号住居跡でも出土している。第57図15は「魚」か。1点は判読不能である。

遺跡（第2次調査）一括資料

5点確認された。第57図17は「真」あるいは「直人」、同図18は「道」か。他は判読不能。

1号竪穴状遺構

1点出土しているが判読不能。

第1次調査で出土した墨書土器は「偪」(1)と書かれたものが圧倒的な数量を占め、破片資料を含めれば34軒中15軒の住居跡から出土している。しかし、今回の調査では「福」と確実に読める資料は認められない。一方、第1次調査と今回の調査で共通して認められた文字として「艮」（34・35号住居跡）、「中」（12・45号住居跡）があるほか、「七」が「地」の偏の部分だけに省略したものと考えるならば、2・9・39号住居跡で

出土していることとなる。しかし、第１次調査で「七」と省略したものは認められない。

墨書を行う土器は、甲斐型及び信州系とされる黒色土器の食膳具に限られ、両者に区別なく墨書されている。今回の調査では甲斐型14点、信州系14点であったが、これには各住居跡で甲斐型、信州系どちらの食膳具を主体的に使うかが大きく関係している。

墨書される器種は杯が数量的に最も多いが、皿への墨書も目立つ。全出土量における墨書土器の比率で考えると皿の方が高い比率になると考えられる。墨書される部位は体部外面が基本であるが皿に２点、底部に墨書するものがある。その方向は正位が多数を占め、逆位は少数である。

(1) 報告書では「偪」とされているが、山下孝司氏は文字の分析から「福」としている。その他似た文字については「侈」の草書体、「禍」の草書体の可能性を指摘している（山梨県教育委員会　1987 『寺所遺跡』、山下孝司 1994 「墨書土器に関する一考察―寺所遺跡に見る墨書土器のありかた―」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会）。

2　寺所遺跡43号住居跡出土の武蔵型甕について

43号住居跡から出土した武蔵型と考えられる甕は、頸部直下に最大径があり、胎土は砂粒を含むものの赤褐色の緻密なもので、頸部を直立させて口縁を外傾させる、いわゆる「コ」の字型の口縁を持つ。また、強いナデを頸部と体部の境及び口縁部に、ヘラケズリを頸部直下は横方向、それ以下は縦方向に行う。以上の特徴は武蔵型甕と共通し、胎土も甲斐型甕とは異なることから、この甕が甲斐国内で模倣して作られたものではなく、武蔵型甕を生産、あるいは使用する地域から製品の状態で運ばれてきたものと考えられる。

本遺跡は八ヶ岳南麓に位置するが、この地域は黒色土器と灰釉陶器の出土量が多いなど、国府周辺の土器様相とは異なる特徴を持つことから、以前より信濃国とのつながりが指摘されてきた。信濃国内での武蔵型甕の分布は広範囲に渡るが、特に東信地方では武蔵型甕が10世紀初めまで煮炊具の中心的な位置を占めていた(1)。長野県の編年からは８世紀前半に出現する武蔵型甕が、９世紀前葉にはそれまでの「く」の字型から「コ」の字型の口縁に変化し、10世紀以降「コ」の字型が崩れていくという変化を見ることができる(2)。これに従えば、頸部の直立がはっきりしている本遺跡例は９世紀後半に含まれるものとなる。口縁部の形態と伴出する甲斐型土器からは今回出土した甕が後述する県内の出土例の中では最も新しい時期のものと判断される。また、佐久市薊沢遺跡の報告(3)では武蔵型甕を口径から３法量に分類しているが、中型に含まれる本遺跡例には台付と無台両方の可能性がある。

山梨県内では寺所遺跡以外に甲府市桜井畑遺跡(4)、韮崎市北下条遺跡(5)、高根町湯沢遺跡(6)、同川又坂上遺跡(7)で出土例があり、少ないながらも北巨摩地域に分布が偏る傾向も認められる。しかし、各遺跡とも１個体の報告に留まっており、その出土数は非常に少ない。また、ある時期に集中して出土するような現象も見られない。このような出土状況からは甕が本来の使用の目的のために運ばれてきたとは考え難く、何かの付属品として、例えば容器として運ばれたとも考えられる(8)。

(1) 長野県教育委員会　㈶長野県埋蔵文化財センター他　1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２　佐久市内その２　本文編』

(2) (1)文献及び
長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター
1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４　松本市内その１　総論編』

1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 長野市内その４ 篠ノ井遺跡群遺物編』

1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 更埴市内その５ 更埴条理遺跡・屋代遺跡群古代１編』

(3) (1)文献及び

佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター 1988 『薊沢・蔦石』

御代田町教育委員会 1995 『下荒田遺跡』

(4) 山梨県埋蔵文化財センター他 1990 『桜井畑遺跡Ａ・Ｃ地区』

(5) 韮崎市教育委員会 1991 『北下条遺跡』

(6) 山梨県埋蔵文化財センター他 1990 『湯沢遺跡』

(7) 山梨県埋蔵文化財センター他 1993 『川又坂上遺跡』

(8) (1)に同じ

3 寺所遺跡のカマドの掘り方について

本文中の事実記載でも触れておいたが、カマドの掘り方を溝状にほぼ全周させるものが39・41・43号住居跡から検出されている。これらは石組みカマドに見られる、石を設置するために掘られる小ピットの連続したものとは明らかに異なる様相を示している。39･41号住居跡はほとんど覆土が無いほど表土流出が顕著(現在の表土の意味で、平安時代当時から同様な状況であれば、むしろ平地式の住居であった可能性も考慮される）で、比較的覆土の安定していた43号住居跡は肝心のカマドの部分が大きく撹乱されている等、いずれの住居跡も依存状態が不良で、煙道部等カマドの構造が明らかになっていない。また、41号住居跡のカマド周辺に僅かに石が散乱しているものの、果たしてこれらがカマドの構築材であったのか確証を持てない上、粘土等、他の構築材の痕跡も残されていない。このような状況からここではこの掘り方の痕跡を置きカマドのものである可能性を指摘しておきたい。

現在までに置きカマド自体は破片を含めて多数の遺跡から出土しているものの、その出土状態から使用形態を明らかにできる資料は管見に触れない。屋内で通常の調理等の機能を想定していいものなのか、補助的あるいは臨時的に設置されて、生業に関わり使用されたのか、あるいは屋外で使用されたものなのか等、置きカマド自体の性格を今後明らかにしなければ結論の出せない問題と考えられる(1)。

(1) 置きカマドを祭祀具とする説もあり、その論拠として完形で遺存するものがほとんどないこと、造り付けのカマドが存在し、あえて日常の使用に供するとは考えられないこと等が挙げられるが、積極的な論拠に乏しいと言えよう。最終的に祭祀に用いられ破却されることは十分考慮されるにしろ、当初から祭祀行為に供するためだけに製作されたとするには問題がある（岡野秀典 1994 「甲斐国の竈形土器」『山梨考古学論集Ⅲ』山梨県考古学協会)。

4 寺所遺跡のカマド周辺施設について

寺所遺跡の住居内のカマドの出現位置は１、２次調査を含めてカマドの位置の確定できているもの42軒中39軒が住居東辺の南半が93％と圧倒的に多数を占める。この共通の規範もさることながら、ここで注目しておきたいのがカマドに南接して住居南東コーナーに構築される土坑状の施設である。住居東辺、南半にカマドを構築するもの39軒の内、20軒がこの施設を有している。

この施設は本文中で触れたとおり浅く、平面プランは略円形、あるいは不正形となる。規模的には柱穴が

想定されるものに比べやや大きい傾向にある。また、単独の土坑状のものと複数のものが重複するものが存在する。更に、この施設の上部に配石、もしくは石を蓋状に配したものが見られる。1次調査については本文中にそのような記述は無いものの、32・33号住居跡に配石状の石が検出されている。この内32号住居跡ではカマド前面にも同様の配石とその下部に土坑状の施設が伴う。2次調査では35・45号住居跡に蓋状の石が検出されており、39・41号住居跡に配石が見られる。また、44号住居跡では礎石状に人工的に刻んだ石が蓋状のものと同様な出土状況を呈する。以上の7軒の内、1次調査の33号住居跡は写真で判断する限りは異なるのだが、他の6軒については何れも石を平らに置くように設置されていることに注意したい。44号住居跡で礎石状の石が検出されていることから他の5軒についても柱の礎石としての可能性も検討の余地はあるのだが、これらを柱の礎石とした場合、その下部の土坑状の施設は上屋の改修により最終的に機能していないことになる。また、柱穴配置の明らかな住居跡がほとんど無い中で、住居南東コーナーに限って礎石が残されるという現象も理解し難い。更に下部の土坑状の施設の覆度堆積は2次調査の観察所見からしまりはやや弱いか弱い傾向にある。

このような状況からこの配石、蓋状の石の礎石としての機能、ひいては住居南東コーナーの土坑状の施設の柱穴としての機能は考え難い。ここでは下部の土坑状の施設の規模の差、単独、重複の別はあるものの、この土坑状の施設の貯蔵穴としての機能を、同様に、規模の相違、下部施設との対応関係等、今後に課題を残すが、配石を貯蔵穴の蓋石としての機能、あるいはカマド周辺という位置関係からこの一連の石を用いた施設を棚状の機能を有したもの(1)として積極的に評価していきたい。

(1) 近年、カマド周辺の竪穴壁に接して平行に設けられた段差のある施設を棚状の施設として機能的な空間を構成するものとし積極的に評価する動きがある（平野　修　1999「山梨県内における古代竪穴住居の構造―北巨摩郡長坂町石原田北遺跡Ｊマート地点の事例から―」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会）。今回取り上げた一連の遺構とは構造的に異なるものを指している。

5　寺所遺跡の平安時代集落の広がりと群別について

第1次調査Ｃ区の平安時代集落全測図と第2次調査区の平安時代集落全測図を合成したものを第55図に掲げた。寺所遺跡の平安時代集落は約3万m²近い範囲の中に44軒の竪穴住居跡と3棟の掘立柱建物跡から構成される（土坑については平安時代の遺物の判出がなく当該期のものとは判断できない）。この数値は調査区南側の尾根上に未調査部分を含むことから今後の調査により修正が加えられる可能性はあるもののそれほど多くの異動はないものと考えられる。

この測量図から住居跡間の切り合い関係がほとんどないこと、一定の間隔を持って竪穴住居跡が構築されていることが看取される。また、調査精度の問題（1次調査は基本的にトレンチ調査により遺構の検出された部分を拡張して調査されている）、当時の生活面の問題（表土流出の顕著なことは先述のとおり）等制約はあるものの現状で残された遺構から判断すると、この尾根上は居住域としてのみ機能しており、墓域や生産域は別の地点に求めなくてはならないであろうことが指摘できる。

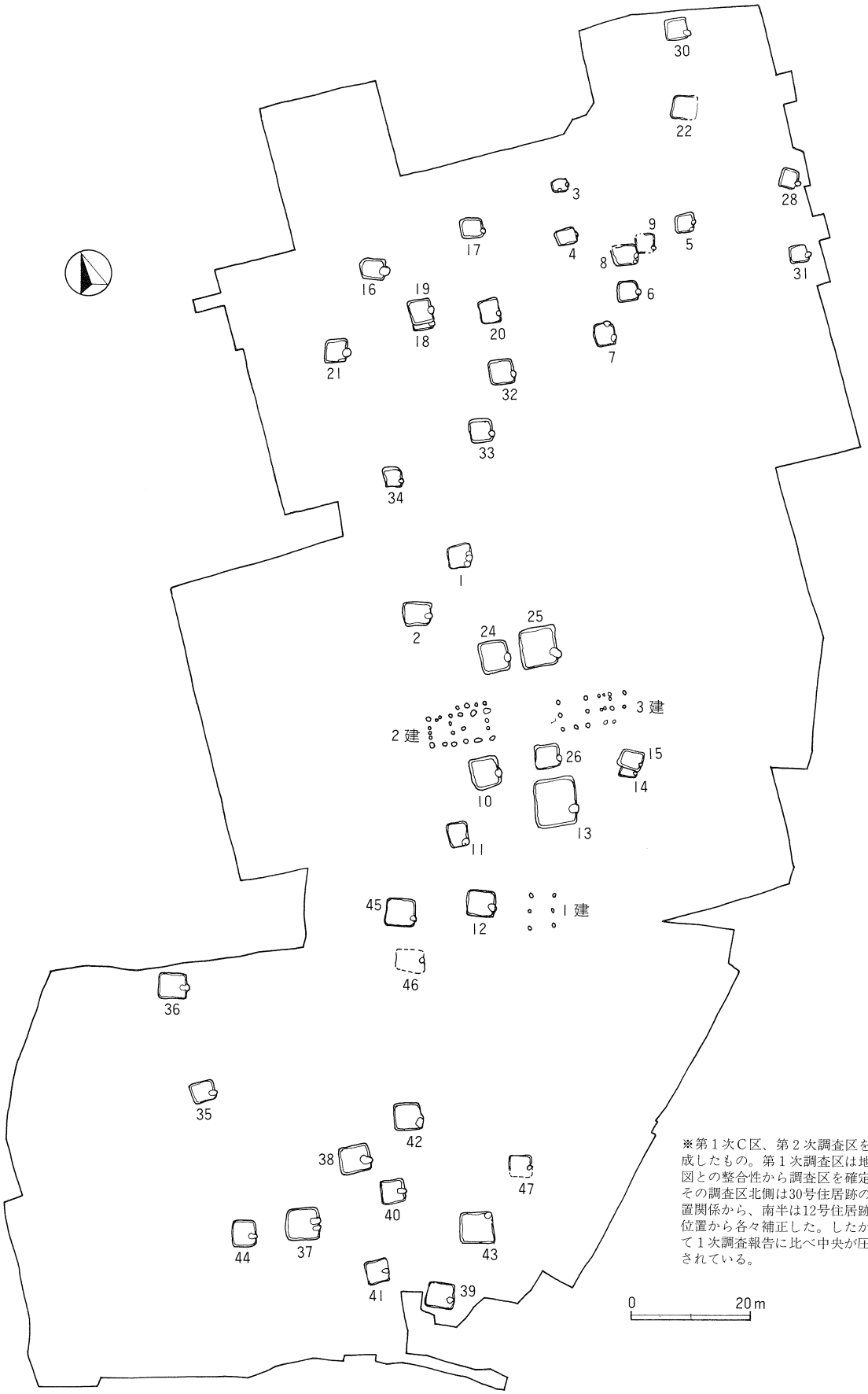
さて、集落内の住居跡の空間分布を見ると集落中央の10・13・24～26号住居跡、2・3号掘立柱建物跡の整然とした纏まりを一群のものとして、仮にこの集落の中央建物群（以下中群とする。）と位置付け、その以北、以南に大きく集落の群別が可能であろう。ここで北群としたものを見ると3・4・7号住居跡とその西側の17・20・32・33号住居跡の間が他の住居跡の立地と比べ若干離れて存在していることに気づく。ここで

は作業仮説としてこの間に境界を設定して３～９・22・28・30・31号住居跡の纏まりを北Ａ群、１・２・16～21・32～34号住居跡を北Ｂ群として群別する。同様に南群を見るとその分布から11・12・45・46号住居跡、１号掘立柱建物跡を南Ａ群、35・36号住居跡を南Ｂ群、37～44・47号住居跡の纏まりを南Ｃ群として認識したい。

第５表に建物の主軸方位の分布を示した。１次調査部分については地籍図との整合性から30号住居跡の位置を確定し、12号住居跡の再調査からその位置を補正しているため必ずしも正確な数値を得られていないことを注意しなければならないが、その分布を見るとＥ－７～13°－Ｎ（Ⅰ群）、Ｅ－15～19°－Ｎ（Ⅱ群）、Ｅ－21～25°－Ｎ（Ⅲ群）にある程度の分布の集中が見られる。これらを集落の群別に見ると北Ａ群では３・５～８・30・31号住居跡がⅠ群、22号住居跡がⅢ群、北Ｂ群では１・18～20号住居跡がⅠ群、16・17・21・32～34号住居跡がⅡ群、２号住居跡がⅢ群となる。中群では14・15号住居跡以外は全てⅠ群である。南Ａ群では11号住居跡、１号掘立柱建物（主軸と直行する方位で捉えた）がⅠ群、12・45号住居跡がⅢ群、南Ｂ群では36号住居跡がⅢ群、南Ｃ群では37・38・40～44号住居跡がⅠ群、47号住居跡がⅡ群、39号住居跡がⅢ群となる。建物の主軸方向の僅かなズレとその分布傾向をどう評価するのか大きな問題となるが、この集落では後述するが遺構の帰属時期による差ではないことが明らかであり(1)、ここでは居住者の帰属する集団による差、帰属集団（血縁集団、同族集団等が考えられようか）ごとの個性として評価していきたい。以上の仮説に立ったとき、北Ａ群でのⅠ群の卓越、北Ｂ群でのⅡ群の卓越、中群でのⅠ群の卓越、南Ｃ群でのⅠ群の卓越は興味深い内容を持っている。則ちこの仮説を採った場合、帰属集団ごとの集住傾向が指摘されるのである。

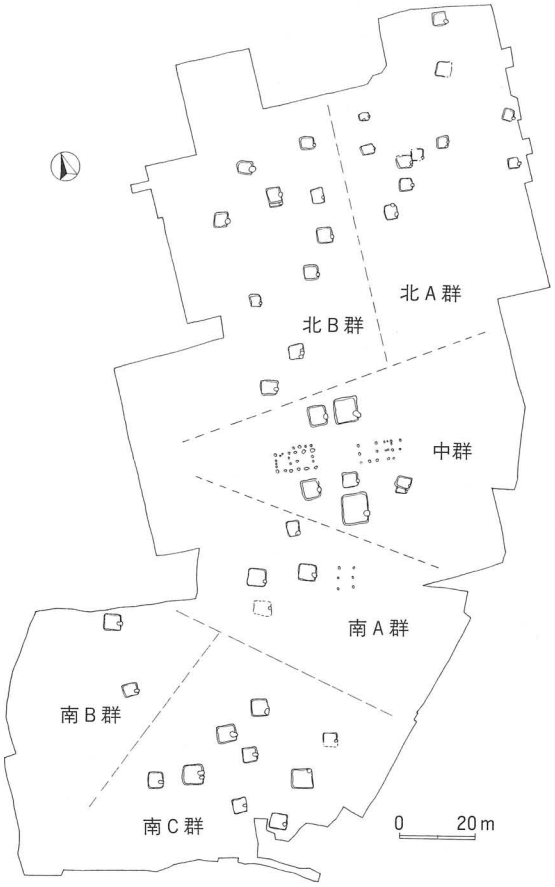
さらに、住居跡の時期的変遷(2)についてみると甲斐型土器Ⅷ期から集落が形成されるが、集落の北端に単独に30号住居跡が見られるだけである。次いでⅩ期の遺物が集落の南端、44号住居跡からⅪ期の遺物と混入しながら見られる。やはり単独の立地で、集落としてのまとまりは形成されていない。大きく転換するのはⅪ期からで、中群には全く遺構が分布せず、集落中央に大きく遺構の空白域を持ち北、南の２群に大別されるものの、尾根上全域に遺構が分布するようになる。北Ａ群では４・８号住居跡、北Ｂ群では17・20・32号住居跡、南Ａ群では45号住居跡、南Ｂ群では36号住居跡、南Ｃ群では38・39・40・44号住居跡が見られる。細かく見ると北群はむしろこの段階は一定のまとまりを見せ、同一の住居群と見ることも可能であり、南群については当初からＡ～Ｃ群に分離していたものと想定される。Ⅻ期になると集落域全面に広がり、この集落の最盛期を迎え、各住居跡群に遺構が出揃うようになる。この段階で北Ａ群、北Ｂ群が分離する。南Ａ群はむしろ中群と同一の住居跡群として把握される。ⅩⅢ期にはこの集落は終焉を迎え、住居跡の数が大きく減少する。中群では24・25号住居跡、北Ａ群では28号住居跡、北Ｂ群では18・19号住居跡が見られるだけである。

また、出土遺物はカマド、貯蔵穴内からの出土といった特殊な出土状況を除くと、必ずしも積極的にその居住者の使用を裏付けるものではないものの、ある一定程度の居住者、居住集団の性格を表すものと考えられる。例えば緑釉陶器は僅かに小破片が中群の13号住居跡から図化はされていないものの数点出土していると報告があるのみであるが、その意味を積極的に考える必要がある。同様に灰釉陶器、須恵器は非常に少ない傾向にあるが、その分布は北Ａ郡では６号住居跡に須恵器、灰釉陶器があるのみで、北Ｂ郡では32号住居跡に灰釉陶器があるのみである。中郡においては13・14・25号住居跡に灰釉陶器が、24号住居跡に須恵器が見られる。南Ａ郡では11・12号住居跡に灰釉陶器が、12号住居に須恵器が見られ、南Ｂ郡では見られない。南Ｃ郡では41号住居跡に灰釉陶器が見られるのみであるが、須恵器は37・41・43・44号住居跡に見られる。以上のように中群を除くと灰釉陶器の分布は各群１・２軒程度で、その量的にも極めて貧弱な状況を示す。須恵器についても同様の傾向にあるが、南Ｃ群については43・44号住居跡に甕、短頸壺といった貯蔵具を含み若干異なった傾向にある。以上のように食膳具に限定すると、先の住居跡の主軸方向による群別よりも台

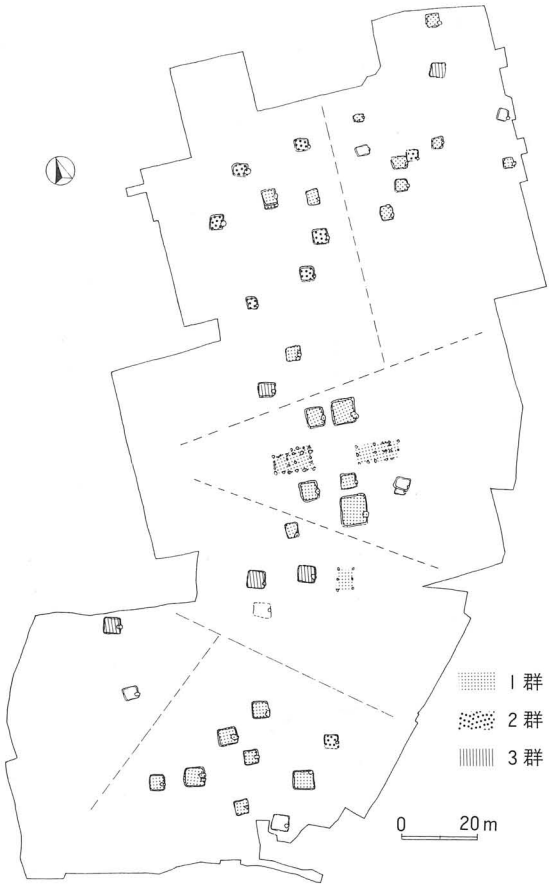


※第1次C区、第2次調査区を合成したもの。第1次調査区は地籍図との整合性から調査区を確定し、その調査区北側は30号住居跡の位置関係から、南半は12号住居跡の位置から各々補正した。したがって1次調査報告に比べ中央が圧縮されている。

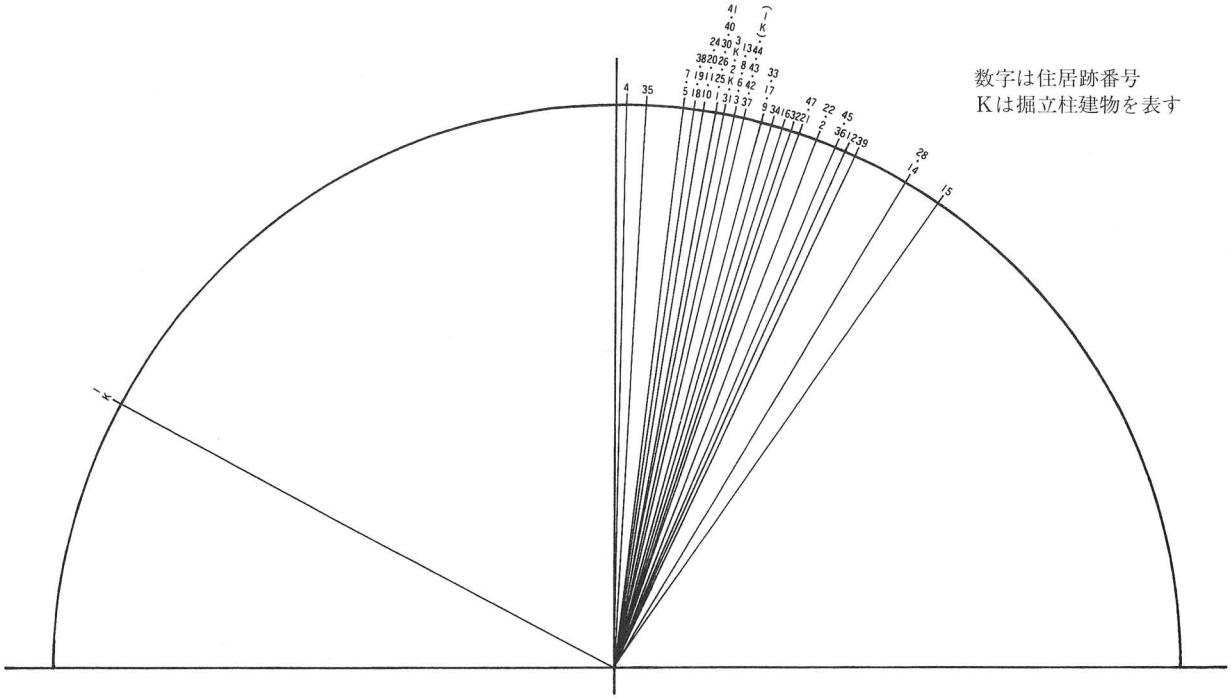
第58図　寺所遺跡　平安時代集落全体図（S＝1/1000）



第59図　寺所遺跡住居跡群別図



第60図　寺所遺跡住居跡主軸方位による群別図



第５表　寺所遺跡平安時代遺構主軸方位

第61図　寺所遺跡住居跡時期変遷図

地上の占地による群別に、より格差が大きく、中群以外では各群１・２軒程度という出土状況は正しく中群の中核的建物群としての性格を窺わせるものである。

鉄器類の保有については刀子、鉄鏃、鋸、紡錘車の他、器種不明のものも多いがこれらを群別に見ると、北Ａ群では全く出土していないものの、各群に普遍的に見られる。ただし、13号住居跡から鞴の羽口と共に鉄鉗が出土していることは鉄器製作に関わる遺物であり、この住居跡で直接鉄器を製作していた痕跡は報告されていないものの鉄器製作集団・工人を掌握していた可能性もあり注意される。同様のことがこの地域では決して報告例の多くない土錘が１点だけこの住居跡から出土していることから河川での漁も管理していた可能性があるとするのは飛躍であろうか。即ち以上では中群の優位性というよりも、13号住居跡の傑出した内容が注意されるのである。

(1) 主に時期変遷を捉える上で遺構の主軸を指標としているものが多いが、この遺跡では明らかに時間的な指標となるものではなかったため、別の意義付けで集落の分析を試みた。

(2) 遺構の時期変遷は渡邊の分析による。住居跡単位に出土器種の格差があり、基本的に坏を指標としているものの甕を指標としたものもあり、その示す年代観には若干の誤差を含む。なお、土器の分類・編年については宮ノ前編年に従った（櫛原功一　1992「第５章第５節宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器・陶器」『宮ノ前遺跡』韮崎市教育委員会）。

参考文献

山梨県教育委員会・山梨県埋蔵文化財センター

1986　第13集　『柳坪遺跡』

1987　第27集　『寺所遺跡』

1990　第57集　『湯沢遺跡』

1990　第58集　『城下・原田遺跡』

1993　第75集　『川又坂上遺跡』

雨宮正樹　1938「山梨県湯沢遺跡」『日本考古学年報』36　日本考古学協会

保坂康夫　1984「５．東原遺跡」『年報１』山梨県埋蔵文化財センター

須玉町教育委員会　1983『大小久保遺跡』

高根町教育委員会　1984『東久保遺跡』

小淵沢町教育委員会　1983『前田』

小淵沢町教育委員会　1985『前田遺跡』

韮崎市教育委員会　1991『北下条遺跡』

韮崎市教育委員会　1992『宮ノ前遺跡』

新宿区区民健康村遺跡調査団　1994『健康村遺跡』

社口遺跡発掘調査団　1997『社口遺跡』第３次調査

長野県教育委員会・㈶長野県埋蔵文化財センター他

1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書３　吉田川西遺跡』

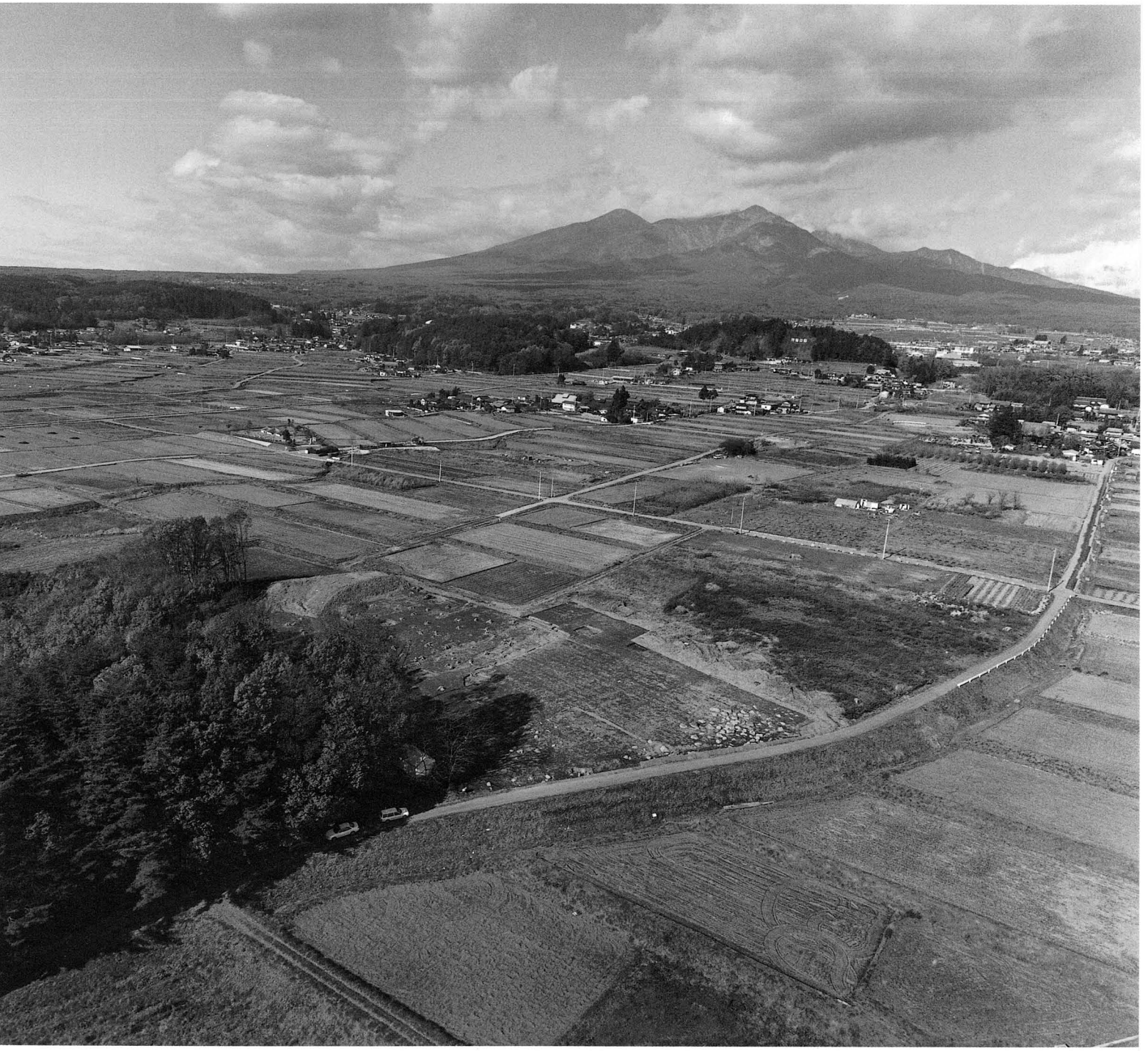
1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４　松本市内その１　総論編』

1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16　長野市内その４　篠ノ井遺跡群』

1991『上信越自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書２　佐久市内その２』

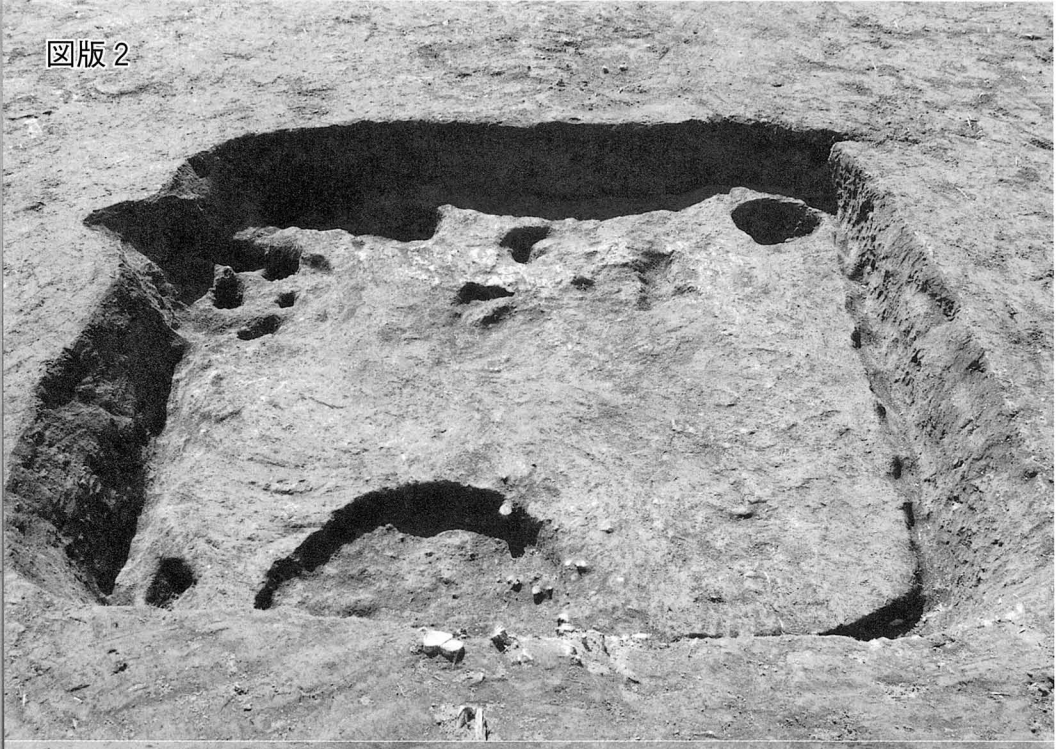
1999『上信越自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書26　更埴市内その５　更埴条里遺跡・屋代遺跡群』

写真図版



点在する小山が流れ山地形。寺所遺跡（中央下）もその典型的なもの。同様の地形を利用して谷戸城も立地している。

図版 2



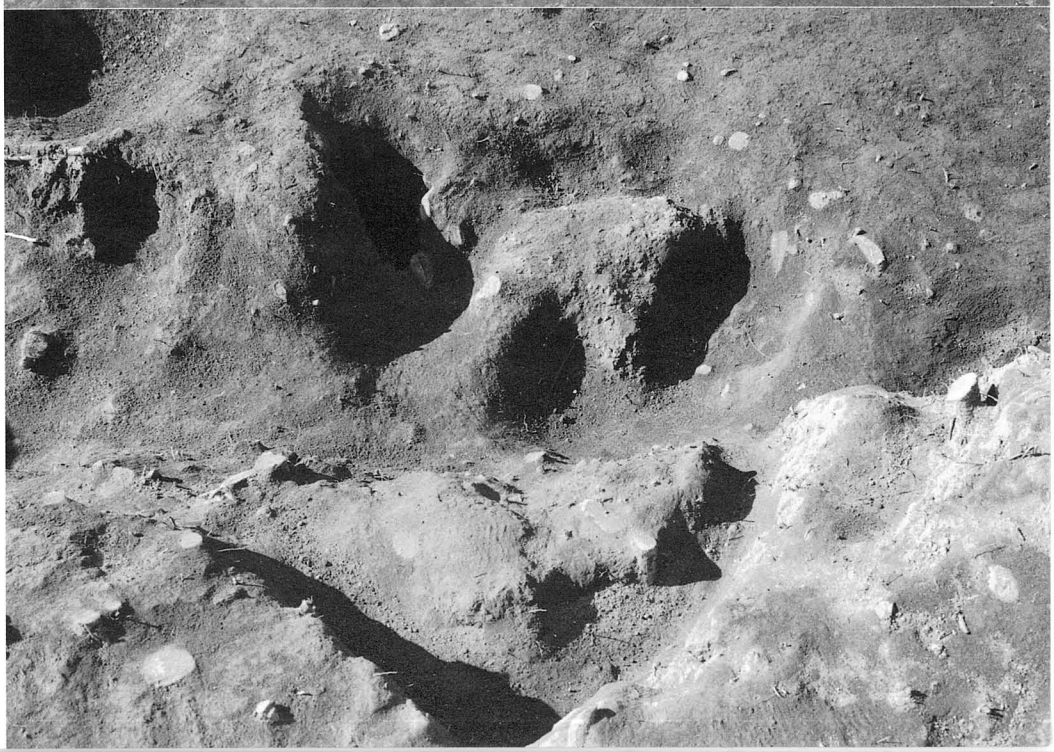
35号住居跡

35号住居跡
遺物出土状況

35号住居跡
カマド調査状況

36号住居跡

36号住居跡
遺物出土状況



36号住居跡
カマド掘方

図版 4

37号住居跡

37号住居跡
遺物出土状況

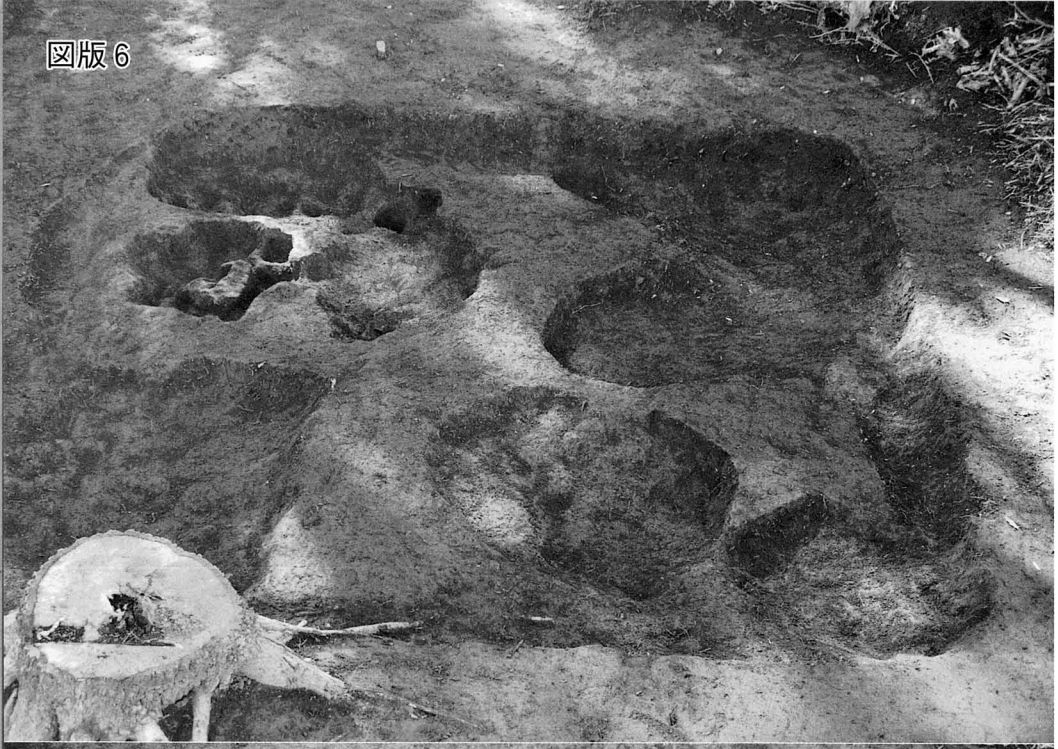
37号住居跡
カマド調査状況

37号住居跡
カマド掘方

38号住居跡

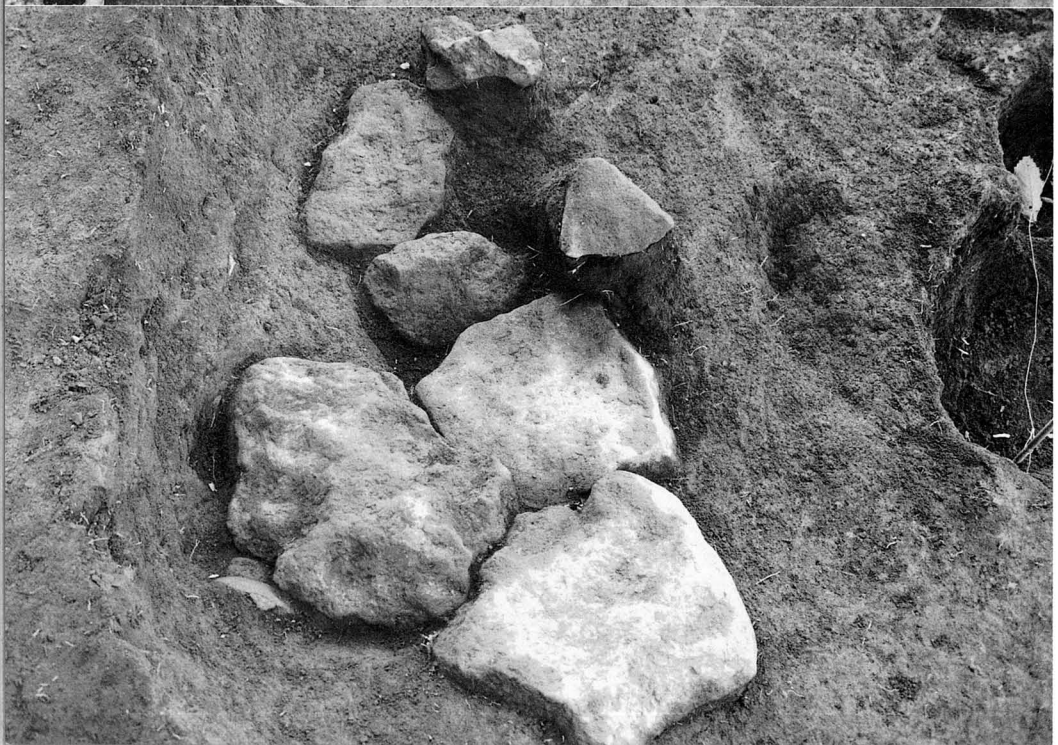
38号住居跡
遺物出土状況

図版 6



39号住居跡

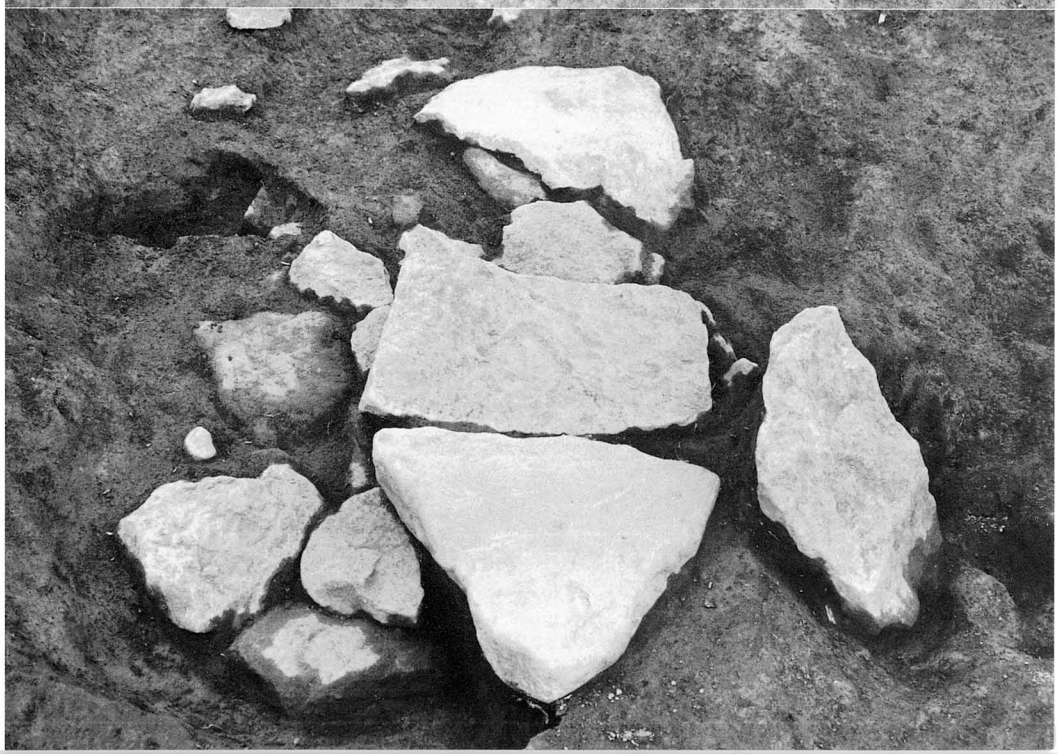
39号住居跡
遺物出土状況



39号住居跡
石組遺構

40号住居跡

40号住居跡
遺物出土状況



40号住居跡
石組遺構

図版 8

41号住居跡

41号住居跡
カマド掘方

42号住居跡

42号住居跡
遺物出土状況

42号住居跡
カマド掘方

43号住居跡

図版10

43号住居跡
遺物出土状況

43号住居跡
カマド掘方

44号住居跡

44号住居跡
遺物出土状況

44号住居跡
カマド調査状況

44号住居跡
カマド調査状況

図版12

45号住居跡

45号住居跡
遺物出土状況

45号住居跡
石組遺構

46号住居跡

47号住居跡

47号住居跡
カマド調査状況

図版14

13号土坑

14号土坑

D・E－3区
精査状況

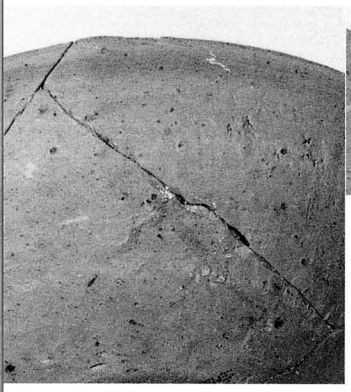
1号竪穴状遺構

1号竪穴状遺構
古銭出土状況

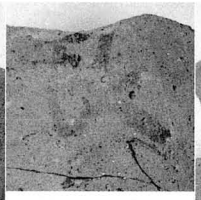
5～7号溝状遺構

35号住居跡出土遺物

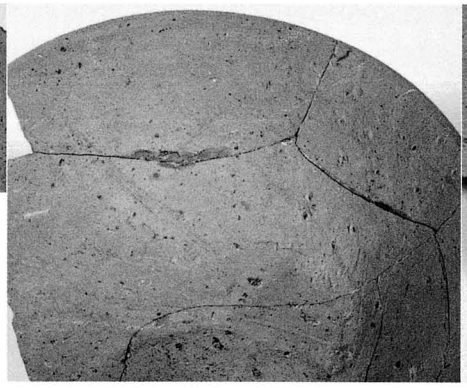
35号住ー12・13



35住ー1

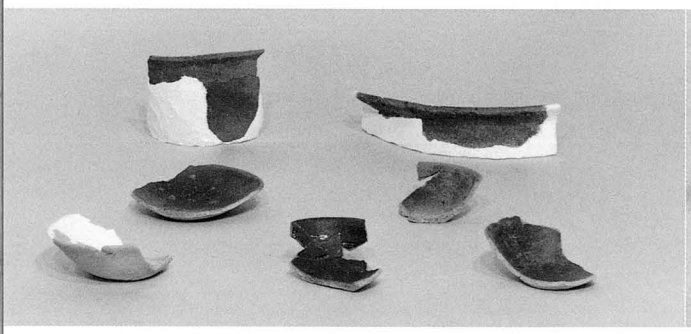


35住ー2

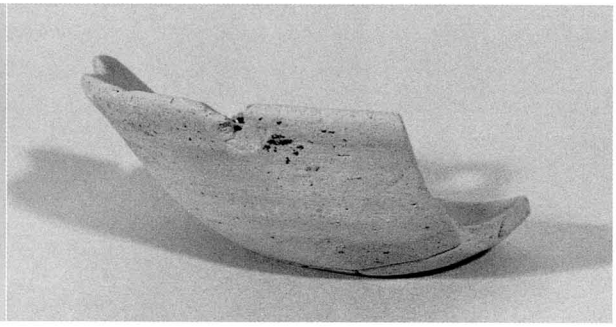


35住ー2

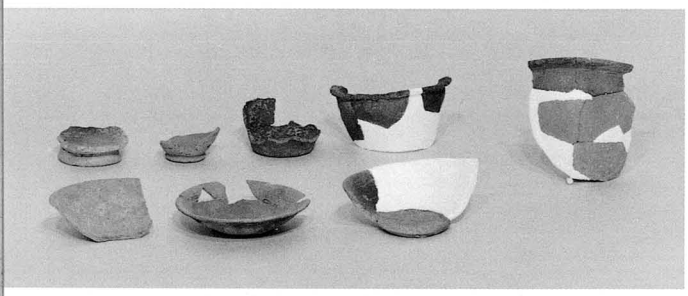
35住ー10



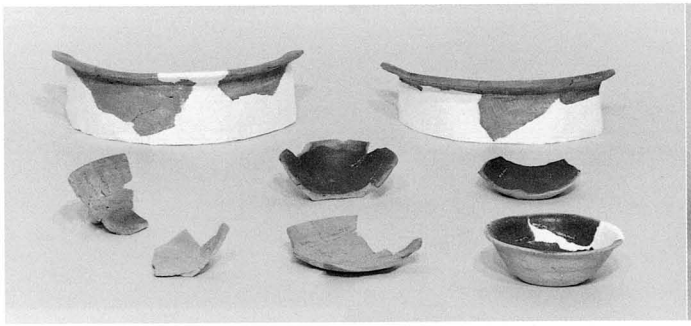
36号住居跡出土遺物



36住ー1



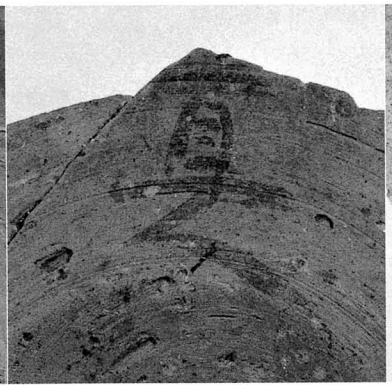
37号・38号（右端）住居跡出土遺物



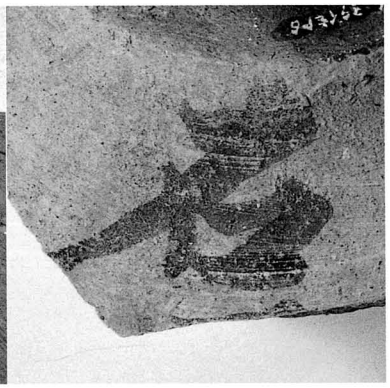
39号住居跡出土遺物

39住ー 3

39住ー 2



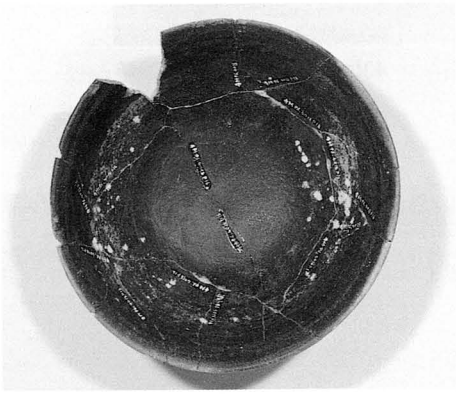
39住ー2



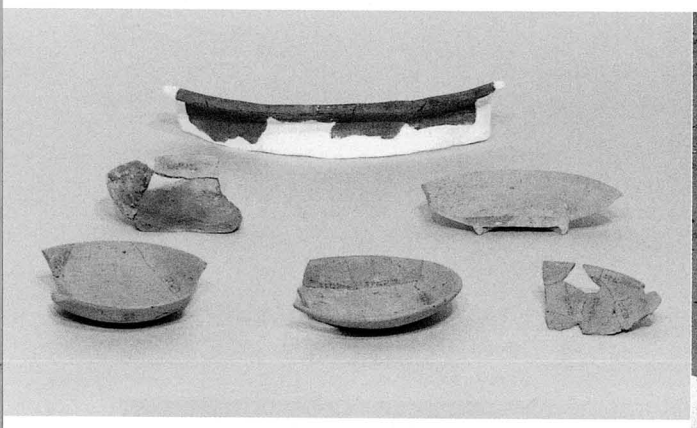
39住ー 5

40号住居跡出土遺物

40住ー 3



40住ー 6

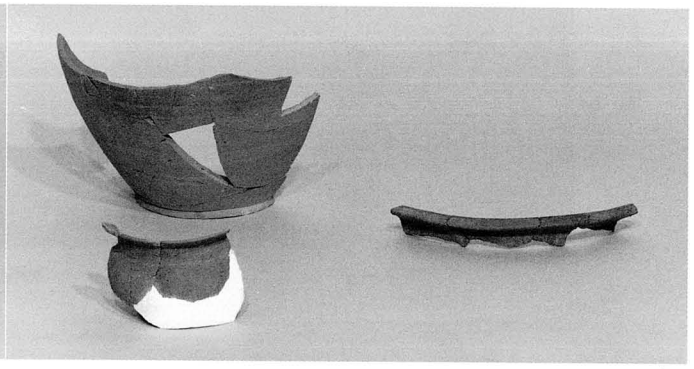


41号住居跡出土遺物

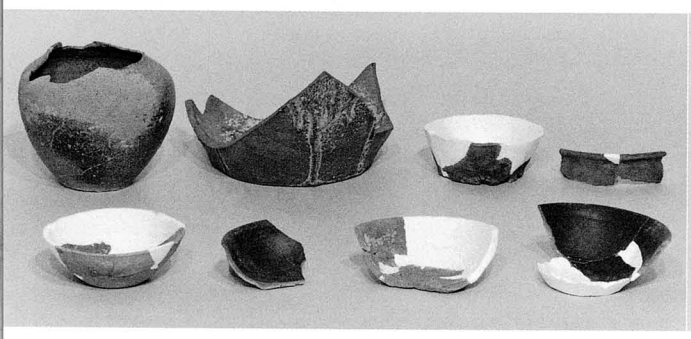
41住ー1

41住ー2

42号住居跡出土遺物



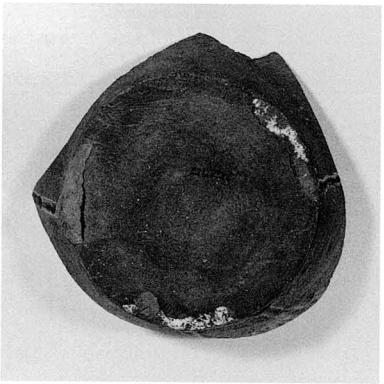
43号・47号（右端）住居跡遺物



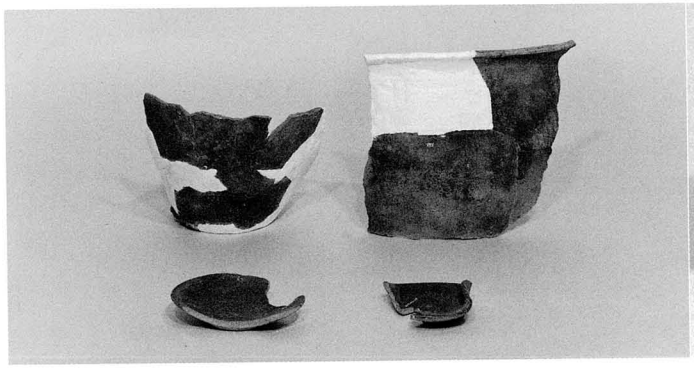
44号住居跡出土遺物

43住ー3

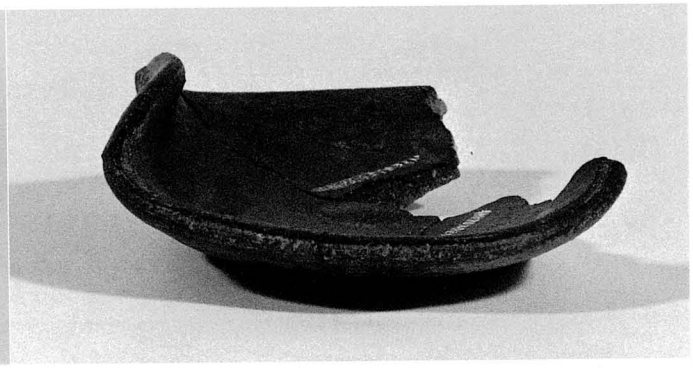
44住ー9



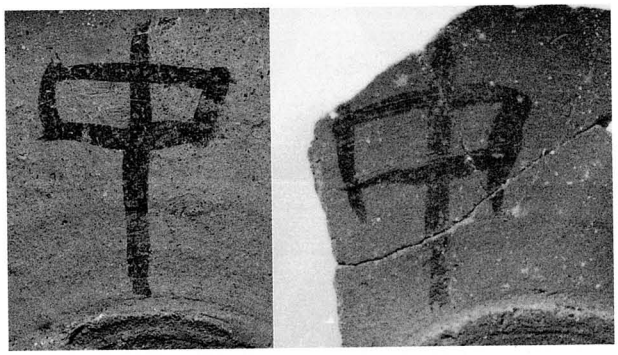
44住ー10
底部



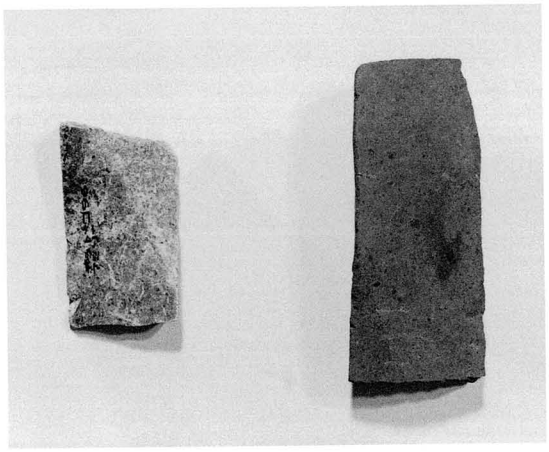
45号住居跡出土遺物



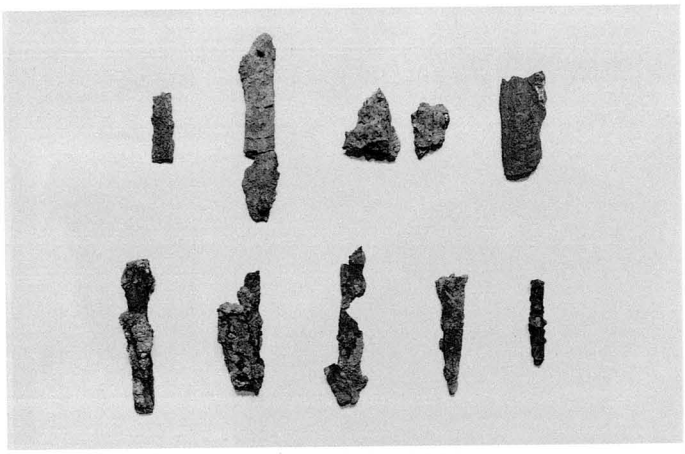
45住ー3



45住ー2

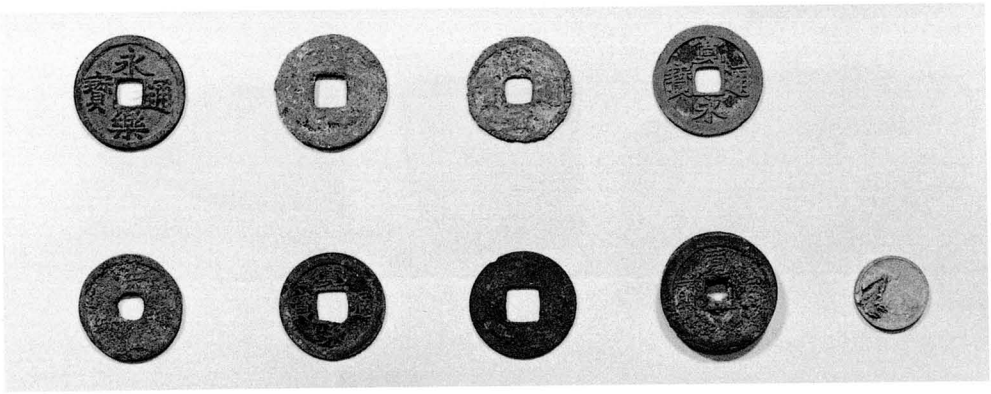


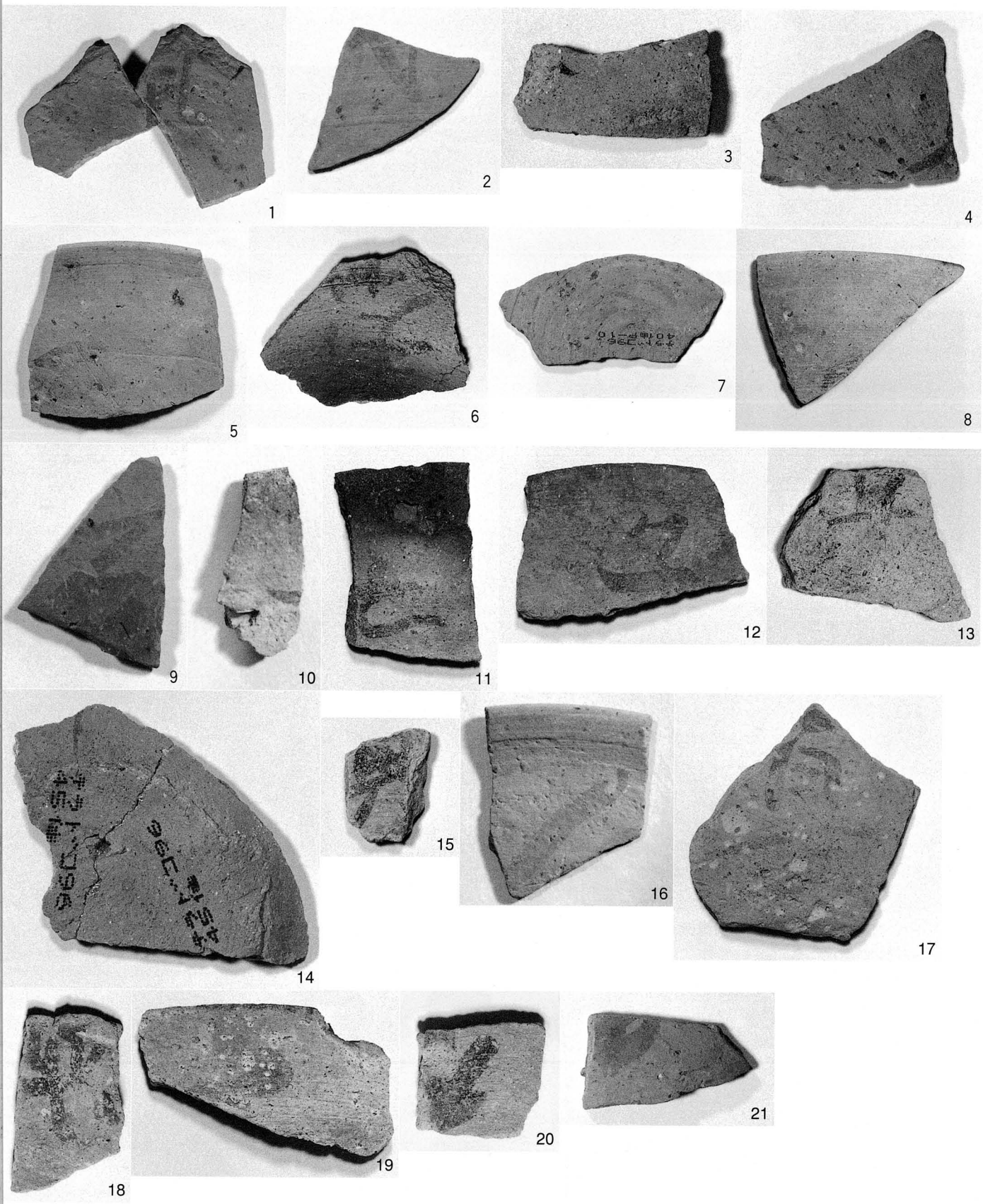
砥石（7号・8号溝状遺構出土）



鉄製品

古銭





墨書土器

報告書抄録

書名	寺所遺跡（てらどこいせき）第２次発掘調査報告	
副題	特定環境保全公共下水道事業終末処理場（いずみの里公苑）建設に伴う発掘調査報告	
巻次		
シリーズ名・番号	大泉村埋蔵文化財調査報告　第14集	
編著者名	伊藤公明・渡邊泰彦	
編集・発行機関	大泉村教育委員会	
連絡先	〒409-1502 山梨県北巨摩郡大泉村谷戸3025　Tel 0551－38－3115	
印刷所	ほおずき書籍株式会社	
発行日	平成12年３月31日	
てらどこいせき 寺所遺跡	ふりがな	やまなしけんきたこまぐんおおいずみむらにしいであざどうじき
	遺跡所在地	山梨県北巨摩郡大泉村西井出字堂敷
	市町村コード	19406
	地形図名	1/25,000谷戸
	位置及び標高	北緯35°51′15″　東経138°23′20′　標高770ｍ
	主な時代	平安時代・近世
	主な遺構	住居跡、土坑、溝状遺構
	主な遺物	土師器、須恵器、灰釉陶器
	特殊遺構・遺物	
	調査期間	平成８年６月17日～平成８年11月22日・平成11年２月15日

大泉村埋蔵文化財調査報告　第14集

寺所遺跡（第２次発掘調査報告）

――特定環境保全公共下水道事業終末処理場
（いずみの里公苑）建設に伴う発掘調査報告――

平成12年３月31日　発行

発　行　大泉村教育委員会

印　刷　ほおずき書籍株式会社
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5
電話（026）244-0235㈹